

鹿児島県史料集(Ⅲ)

薩摩國

新田神社文書



鹿児島県史料集(Ⅲ)

薩摩国

新田神社文書

鹿児島県史料刊行会

海防

鎮西為案被決違事

本日開案河教書

昨日到案

早候候作下

本日言上

案案事有

沙弥

新田

五 鎮西奉行施行狀

龜島國降伏祈

可敬一言

今月廿日

官官廟

重就近例

係於

新設

是處

是處

正德

薩摩國

七 島津忠宗施行狀

72

薩摩國新田官執事并

五大院主職事就同東

御藏書代相傳被書

書又御年貢書古帳急

被其書法

似此送

永仁五年正月

親市三郎景康

一〇 左衛門尉朝員泰善

薩摩國新田官執事

當國主薩摩新田官執事

并時書

辭

薩摩國新田官執事

東平寺

建永三年八月

薩摩國新田官執事

在中朝

一七 雜訴決斷所牒

刊行のことば

鹿児島県史料刊行の仕事も、本年度四年を迎えました。

このたび第三輯として「薩摩国 新田神社文書」をとりあげるまでには、委員の方々に、三回にわたってお集り願ひ決定したのであります。

この刊行は、校訂から校閲の仕事まで、すべて、五味克夫委員の御手をわずらわして誕生したのであります。鹿児島大学の太内初夫氏、新田神社の種子田八雲氏の御好意と御協力に対し厚く御礼申し上げます。

昭和三十八年 三月

鹿児島県立図書館長

久保田 彦穂

序 文

鹿兒島県川内市新田神社は薩摩国一宮社として古来より名社の聞えが高い。又同神社には学界にも貴重史料として広く認められている多数の古文書が襲蔵されている。それらの古文書は「薩摩国新田神社文書」として昭和十八年三月、新田神社より刊行されたことがある。(印刷所 鹿兒島県教育会印刷部) (A5判二三六頁) 刊行の事情、経過等については同書の序文並びに凡例に詳述してある。参考のため、これを掲げておこう。

「 序」

鹿兒島県は神代以来の聖地にして、三山陵以下数多の由緒深き聖蹟に富めり。光輝ある紀元二千六百年を迎ふるにあたり、わが紀元二千六百年鹿兒島県奉祝会に於ては、記念事業の一として県内の聖蹟顯彰を図り、これが為、爰に第一輯より順次六部の調査物を刊行せり。

国幣中社新田神社は、皇孫瓊杵尊を奉斎し、古来公武の尊崇をあつめたる由緒深き靈社なれば、本会は夙よりその顯彰を企図しありしが、適々新田神社宮司種子田八雲氏におかれても、当社の記念事業として、その襲蔵にかかる古文書八巻の刊行を企てられるを聞き及び、本会はこれが編纂の方途を援助し、以てその顯彰の一助となさんとせり。実に古文書の公刊は、当社の顯彰には最も資する所多きものにして、且つそれが学界に裨益する所も大なりと信ず、茲に、漸く稿成り、近くこれが上梓をみんとするに当り、一言本書の成るに至りし次第を述べて以て序に代ふ。

昭和十八年三月

紀元二千六百年鹿兒島県奉祝会々長

鹿兒島県知事 薄 田 美 朝

「 凡 例」

一、本書は国幣中社新田神社所蔵古文書の公刊を目的とし、併せて関係諸文書をもとめて之を収録した。

一、新田神社所蔵の古文書は、巻軸仕立として執印家文書六巻、粗執印家文書巻軸に整理されてゐるが、いま之を年代順に編輯し、所屬巻数は一々附記することとした。

一、現存古文書以外に、嘗て執印文書、粗執印文書として薩摩旧記雜録に収録せられてゐるものを蒐めて第二部参考文書とした。薩摩旧記雜録は鹿兒島県立図書館本を

底本とし、其他教書を以て校訂したが、既に原本に於て誤謬錯脱等と思はれる箇所少しとしない。

一、入来院文書より参考資料として数点採録させて頂いた。

一、神代三陵志は、文政十二年、後醍醐天皇の著になり、その引用するところの古文書十点余は悉く当社の史料として最高の価をもつもの許りであるが、之を以て第三部参考文書とした。

一、新田八幡御縁起は、原本現存せず、写本二部あり。しかも伝写の間何れも誤写多く、その明白なるものは私に之を改訂したが、尚、誤字なるか古字休なるか分明せざるものについては其儘に示して後考を俟つこととした。

一、本書の校訂に当り、元鹿兒島県史編纂委員、立命館大学教授水上一久氏(註、後金沢大学教授、昭和卅六年死去)は、終始多大の勞を以て、御指導下されたことに對し、謹んで深甚の謝意を捧げる。

一、前後四年の永きにわたり、用紙の確保、印刷の遂行に特別の御配慮を賜つた県教育会印刷所主任佐々木慶助氏の御好意には、万端の感謝を奉る次第である。

一、しかるに當時は第二次世界大戦の最中で、戦局も苛烈の度をきわめ、鹿兒島市も戦火に焼かれ、終戦後は一時混乱状態を経過せねばならなかつた。

ために折角刊行された同文書も所期の目的を達することが出来ず、僅か一部に配布されたに止まり、学界にも殆んど認められることなく、散佚し去つてしまつた。

右様の事情で現在同文書を手することは極めて難しく、折角、広く鹿兒島県の歴史、更には日本中世史を研究せんとするものにとつて、与えられた貴重な史料が利用されぬままにあることは甚だ遺憾なことといわねばならない。ここに鹿兒島県史料刊行委員会は新田神社宮司種子田八雲氏の御賛同を得、先学の業績を生かし乍ら、体裁を改め、補正を加え、鹿兒島県史料集三として、同文書を再び刊行することとした。終りに種々心よく便宜を与えられた種子田八雲氏、並びに困難な時代にありながら、旧版「新田神社文書」刊行を達成された諸先学に謝意と敬意を表し、且つ本史料の再刊が大方の研究者の便に些少でも役立ちうれば幸いと考えるものである。

昭和三十八年二月

鹿兒島県史料刊行委員会

例 言

- 1 本書は鹿児島県川内市宮内新田八幡神社現蔵古文書、並びに旧蔵古文書を収録したものである。
- 2 第一部には新田八幡神社現蔵古文書を掲載した。掲載順は巻軸仕立の整理順とし、執印家文書（一一七巻）権執印家文書写（二巻）の順とした。旧版の「新田神社文書」（以下「旧版文書」とよぶ）は年代順の編集となつてゐるが、手紙証文その他、文書の体裁を損い、文書成立の事情が不明となる恐れがあるので、今回はその方法をとらなかつた。但し表題には「旧版文書」の目録番号を算用数字で記し、更に巻末には編年順の日録を付して聊かでも研究上の不便を補うことにつとめた。
- 3 頭注は大むね「旧版文書」記載のものを生かしたが、若干修正を加えたものもある。但し表題は適宜改めたものが少くない。
- 4 第二部には、薩藩旧記雑録収録の執印文書、権執印文書等、新田八幡宮社家旧蔵文書で第一部現蔵文書と重複しないものを年代順に掲載した。「旧版文書」と同じく鹿児島県立図書館本を底本としたが、完全を期するためにはこれより更に多くの古文書を追補している島津家本（現在東大史料編纂所蔵）によらなければならぬこと勿論である。しかし今直ちに島津家本全部について関係文書を検出採録することは種々の事情で不可能であるため、今回は県立図書館本によつて補正を加え、更に島津家本中、九州史料叢書「薩藩旧記雑録」竹内理三編、前編九まで既刊、「大日本史料」等刊行史料所収のもの、及び未刊分の中から数点、県立図書館本未採録の文書を加えさせていたこととした。それらについては一々島津家本によることを注記した。しかしその他にもなお執印、権執印文書等、新田八幡宮社家旧蔵文書として収録されているものがあると思われるので、それらについては機会を改めて追補を行う予定である。但し島津家本中、執印文書、権執印文書として収録されているものの中には、大隅国正八幡宮関係のものも多数混在していることは注意すべきであらう。本書ではそれらについては採録しなかつた。又明らかに偽文書と思われるもの、及び直接新田八幡宮に關係のないものも省略し

た。又逆に關係のある文書についても新田八幡宮社家旧蔵以外の文書は全部省略した。これらについても他日關係文書として追補を行う予定である。

- 5 「旧版文書」では「入来院文書」（旧版）より参考史料を抄録しているが、「入来院文書」はその後昭和三十二年復刊され、広く学界に利用されているので、今回は同文書よりの抄録は省略した。但し第三部に「祁答院旧記」所収文書をのせたが、これについては県立図書館所蔵写本を底本とし「入来院文書」（新版）所載の「祁答院旧記」を参考にさせていただいた。

- 6 第四部には「神代三陵志」所収文書を、第五部には「新田八幡宮縁起」を「旧版文書」の体裁にしたがつて収録した。但し明らかな誤脱と思われるものについては訂正を加えた。

- 7 第六部の系図は「旧版文書」掲載のものをそのまま転載した他、参考資料として県立図書館所蔵「地誌備考」所収のものを併せて掲げておいた。

- 8 印刷の都合で、漢字については当用漢字に改めたものが少くない。又変体仮名もすべて通用体の平仮名に改めた。又花押も省略せざるを得なかつた。

記号は次の如くである。

イ 抹消の部分は左傍に「」を付し、右傍に訂正の文を記した。

ロ 傍注（ ）内は「旧版文書」記載のものを基にし、これに訂正を加えたものである。字句について推定の場合（カ）の如く記し、不明の場合は（ママ）と記した。

ハ 朽損の部分は字数により□又は□を用いた。

ニ 端裏書等の場合は「」を以て示し、（ ）によつて説明を加えた。

- 9 本書の編集、校訂に当り能力、技術、時間等の諸事情から正確を期し得なかつた点が多く、「旧版文書」を損う恐れなしとしない。今後の追補訂正を期したい。

- 10 本書の編集、校訂には主として鹿児島大学五味克夫が当り、第一部一四・一一五号連歌懷紙の解説には同大学大内初夫が協力した。

目次

第一部 新田神社現藏文書

〔第一号〕

一	(元弘三年)六月四日	後醍醐天皇諭旨	一
二	(元弘三年)九月十二日	春宮亮某奉書案	一
三	元弘三年七月三日	後醍醐天皇諭旨	一
四	曆應二年十一月廿一日	光明院口宣案	一
五	正應四年六月十七日	鎮西奉行施行狀	一
六	正應四年三月六日	島津忠宗施行狀	一
七	正應六年四月廿日	島津忠宗施行狀	一
八	永仁三年七月十一日	左衛門尉朝員奉書	二
九	永仁三年五月六日	關東御教書	二
一〇	永仁五年六月	左衛門尉朝員奉書	二
一一	正安三年六月六日	鎮西下知狀	二
一二	元亨三年九月十六日	鎮西御教書	三
一三	元亨三年九月十六日	鎮西下知狀	三
一四	元亨三年十一月十六日	鎮西御教書	三
一五	正中二年十一月十八日	沙弥宗覺書狀	三
一六	元德二年十月廿九日	鎮西下知狀	三
一七	建武二年八月十一日	雜訴決斷所牒	四
一八	曆應四年七月廿五日	牛原元貞請文	四
一九	曆應五年三月五日	東郷重清請文	四
二〇	康永元年七月廿九日	高重茂奉書	五
二一	應永十二年正月廿日	平重足契約狀	五
〔第二号〕			
二二	寬元元年八月十日	五大院主迎阿讓狀	五
二三	國分友兼重申狀并具書案		七
二四	正應二年十月	日 國分友兼重申狀案	七
二五	正應二年四月七日	關東下知狀案	一〇

二四	應長二年六月十七日	伴法忍讓狀案	一〇
〔第三号〕			
二五	新田宮執印并五大院々主職文書案		三
二六	建仁三年十月廿六日	北条時政下文案	三
二七	建仁三年十二月九日	北条時政雜掌奉書案	三
二八	承久三年十月三日	執印康友解狀案	三
二九	貞永元年閏九月八日	關東御教書案	三
三〇	天福元年六月廿八日	關東御教書案	三
三一	文曆二年九月十六日	關東御教書案	三
三二	(年未詳)十一月四日	島津忠義奉狀案	三
三三	嘉祿三年十二月廿四日	關東御教書案	三
三四	仁治元年七月三日	北条泰時書狀案	三
三五	(年未詳)七月十二日	山田忠繼請文案	三
三六	弘長三年九月三日	關東御教書案	三
三七	文永五年三月	日 江口信阿弥陀仏讓狀	四
三八	(年未詳)十月廿一日	石清水八幡宮檢校御教書案	四
三九	弘安十一年五月廿一日	別府多田氏名主代行蓮請文	四
四〇	嘉元四年五月廿五日	阿多五大院田名主蓮道請文	四
四一	元亨三年四月十七日	阿多泰忠請文	五
四二	嘉曆二年八月三日	道嚴安堵狀案	五
四三	嘉曆四年正月廿三日	鎮西御教書	五
四四	曆應四年六月廿三日	山田宗久請文案	五
四五	康永三年二月廿五日	ゆた六郎忠経質券	五
四六	觀應二年七月廿四日	惟宗時友請文	六
四七	(延慶三年)九月十八日	惟宗友行書狀	六
四八	嘉慶二年九月	日 執印友躬請文案	六
四九	應永三年二月十三日	阿蘇谷久治寄進狀	六
〔第四号〕			
五〇	永仁二年七月卅日	島津忠宗番役覆勘狀	七
五一	永仁三年四月十六日	島津忠宗番役覆勘狀	七

四一	元應二年十二月十日	島津忠宗問狀	七
四二	建武三年三月廿八日	足利尊氏軍勢催促御教書	七
四三	建武三年四月廿八日	執印友雄着到狀	七
四四	建武四年二月十二日	足利直義軍勢催促御教書	七
四五	康永三年二月四日	足利幕府奉行連署奉書	七
四六	觀應二年八月廿八日	尾張義冬軍勢催促狀	六
四七	觀應三年六月五日	足利義詮軍勢催促御教書	六
四八	文和二年三月十日	足利義詮御感御教書	六
四九	文和二年四月廿六日	一色直氏軍勢催促狀	六
五〇	文和三年七月十日	一色範氏感狀	六
五一	文和三年八月廿九日	一色直氏感狀	六
五二	文和三年九月三日	足利尊氏御感御教書	六
五三	文和四年三月三日	島津師久軍勢催促狀	五
五四	(年未詳)六月十七日	島津氏久書狀	五
五五	文和五年二月廿二日	島津貞久施行狀	五
五六	(年未詳)九月廿七日	島津師久書狀	五
五七	(年未詳)七月十六日	島津氏久安堵狀	五
五八	貞治七年二月三日	島津氏久契約狀	五
五九	某議狀案斷簡并左衛門尉朝員奉書案		五
イ	正安二年五月十日	某議狀斷簡	五
ロ	正安二年八月十七日	左衛門尉朝員奉書案	五
六〇	應永十年十月九日	島津元久安堵狀	五
六一	應永廿八年八月廿三日	島津久豐知行充行狀	五
【第五号】			
六二	文永四年十月廿三日	執印友員相博狀案	三
六三	永仁五年十一月十一日	執印道教談狀	三
六四	嘉曆二年十月廿八日	沙弥教忍同道惠連署田地壳券案	三
六五	嘉曆二年七月卅日	沙弥道嚴惟宗友雄連署田地壳券案	三
六六	正平七年十月廿二日	執印友躬避狀	三
六七	應永廿年六月廿九日	沙弥願真讓狀	三

六八	文安三年十二月十三日	前遠江守康令讓狀	三
六九	新田宮執印職并五大院々主職文書案		三
イ	承久三年十月三日	執印康友解狀案(略)	三
ロ	永仁三年五月六日	關東御教書案	三
ハ	永仁五年六月	左衛門尉朝員奉書案	三
七〇	寛元元年八月十日	五大院主迎阿讓狀案(略)	三
【第六号】			
七一	宝治元年十月廿五日	關東下知狀案	三
七二	鹿兒島郡司并并濟使職文書案		三
イ	建仁元年十一月廿二日	北条時政奉書案	三
ロ	(年未詳)十二月廿二日	山田忠繼請文案	三
ハ	弘長元年四月五日	六波羅御教書案	三
七三	(年月日未詳)	引付衆交名注文写	三
七四	異國降伏祈禱劍馬等進獻文書案		三
イ	正應六年四月廿日	關東御教書案	三
ロ	正應六年三月廿日	關東御教書案	三
ハ	正應六年五月十一日	島津忠宗書下案	三
ニ	正應六年五月十一日	島津忠宗書下案	三
七五	(年月日未詳)	國分友兼重申狀案	三
七六	永仁五年六月	左衛門尉朝員奉書案(略)	三
七七	執印氏具書案		三
イ	曆應四年六月廿三日	山田宗久請文案	三
ロ	曆應四年四月七日	沙弥禪嚴請文案	三
七八	(年月日未詳)	某請文案	三
七九	康永元年九月廿四日	武光忍性請文案	三
【第七号】			
八〇	曆應二年八月十五日	酒匂久景注進狀	三
八一	慶長四年十月廿八日	島津忠恒知行充行日録	三
八二	(年未詳)正月十二日	島津家久書狀	三
八三	文明十年三月六日	島津氏家老連署神領寄進狀	三

八四	(年未詳)五月十日	島津氏家老連署書狀	三
八五	(年未詳)二月八日	島津氏家老連署書狀	三
八六	(年未詳)後八月廿八日	島津氏家老連署書狀	三
八七	慶長七年十二月廿四日	島津氏家老連署社領寄進狀	三
八八	慶長十年正月廿九日	島津氏家老連署社領寄進狀	三
八九	(年未詳)九月廿日	御遷宮覺書	三
九〇	寛文三年六月十九日	權執印外二名連署請文	三
九一	慶長二十年正月四日	京泊船改条目	三

〔權執印文書古写〕

九二	權執印良連重申狀并具書案	三
イ	元德三年 二月 日	權執印良連重申狀案
ロ	元亨四年 八月廿八日	領家御教書案
九三	元亨四年 八月廿八日	領家下知狀案
九四	元亨五年閏正月 日	權執印妙慶申狀案
九五	正中三年 四月廿二日	權執印妙慶慶狀案
九六	正中三年 四月廿八日	權執印妙慶慶狀案
九七	嘉曆元年十二月四日	大隅新三郎久願書狀案
九八	嘉曆二年 七月五日	鎮西御教書案
九九	嘉曆二年 七月五日	鎮西御教書案
一〇〇	新田宮雜掌道海申狀并具書案	三
イ	嘉曆三年 七月 日	新田宮雜掌道海申狀案
ロ	嘉曆二年 七月五日	鎮西御教書案
一〇一	嘉曆三年 新田宮國分氏相論証人交名注文案	三
一〇二	嘉曆三年 七月三日	鎮西御教書案
一〇三	元德二年 三月十二日	權執印良連請文案
一〇四	元德二年 六月 日	新田宮雜掌道海申狀案
一〇五	元德二年 六月 日	新田宮雜掌道海申狀案
一〇六	元德二年 八月五日	鎮西御教書案
一〇七	寺家政所下文并富磨手繼狀案	三
イ	永万元年 七月 日	寺家政所下文案
		完

ロ	仁治二年正月十九日	富磨手繼狀案	三〇
一〇八	鎮西御教書		三〇
イ	元德三年五月十日	鎮西御教書	三〇
ロ	元德三年七月九日	鎮西御教書	三〇
一〇九	元德三年五月	新田宮雜掌道海重申狀案	三一
一一〇	元德三年六月	新田宮雜掌道海重申狀案	三一
一一一	新田宮五代院文案		三一
イ	元德三年六月十一日	新田宮五代院領家下知狀案	三一
ロ	元德三年三月十一日	後醍醐天皇繪旨案	三一
ハ	元德三年七月一日	新田宮領家雜掌奉書案	三一
一一二	新田宮雜掌道海重申狀并具書案		三一
イ	正慶元年八月十日	鎮西御教書案	三一
ロ	元德四年七月	新田宮雜掌道海重申狀案	三一
ハ	元德二年七月二日	鎮西御教書案	三一
一一三	元亨三年八月	新田宮本神人等名帳写	三一
一一四	元亨三年正月五日	何人百韻連歌懷紙	三一
一一五	元應二年六月十一日	何人百韻連歌懷紙	三一
一一六	權執印氏具書案		三一
イ	元亨四年十一月十日	島津貞久覆勘狀案	三一
ロ	元德三年十月十七日	紀俊正着到狀案	三一
一一七	元德四年七月	新田宮雜掌道海申狀案	三一
一一八	元德四年七月	新田宮雜掌道海申狀案(略)	三一
一一九	元弘三年七月三日	權執印良連着到狀案	三一
一二〇	正和二年十月	權執印妙慶申狀案	三一

第二部 薩藩日記雜錄所収文書

一	保延元年十月廿五日	院主石清水權守主大法師某下文	三二
二	長寛二年六月一日	五大院主桑田信包申狀	三二
三	治承元年十一月五日	新田宮所課染絹請取狀案	三二
四	治承元年十二月十三日	新田宮校校僧靜秀去狀案	三二
五	建久五年五月	新田八幡宮所司等申狀	三二

六	建久九年三月	日	高城新郡司豐津友安奉免狀	蓋
七	建仁四年二月十日	日	紀政家寄進狀	蓋
八	承久三年八月廿二日	日	薩摩國下文	蓋
九	寬喜二年三月七日	日	八幡新田宮所司神官等請文案	蓋
一〇	貞永元年十二月廿日	日	執印康兼下文案	蓋
一一	嘉禎四月十二日	日	八幡新田宮權大宮司大藏種良陳狀	蓋
一二	延應元年五月	日	寺家公文所下文	蓋
一三	宝治元年十月廿五日	日	關東御教書案	蓋
一四	建長元年八月十一日	日	六波羅御教書案	蓋
一五	建長三年六月廿八日	日	新田宮權執印見參料請取狀案	蓋
一六	文永四年四月廿七日	日	奉行人藤原某奉書	蓋
一七	文永四年十月二十九日	日	左衛門尉友員相博狀	蓋
一八	文永四年十一月七日	日	權執印水慶重申狀	蓋
一九	文永十年八月廿三日	日	紀持房証狀	蓋
二〇	建治三年十一月七日	日	雜掌某書狀案	蓋
二一	弘安元年三月十一日	日	道胤書下	蓋
二二	弘安元年後十月十七日	日	六波羅御教書案	蓋
二三	弘安元年閏十月廿二日	日	某下文	蓋
二四	弘安二年五月十日	日	龜山上皇院宣案	蓋
二五	弘安三年八月	日	平重峯申狀案	蓋
二六	弘安四年閏七月廿六日	日	沙弥某奉書	蓋
二七	弘安八年二月廿日	日	關東御教書案	蓋
二八	弘安九年正月廿一日	日	大前道調藤原久氏連署書下案	蓋
二九	弘安九年九月廿三日	日	按察使下文案	蓋
三〇	弘安九年十月	日	石築地用途文配注文案	蓋
三一	正應元年六月	日	串木野忠行後家尼如何申狀	蓋
三二	正應元年七月廿五日	日	本仏書下案	蓋
三三	正應元年八月十五日	日	本仏書下案	蓋
三四	正應二年二月	日	新田宮雜掌重申狀	蓋
三五	正應二年七月四日	日	新田宮命婦建部氏女重申狀案	蓋

三六	正應二年八月二日	日	關東下知狀案	蓋
三七	正應二年八月十七日	日	鎮西奉行連署奉書	蓋
三八	正應五年二月五日	日	鎮西奉行奉書	蓋
三九	永仁六年十月	日	新田宮權執印妙慶代僧榮仙重申狀	蓋
四〇	嘉元三年十月	日	新田宮雜掌道久重申狀	蓋
四一	嘉元三年十一月二日	日	鎮西御教書案	蓋
四二	嘉元三年十一月廿日	日	平某施行狀案	蓋
四三	德治三年八月	日	權執印妙慶申狀	蓋
四四	延慶二年十二月十二日	日	鎮西下知狀案	蓋
四五	延慶三年十一月十二日	日	鎮西御教書案	蓋
四六	延慶三年十二月五日	日	沙弥道雄起請文案	蓋
四七	文保元年七月晦日	日	薩摩國御家人交名注文案	蓋
四八	文保元年十月十一日	日	円仏讓狀	蓋
四九	正中二年九月五日	日	鎮西御教書	蓋
五〇	正中二年十一月十八日	日	沙弥宗覺書狀案	蓋
五一	元德二年十月廿五日	日	鎮西御教書案	蓋
五二	正慶二年四月一日	日	鎮西御教書并島津貞久書下案	蓋
五三	元弘三年十月廿三日	日	權執印良通着到狀案	蓋
五四	元弘三年十月	日	預所肥後守書下案	蓋
五五	元弘三年十二月十二日	日	新田宮領家雜掌沙弥某奉書	蓋
五六	建武元年十月七日	日	國宣案	蓋
五七	建武二年後十月一日	日	某書下案	蓋
五八	建武三年三月廿八日	日	足利尊氏軍勢催促狀案	蓋
五九	建武三年四月廿五日	日	紀俊正着到狀案	蓋
六〇	建武三年六月	日	紀俊正軍忠狀案	蓋
六一	建武四年三月廿五日	日	紀俊正軍忠狀案	蓋
六二	建武四年五月十六日	日	足利直義御教書案	蓋
六三	建武四年八月	日	權執印代俊正軍忠狀案	蓋
六四	建武四年十二月	日	權執印代俊正軍忠狀案	蓋
六五	建武五年五月廿八日	日	執印友雄契狀案	蓋

第三部 祁答院旧記所収文書

六六	曆応二年 六月廿三日	酒匂久景外一名連署充行状案	六六
六七	曆応二年 七月 日	権執印代俊正軍忠状案	六七
六八	曆応二年 八月六日	酒匂久景充行状案	六八
六九	曆応三年 三月三日	足利直義御教書案	六九
七〇	曆応三年 五月十五日	島津貞久軍勢催促状	七〇
七一	曆応四年 七月七日	島津貞久軍勢催促状案	七一
七二	曆応五年 五月廿六日	島津貞久軍勢催促状案	七二
七三	曆応五年 六月五日	八幡新田宮所司神官等請状	七三
七四	康永二年 九月 日	権執印代俊正軍忠状案	七四
七五	康永二年 十一月十日	権執印代俊正軍忠状案	七五
七六	貞和五年 二月 日	沙弥道義奉書案	七六
七七	貞和五年 八月十二日	平重躬寄進状	七七
七八	觀応二年 八月十八日	権執印良運議状案	七八
七九	觀応二年 十月二日	尾張義冬軍勢催促状	七九
八〇	貞治七年 三月廿七日	島津師久充行状	八〇
八一	(必安元年)四月二日	島津氏久書状	八一
八二	天正十六年閏五月廿二日	島津氏家老連署書状	八二
八三	慶長六年 正月廿四日	島津氏知行充行日録	八三
八四	(年未詳) 正月元日	樺山久高書状案	八四
八五	(年未詳) 正月十一日	伊集院忠棟書状案	八五
八六	(年未詳) 二月十日	沙弥某奉書	八六
八七	(年未詳) 三月八日	龜山上皇院宣案	八七
八八	(年未詳) 五月十日	島津氏家老連署書状	八八
八九	(年未詳) 六月五日	法服性禪奉書案	八九
九〇	(年未詳) 六月廿六日	龜山上皇院宣案	九〇
九一	(年未詳) 八月五日	法印某書状	九一
九二	(年未詳) 八月十日	左衛門尉時經書状案	九二
九三	(年未詳) 九月十八日	島津氏家老連署書状	九三
九四	(年未詳) 十一月廿二日	村田經安書状	九四

一	建保四年六月廿八日	祁答院郡司大前道秀寄進状案	一
二	康治元年三月一日	大前道助讓状案	二
三	元応二年五月 日	薩摩國新田宮雜掌重訴状案	三
四	元応二年十月廿二日	関東下知状	四
五	永正二年十二月 日	淡谷重貴寄進状案	五
第四部 神代三院志所収文書			
一	宝治元年十一月	新田宮所司神官等重解文	一
二	建長八年四月	新田宮所司神官等解文	二
三	正嘉二年九月十四日	左衛門少尉某遵行状案	三
四	文永五年正月	新田宮所司神官等解文	四
五	文永十二年(月日未詳)	新田宮所司神官等解文	五
六	弘安七年十一月	新田宮所司神官等解文	六
七	弘安十年三月	新田宮所司神官等解文	七
八	正応元年八月	新田宮雜掌申状	八
九	永仁三年月日未詳(官宣旨)	新田宮所司神官等解文	九
一〇	永仁七年三月	新田宮所司神官等解文	一〇
一一	正安四年九月廿五日	留守所下文案	一一
一二	元亨四年五月	新田宮所司神官等解文	一二
第五部 新田宮縁起			
第六部 執印氏系圖			
附 録			
編年目録			

第一部 新田神社現藏文書

〔第壹号〕

一 後醍醐天皇綸旨

70

新田宮所司神官等ノ訴フル國司初任神拝ニ関スル所宜ヲ直テ下スベク國司ニ仰セ給フ

薩摩國八幡新田宮所司神官等申、初任神拝所宣事任例不日可致其沙汰之由、被仰國司候了、可令存知給之旨、天氣所候也、仍執達如件、

(元弘三年) 六月四日

謹上 右衛門督殿

(註) 薄墨紙

兵部卿 (花押)

二 春宮亮某奉書案

54

新田宮神官等訴申兩条事、奏聞候之趣、於國領苗等者、令停止國領之流妨、於神拝者、急可切出之旨、可成所宣旨被仰下國司候了、且可令存知給、仍執達如件、

(元弘三年) 九月十二日

謹上 左中將殿

(註) 薄墨紙

春宮亮 (花押)

三 後醍醐天皇綸旨

72

薩摩國新田宮執印職、當知行之上者、不可有相違者、天氣如此、仍悉之、以狀、

元弘三年七月三日

(註) 薄墨紙

(岡崎範圍) 式部少輔範國 (花押)

四 光明院口宣案

78

口宣

准宗友雄

右人、宣任左衛門大夫者、宣下之旨如此、悉之、以狀、

曆應二年十一月廿二日

(註) 薄墨紙

(高階雅仲) 大藏卿

五 鎮西奉行施行狀

15

鎮西為宗社修造事、四月廿五日關東御教書并御事書昨日十六日到来、各案文如此、早任被仰下之旨為致沙汰、不日可令上府給也、仍執達如件、

正応四年六月十七日

(大友親泰) 前因幡守 (花押) (少式部卿) 沙弥 (花押)

新田宮執印殿

六 島津忠宗施行狀

14

今年二月三日關東御教書今日到来、如狀者、異國降伏御祈事、薩摩國々分寺、一宮、并為宗社、殊可抽丹誠之由、可令相觸、且每月可令執進卷數云々者、任被仰下之旨、專抽御祈禱誠精、每月無懈怠、可被進卷數也、仍執達如件、

正応四年三月六日

新田宮執印殿

(島津忠宗) 左衛門尉 (花押)

七 島津忠宗施行狀

16

為異國降伏御祈、御劍一腰、神馬一疋可獻一宮出

異國降伏祈禱ノタ
メ劍一腰神馬一疋
ヲ一宮ニ獻ス
薩摩國一宮ハ新田
宮ト開闢社ト相論
アリ鎮西談議所ハ
先例ニヨルベシト
裁許ス
先例アルニヨリ新
田宮ニ進獻ス開闢
社司訴訟ニ及ブ
之ノコトニヨリ一
宮ノ決定ヲ見タル
ワケニ非ズ

執印道教造管用途
ヲ犯用シ年貢ヲ抑
留セルニヨリ改易
時經ニ改補セルニ
所司神官等從ハズ
論旨ヲ下サルト
雖モ命ヲ聞カズ

幕府新田宮執印道
教ノ訴ニヨリ六波
羅ニ命ジテ本所ニ

事、今年七月十一日關東御教書今月廿日到来、案
文如此、於當國一宮者、新田宮與開闢社御相論之
間、先度令申子細於談議所之處、就近例先可致沙
汰之由、被仰出之間、新田宮依被近例、令進宮
畢、而開闢社司雖及訴訟、御成敗未斷之間、任先
日沙汰篇、所令進獻當宮也、依之不可有一宮治定
之議、且存其旨、且可被進請取候、仍執達如件、
正應六年四月廿日
左衛門尉(花押)
薩摩國新田宮執印殿

八 左衛門尉朝員奉書

(花押)
(寫真參照)

21

當宮執印職事、道教犯用造管用途、依令抑留年貢、
自去年五月被改易候了、仍被補任時經之處、諸司
神官等令違背時經、同心道教、不從度々下知云々
太白山也、且被改易道教上者、於令同意之輩者、
任注申、永可被改易其職也、將又雖被下論旨并武
家施行、不叙用之由有其間、是又頗狼藉也、不日
相觸所司神官等、御年貢已下無懈怠、可致其沙汰
之由被仰下也、仍執達如件、
永仁三年七月十一日
左衛門尉朝員奉
新田宮所司神官等御中

九 關東御教書

20

薩摩國新田宮執印三郎兵衛入道々教中、所職并名
田昌事、訴狀如此、相觸本所、可被執進雜掌陳狀

条家雜掌ノ陳狀ヲ
執進メシム

新田宮執印并五大
院々主職ヲ執印道
教ニ還補ス

山門郡司家泰新田
宮常見免田所當米
ヲ抑留ス
度々ノ召文ヲ遣セ
ドモ不參
在國司道嗣吉岡重
將
永仁七年七月廿七
日家泰請文

也者、依仰執達如件、

永仁三年五月六日

(大仏宣時)
陸奥守(花押)
(北条貞時)
相模守(花押)

(北条盛房)
丹波守殿
(北条久時)
刑部少輔殿

一〇 左衛門尉朝員奉書

(寫真參照)

22

薩摩國新田宮執印并五大院々主職事、就關東御教
書、任重代相伝被還補了、兼又御年貢事、無懈怠
可被致其沙汰之由、所被仰下候也、仍執達如件、
永仁五年六月日
左衛門尉朝員奉

(道教)
執印三郎兵衛入道殿

一一 鎮西下知狀

26

八幡新田宮雜掌中、薩摩國山門院郡司家泰抑留
当社常見免田所當米由事
右、就訴狀為有其沙汰、去永仁六年六月十一日、
同七月廿四日、同九月十五日雖遣度々召文、不參
決之間、仰薩摩在國司道嗣、吉岡弥次郎重將等、
相尋難決美否之處、如道嗣執進永仁七年七月廿七
日家泰請文者、無合勺米進云々、早遂結解、有未
進者可究落也者、依仰下知如件、
(北条實政)
正安三年六月六日 前上總介平朝臣(花押)

新田宮放生會饗膳
相模流鑄馬以下ノ
神役吉永友經ノ對
捍
雜掌妙嚴

島津忠宗

放生會饗膳役
吉永名分上料
清酒、濁酒
吉永友經
洪谷為重

神事無為遵行
セシムルコト判明
ニヨリ沙汰ニ及ハ
ス

一二 鎮西御教書

37

薩摩國八幡新田宮放生會饗膳相模流鑄馬以下神役等事、吉永又三郎左衛門尉友經嘉元以來雖□□捍、依小事社役懈怠、令抑留大營祭祀、神慮難測之間、年々□□遂行神事、追年致對捍之由、雜掌妙嚴申之處、嘉元以後祭礼無為遵行之由、妙嚴自稱之上者、神役無懈怠之条分明之旨、友經披陳之間、社役勤否神事以後無拋亂明敷、所詮於向後者、所役勤仕之時者、杜家出証狀、役人等可帶諸文之由、可被相觸兩方也、仍執達如件、

元亨三年九月十六日
(北条英時)
修理亮(花押)

下野三郎左衛門尉殿
(島津忠宗)

一三 鎮西下知狀

36

薩摩國新田宮雜掌中、放生會饗膳役事、右、如所進神役注文者、吉永名分上料二立次七十膳、清酒壹斗五升、濁酒參斗五升云々、而當名領主友經對捍彼役之由依訴申、嘉元以來數度雖遣召文、無音之間、去年九月廿日以洪谷弥平三為重、尋問吏否訖、如執進去二月八日友經請文者、新田宮放生會饗膳役事、企參上可明申云々者、可參上之由進請文之後、數月不參之上、雖可彼行罪科、嘉元以後年々神事無為令遵行之由雜掌白稱訖、以前分所役勤否、無拋亂明之間、不及沙汰、至向後者、社役勤仕之時者、為斷絕後日相論、悉可出給請取於役人等者、依仰下知如件、

元亨三年九月十六日
(北条英時)
修理亮平朝臣(花押)

諸鄉保ノ役人新田
宮放生會饗膳以下
色々神役ヲ對捍ス
雜掌妙嚴

島津忠宗

新田宮領ニ造字佐
官所課ヲ免ゼラル
院言ヲ下サル

新田宮正月七日若
菜御供米
一分地頭給黎院三
郎保子

一四 鎮西御教書

38

薩摩國八幡新田宮放生會饗膳以下色々神役等事、諸鄉保役人等年々雖令對捍件課役等、依小事抑留大營之条、神慮難測之間、遂行祭祀之由、雜掌妙嚴申之處、神事遵行之旨、雜掌自稱之上者、社役并勤之条勿論之旨、領主等披陳之間、神事以後社役勤否無拋亂明敷、所詮為斷橫論、所役并勤之輩者、出送文、杜家可出請取由、可被相觸兩方也、仍執達如件、

元亨三年十一月十六日
(北条英時)
修理亮(花押)

下野三郎左衛門尉殿
(島津忠宗)

一五 沙弥宗覺書狀

42

造字佐官薩摩國所課事、被免除新田宮領候、院宣并六波羅御教書、令披見正文等候畢、此様可披露候、恐々謹言、

〔異筆〕
「正中」十一月十八日 宗覺(花押)

執印社司御中

(毛)折紙

一六 鎮西下知狀

61

薩摩國八幡新田宮雜掌道海申當宮正月七日若菜御供米事

右供米者、為當國給黎院所役之處、一分地頭給黎院三郎入道保子、去元亨三年以後抑留之旨雜掌就訴申之、嘉曆三年七月七日、八月十七日兩度雖遣

市米時家

沙汰中絶

起請文

雜訴決斷所新田官
所司神官等ノ訴
ル活却并ニ買券地
等ノコトニ付守證
所ニ牒ス
薩摩國一宮新田官
糺決ノ為メ東郷三
郎左衛門入道等ノ
交名人ヲシテ參洛
セシム

牛屎元貞京都天主
寺戰ニ宜志ヲ致ス

召文、無音之間、同年九月廿九日以市來孫太郎時
家、尋問夫否之刻、如執進保字請文者、每年無懈
怠致其并、帶請取之処、掠申之条軒曲也、將又不
付本解之問、巨細不存知、召給彼状、可明申云々、
而保字捧白山請文不參之問、欲被裁許難掌之処、
沙汰依中絶、重相触子細於論人、可注進之山、去
年十二月廿二日被仰時家之刻、相触給寮院三郎人
道之処、不及請文之旨、今年八月廿二日時家進起
請文迄、頗不遁難洪之咎、然則於彼所役者、任先
規可弁勤者、依仰下知如件、

元德二年十月廿九日 修理亮平朝臣 (花押)

一七 雜訴決斷所牒

73

雜訴決斷所牒 薩摩國守護所
当國一宮八幡新田官所司神官等申、活却并買券
地等事

解状具言

牒、為糺決、來十月十口以前、可參洛之旨、相触
東郷三郎左衛門入道已下交名人等、可執進而々散
状者、牒送如件、以牒、

建武二年八月十一口 前筑後守藤原朝臣 (花押)

明法博士兼左衛門權少尉左京

大進中原朝臣 (花押)

右中弁藤原朝臣

一八 牛屎元貞請文

81

就薩摩國新田官執印友雄掾申、去二月廿九口御教
書案文、六月五日御催促状、七月廿日到来、拜見

鎮西ニ下向ノ後菊
池・八代・内河・
求磨・多良木ノ官
軍ニ對シ合戰ス
島津貞久ノ命ニ從
ヒ薩摩南郡ノ軍ト
戰フ
合戰中ハ軍中ノ輩
ノ訴訟沙汰ハ中止
ノ定法

宮里鄉郡司
野田又太郎
武光日妙
全 忍性
在岡司道弘

東郷重清

仕候了、抑世上動亂以後、元貞寂前為御方、京都
天王寺御合戰之時、致軍忠之処、可下向鎮西之由
被仰下之間、對於菊池、八代、内河并求磨、多良
木以下輩、數ケ度合戰之刻、依薩州南郡凶徒蜂起
事、守護人嶋津上總入道々鑑被成御教書、下向以
後、自去年八月合戰取中也、為御敵退治、令相向
之族沙汰事、合戰落居之理者、可聞之由、當時御
沙汰定法之旨所承及也、仍元貞一族牛屎恩賞訴訟
事、敵方申状可被聞之由、為治部兵衛大夫奉行入
所有其沙汰也、所詮元貞雖相向合戰、蒙御免者、
企上洛、彼奸訴之趣可申披候歟、不然者、南郡合
戰落居之間、可被聞件謀訴候哉、以此旨、可有御
披露候、恐惶謹言、

曆應四年七月廿五日 左衛門尉元貞 (請文) (裏花押)

一九 東郷重清請文

82

〔端裏書〕
「洪谷又次郎入道請文 康永元七廿四」
薩摩國一宮八幡新田官執印友雄申、神領下地押領
神役對押以下事、任去年三月廿四日御奉書之旨、
相触面々候之処、野田又太郎、宮里鄉郡司九郎入
道跡、并武光掃部左衛門入道口妙、同大学入道忍
性請文如此候、但此內在岡司三郎左衛門入道々弘
分者、不可相觸之旨、友雄在國代長秀、依令自候
不及催促候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應五年三月五日 沙弥寛禪 (請文) (裏花押)

武光忍性
洪谷定門
羽月四郎左衛門尉
石塚平太郎
大隅式部六郎三郎
武光伴三郎

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申、下地抑領神役
刈禪以下事、重申七通副具書如此、武光大學入道
忍性、洪谷新平次入道定門、羽月四郎左衛門尉、
石塚平太郎、同小四郎入道、大隅式部六郎三郎、
武光伴三郎入道等、不日可參決之旨相觸之、載起
請之詞、可被申請文之狀、依仰執達如件、

康永元年七月廿九日

(高重茂)
大和權守(花押)

(泉郷重清)
洪谷又二郎入道殿

二一 平重足契約狀

106

契約

天下向ノ事ハ是非
ニ及バス
荒説

一 於天下向之儀候者、不及是非候、
一 於此堺、成一味同心之思、相互見繼、被見繼可
申候、於此申候、自然与荒説之時相守申、永可
落居仕候、仍此条々偽申候者、
八幡大菩薩、天満大自在天神 諏方上下大明神
御罰お可罷蒙候、

応永十二年正月廿日

平重足(花押)

(友令)
執印殿

執印并五大院々職
阿多院
五大院

備町
竹原町

左意田

高坪

開門田

市比乃原山

山門

牛屎

牟木三郎丸

勸同

入来

宮里

光富

久乃給

嫡男惟宗友成ニ讓
ル分

〔第貳号〕

二一 五大院主迎阿讓狀

4

讓与 相伝所職事

在

薩摩國 八幡新田宮執印并五大院々主職事

阿多院田并宮男出處等

散在宮五大院處等

用作五町五段拾代内

備町一丁一反卅

竹原町一町一反

原田一丁

左意田五反

高坪六反

開門田一反卅

市比乃原田一丁

本免田拾五町玖段内

山門三丁

牛屎一丁

牟木三郎丸一丁

勸同一丁

入来四丁

宮里二丁

光富一丁九段

久乃給二丁 代官分也、以之加御殿拜殿中門鳥居
御前橋等修理、但執印進止也、

新免拾陸町 牛屎・宮里等之

右、件兩職者、迎阿弥陀仏相伝之職也、領掌年久
当知行無相違、而相具次第調度之本証文等、所讓
与嫡男左衛門尉惟宗友成矣也、更不可有違乱、但

斗代ハ先例ニヨル
任料ハ大事
毎年ノ見参料ハ兼
ネテ員數ヲ定ム
大物船引等ニ際シ
テハ庶子分在家ヲ
催シ仕ワベシ
友成一期ノ後ハ三
男康秀ニ譲リ康秀
ノ所帯ハ友成ノ子
息ニ与フ

次男師久ノ分

時吉御靈田
吉永名延時名

大肤田

市比乃ノ栗ヲ公文
所ニ上ル月ニ一度
ノ狩ヲス
三ヶ年一度ノ船造

庶子等処分之外、於田畠立用免田者、可令知行、
次男等用作外水田者、自執印所遂檢注、任得田可納
所當、於斗代者、可守先例、又如任料大事出来之時
者、随分限可計宛、毎年見参料兼定員數令支配畢
又大物船引之時、指入大人数之折者、庶子分在家
可催仕、兼又友成一期之後者、相具本証文、可讓
三男右兵衛尉康秀、其時者、康秀所帶者、可讓友
成子息、此儀、至子々孫々、相互不可有違乱、抑
所謂中御年貢已下御公事、殊致丁寧可尽忠、又恒
例仏神事守代々之礼奠、更不可有懈怠、又社務之
間、不可行非儀、可致靈法之沙汰、官領知行子息
等、各為一身同心、可全本所公役、仍所讓与如件、
寛元元年八月十日

八幡新田宮執印兼五大院主連阿弥陀仏(花押)

右衛門尉惟宗(花押)

右兵衛尉惟宗(花押)

一次男左兵衛尉師久分

市比乃浦但除原山一丁 薩摩郡御靈田

本免式町六段内 一丁東郷

一丁時吉御靈田并

四反吉永 二反延時

新免拾丁 牛屎

大肤田陸段有勤 四郎別当齒老所

原藤太齒老所 国府太郎齒老所

當時居齒老所 用作參丁

可勤事

一年ハ錢老貢參百、一年ハ錢陸貢、市比乃栗柿
随出来分限可上公文所、正月一日所司神官神人
等料也、狩月仁一度許自執印所可狩、三ヶ年一
度船造之時、如瓦板物、随有可取、定使者、可

ノ時瓦板物ヲ取ル
米運上船具ヲ徴ス
歳末節料ハ先例ニ
任ス
定便并小介濟使ハ
公文所ノ成敗
園地利物野呂麥亭
桑ヘスベテ師久ニ
与フ用作
請所檢注ハ公文所
ノ沙汰タルベシ
三男康秀ノ分
大中島

橋口
蔵町

中古公文所

川尻九郎

執印康國

下部德万

大物船引
三年一度ノ船造ノ

為公文所成敗、小弁濟使、同毎年御米運上船具
任先例可取進、大物船引之時、大人数之時者
人夫可催渡、歳末節料、任先例可進、如任料大
事之時者、錢陸貢可訪、於園地利物野呂麥亭桑者
一向付師久畢、用作參町外者、或請所、或檢注
可為公文所沙汰、委旨在讓狀、然而為後代不審、
所注置也、

一三男右兵衛尉康秀分

五大院々内 限志多江西田者令散在、
又除城五郎園定

大中島水田齒等

本免壹丁宮里

新免伍丁 二丁宮里
三丁牛屎

用作式丁陸段内

五大柳田八段

同橋口六反

同蔵町四反

中島柳田八反

中古公文所

同前齒老所

川尻九郎當時居齒老所

長入道蘭一曲并作齒

藤次郎居齒老所

下部德万古齒老所

源次郎別当居齒

當時公文所北齒老所

可勤事

一年者錢老貢參百、一年者錢陸貢、任料之時者
錢陸貢可訪、大物船引之時者、人夫可催渡、三

時ハ加治大工ヲ召仕ハルベシ
節料ハ先例ニヨル定使并濟使ハ公文所ノ成敗毎年貢野島一切康秀ニ与
水山ハ檢田ヲ請フテ所當ヲ非ズベシ
惟宗一子ノ分
是枝名

本家見參料
安居召物
蘭地利物
惟宗三子ノ分

若吉名

惟宗三子ノ分

年一度船造之時者、加治大工可被召仕、節料可任先例、定使并濟使者、可為公文所成敗、毎年御年貢運上之時、船具足任例可取進、蘭地利物野島、一向付康秀畢、用作式丁六反之外、於水田者、請檢田可并所當也、委旨在讓狀、然而為後代不審、重所注置也、
惟宗一子ノ分

本免毫丁 是枝
新免毫丁 牛屎
森尾蘭一所
讀岐居蘭卷所

可勤事
本家見參料一年者錢貳百、一年者錢伍百、可沙汰渡公文所、任料時者、伍百可沙汰、安居召物之時、隨分守支配可沙汰、蘭地利物一向付了、
惟宗三子ノ分

用作五大川辺毫丁
本免毫丁 若吉
新免毫丁 宮里
五大城五郎蘭卷所
丹次太郎居蘭卷所

可勤事
本家見參料、一年者陸百、一年者壹貫伍百可沙汰渡、任料之時者、壹貫伍百可沙汰、安居召物蘭地利物一向付了、田所當同、
惟宗三子ノ分
五大修正分毫丁
本免毫丁 若吉
新免毫丁 宮里

檢非違所職ハ執印ノ沙汰
平岡公事出来ノ時ハ公文所ソノ沙汰ヲナスベシ
住人等訴訟出来ノ時ハ公文所裁許ヲ蒙ルベシ

國分友兼執印忠兼ノ謀陳ヲ斥ケ東郷大中嶋名主職ヲ安堵セラレンコトヲ請フ

藤次古蘭卷所
貝太蘭卷所
大内侍蘭卷所
鳥居前古公文所 但於中務次郎居住分者可除之、又移他所之時、可令一円、
可勤事

本家見參料一年者陸百、一年者壹貫伍百可沙汰渡公文所、任料之時者壹貫伍百可沙汰、安居召物可沙汰、於蘭并用作地利物者一向付了、以前讓狀如此、一事不可有違乱、六人子息等、各成一身同心之思、可全本所御公事、又於檢非違所職者、可為執印之沙汰、又執印上洛之時者、隨分可有志、平均公事出来之時、守公文所御下知、可致其沙汰、住人等訴訟出来者、可蒙公文所裁許、又不月讓狀之旨、於令違背執印了息者、速可為執印沙汰、雖面々讓狀、所詮不審出来之時、可見五讓狀、仍為向後龜鑑、所讓与如件、
寛元元年八月十日
新田宮執印兼五大院主迎阿弥陀仏(花押)

一三三 國分友兼重申狀并具書案 12

イ、國分友兼重申狀案

薩摩國御家人國分備後次郎惟宗友兼重言上
欲殊停止同國新田宮執印四郎忠兼兼謀陳、任曾祖母迎阿弥陀仏大間帳并御沙汰例、給御奉狀、進上關東、申入本所、蒙安堵御成敗、當國東郷大中名主職事
副進

一通 關東御下知案 正応二年四月七日
可守祖母誠狀由事

迎阿ノ大問帳
新山宮執印并五大
院々主職

嫡子友成・三男康秀
友教

忠兼

道教

重友

木主

友教ハ右筆ノ仁

筑前國御家人峯道
念下高松阿寂トノ
相論

右、忠兼陳狀云、如祖母尼迎阿讓狀号大者、八、幅新田宮執印并五大院々主職事、件向職者所讓与嫡子左衛門尉友成実也、兼又友成一期之後者、相具本証文、可讓三男右兵衛尉康秀改名、其時、者康秀所帶者、可讓友成子息云々、仍友成子息友教相承之後、讓与子舍弟忠兼前名大、夜叉、云友教讓狀、云木補任、明鏡也云々、此条如件大問狀者、友成一期之後者、可讓康秀、其時者康秀所帶者、可讓友成子息、此儀至于々孫々、相互不可有違乱云々、而至于子々孫々、相互不可有違乱之由乃肝心之句お令書除天、擬差友兼理訴之条奸謀也、既於友成本領執印并五大院々主職者、守彼大問狀、友成一期之後、康秀今者出家、法名道教、知行之、子息重友令相承、至于子孫無相違之上者、其替之康秀本所帶大中嶋名田者、又友成嫡孫友兼可領掌之道理必然也、而今道教康秀、法名子息忠兼背本主迎阿讓狀、令致姦妨之条、爭可道教令違犯之罪科哉、且帶友教讓狀由事疑殆非一、不審端多、先彼讓狀者友教白筆歟、友教者右筆仁也、若於為他筆者、難備鏡証歟、尤欲被召出正文、是、縱雖為白筆、友成康秀兄弟分領相互令相伝、至于子孫、不可有違乱之由、迎阿狀明鏡之上者、以友教白出之手繼、難破祖母迎阿之大問帳歟、且如傍例者、筑前國御家人峯弥三郎入道々念下高松平四郎入道阿寂相論、寬能丸名田事、阿寂背祖母讓狀、令沽却之處、被賞彼讓狀、今年四月七日道念預御下知畢、彼御下知進覽之、而忠

後証ノタメ子息等
ノ審判ヲ讓狀ニ加
フルハ流例

友成ノ本讓狀

友教ノ筆名鶴熊

内戚ヲ聞キ外戚ノ
舍弟ニ讓ルコトナ
シ

友教友清ハ共ニ友
成ノ子息

忠兼ハ落胤ノ一腹

兼背祖母迎阿誠大問狀、令流妨当名之条、殿鑒不遠、商略暗在歟、是、次迎阿友成遺領等子孫相承之時、為後証、加子息等署判於讓狀歟、号今友教之讓之狀、為実正者、尤可加一族証判之處、背先祖之流例、無証判之条、眼前之謀略也、是、次称友教讓狀之文章、大略模友成讓狀詞歟、其上於公事課役分限者、見本証文云々、本証文者所謂友成本讓狀歟、以友成讓狀案文許、雖引写其詞、於今狀本自友教存生之時、不書与歟、依不令相伝本讓狀正文、相副本証文於手繼、讓与忠兼之由不書之、於為実書、爭相具本証文不讓与哉、是、次今忠兼所進狀案者、弘安四年云々、友教早世六ヶ年以前之狀也、其時者無加冠之儀、童名鶴熊也、令書友教名字事、眼前謀略也、是、縱雖有讓与之企、何閑内戚數輩之親昵、可讓落胤外戚之舍弟哉、就中非衰老之齡、非病患危急之身、弘安四年者年少平安也、讓狀事旁以今案矯錯也、是、次同狀云、友兼承伏歟、友教・友清共以友成子息也、忠兼為友教舍弟之間、相伝勿論也云々、此条、就今陳詞、忠兼亦不可知行之旨趣、令露顯畢、其故者、母家之余流、社人之氏族時者、以內戚為先、於外戚者、非御沙汰限歟、忠兼以謂落胤之一腹、何可募申友教舍弟之由哉、如令中先段、友成・康秀兩流之所帶、至于子々孫々、不可有違乱之由、太主令誠置畢、忠兼者康秀法名子息也、友成子孫相伝所帶不能悞望道教

友員ノ父友員ノ兄
ハ父友成ニ先ンジ
テハ世ス

弘安四年異國合戦
ノ時友教ハ友兼ノ
手ニ付イテ合戦ス

關東御筆状

友成道法友兼ノ三
代相承

友兼所進ノ建長四
年十二月北条時頼
ノ返事

西國御家人ハ寺社
惣官國司領家ノ下
ニテ以テ關東御恩
ニ准シテ守護役ヲ勤
仕スルハ先例
關東御門人地

本所一円進止

歟、次同狀云、友兼者次男友員子息也、雖稱嫡孫云々、此条、亡父友員之舍兄氏先父友成令早世之間、友員之外者、誰人可稱嫡子哉、次同狀云、扶持詞奸謀也云々、此条、於友教者、自幼少之始、至于死期、友員、友兼二代令扶持之、弘安四年異國合戦時迄、付友兼手、令致合戦畢、而号友教讓狀、如忠兼進覽之狀者、為蒙古合戦令上府之間、讓与夫夜叉出事、眼前奸謀無其寄之狀文也、次同狀云、如大間帳者、友成一期之後、相具本証文、可讓康秀由書載之處、書除本証文字之条謀略也、如彼狀者、關東御筆状以下証文可相承之由無所見云々、此条、關東御教書、御筆状等、無可相承之所見者、讓漏歟、可為讓漏者、嫡子友成余流之外、誰人可及嫡望哉、仍於執印院主而職者、友成存生之時、本証文相共令付渡道教畢、於道教所帶者、避与友成之間、友成令分讓子息等畢、其時於令殘留道教分之証文者、道教爭不申子細哉、若於令恪惜者、尤及上訴可糾取歟、而道教不申子細、友成・道法・友兼三代相承之、今就友兼之理訴、始而可為道教文書由令掠申之条奸謀之至也、争可及御信用哉（北条時頼）次同狀云、如友兼所進十二月付建長四年取明寺殿御返事者、自本所被補之字細顯然也、致非分押領之由掠申趣、奉應如本所之条、争可通其科哉云々、此条西國御家人者、以寺社惣官國司領家下文、准關東御恩、令勤仕守護役之条、為先規之由、被定置畢、而以關東御口入地、一向為本所一円之由、令掠申之条、如傍例者、扣罪科之謀陳也、隨而於最明寺殿御成敗者、准三代將軍家御下

最明寺殿御成敗ハ
三代將軍家ノ下知
ニ准ス
御式日

關東ノ筆状ヲ給ツ
テ本所ニ申入ルハ
本所ヲ進ンズルノ
故ナリ

大間帳ハ諸子配分
狀

忠兼等ハ御教書帶
持ノ器ニアラズ

忠兼ノ陳状ハ逆訴

本所ノ筆状ヲ以テ
武家ニ訴訟スルハ
本所一円地ノコト
ニシテ關東御口入
地ニ於テハ專ラ關
東御筆状ヲ本所ニ
申付シテ安堵セシ
ムルガ諸國ノ先例
傍例

友兼ハ御家人役勤
仕ノ仁

知、雖被改替之由、御式日嚴重之處、忠兼寄事於本所、忝令勿緒最明寺殿御沙汰并同御教書之条、争可通重料哉、給關東御筆状、可申入本所之由、令言上事者、奉重本所之故也、何奉忽緒之由可掠申哉、次同狀云、友兼背大間帳歟、如彼狀者、相具本証文、可讓道教之由雖載之、本証文以下大間帳、武家御返事、御教書併抑留之、不顧身料、可宛給道教分執印職之旨、濫訴之条非御信用限云々、此条、於執印院主而職本証文事者、令申先段畢、大間帳者諸子配分狀也、尤可留于嫡流也、何為道教文書之由可申哉、關東御教書等事、于細載先段畢、但道教忠兼等以關東御口入地、為本所御進之由、令立申之上者、非御教書帶持之器、依何可望申哉、存外之次第也、次給御筆状、可言上本所由哉、先進狀之處、如忠兼陳狀者、此条逆訴也、以本所御筆状、申入關東之条定法也、自關東被申入本所由事、可令參差云々、此条、賜本所御筆状、令申訴訟於武家事者、本所一円地事也、於關東御口入地者、專申付關東御筆状於本所、令安堵之条、諸國一同先傍例也、而忠兼存何様子細、可為逆訴由載陳狀哉、次同狀云、此者依友成流令相承、宛給本所任補、忠兼当知行之處、友兼非指相伝之仁云々、此条、友兼可令相伝知行当名之条、忠兼令承伏畢、既非友成流者、難知行之由忠兼自称上、忠兼全非友成子孫、被載本主誠狀之原秀子也、何可号友成流哉、友兼者為嫡孫、帶關東御教書御返事等、令勤仕御家人役之仁也、友兼当其仁之条、道理必然也、何非相伝由可掠申哉、又讓狀為奸謀之子細、度々事口畢、次同狀

元服以後ハ俗名ヲ呼ブ
実名

執印職ハ本所進止
タラハ何職ヲ以テ
御家人ト称サン

峯宗能ト高松阿寂
相論ノ筑前國穂浪
北郷寛能丸名田畠

藤原太子安貞二年
正月十六日讓狀

阿寂ハ承伏狀ヲ進

本主ノ誠狀ニ背キ
沽却ノモノヲ買領
セシハ詔ナキ上安
堵ノ下知ヲ得セザ
ル故沽券ハ無効
門領地ニ就キコノ
分御家人役ヲ勤仕

云、犬夜叉名字事、元服以後者、可喚俗名由事、此
条忠兼加冠事、就自称、始而承之畢、況名字事
不存知之問、載重名者也、就名称、書載其実名
之上不及巨細、高木太郎家繼并二郎大夫家兼等
傍例事、難准忠兼儀歟、依為枝葉不及返答、抑
如忠兼陳狀位署者、御家人云々、如同狀中詞者、
執印職為本所進止云々、然者以何職、御家人之
由鼻申哉、事与意令相違者也、尤分明可弁中
也、所詮被停止忠兼謀陳、任本主迎阿大間讓狀
并先々御沙汰例、給御奉狀、言上關東、申入本
所、為蒙安堵御成敗、重言上如件、

正應二年十月 日

口、関東下知狀案

峯弥三郎宗一 能字 法名 与高松平四郎法
有僧 道念

師阿寂、相論、筑前國穂浪北郷寛能丸名田畠
事

右、如宰府注進狀等者、子細雖多、所詮当名者、
藤原太子 道念 所領也、而分讓子息等之時、沽
却他人、令付主輩分領者、可取返由、安貞三年

正月十六日、書与讓狀於盛直 道念 畢、阿寂背彼
狀、令沽却之上者、可宛給之旨、道念令申之
處、阿寂所進承伏狀也、爰買得輩或知行經年序之
由申之、或勤仕御家人役之旨、雖称之、背本主

誠狀、沽却之至、無左右買領之条無其謂之上、
不帶安堵御下知之問、称經年序、難被信用件沽
券、然則於彼沽却地者、可令道念領知也、次十
郎宗成跡屋敷名田事、財得尼同子息道田買領之
間、為御家人、云京都大番以下公事、云異國警

ス京都大番役異國
警同役

伴(武光)師兼ソノ
所領ヲ弥三郎經兼
以下ノ子女ニ讓与
ス

經兼分

本万徳名惣領職
在清使職

清水寺院主職
在庁職

牛屎院書生職
在來院塔原ノ内南

部村、同弥毛原村
吉枝名惣領職宮里
郷内正岡田地
師藤分

山門尼御前本圖
弁清使所務

吉枝名

在庁給

西尾寺院主職

蒙古合戦ノ勲功御
領筑前國七隈郷内
淵田同長淵田
大狩倉諸組

固役、多年勤仕之由、帶守護人狀等、雖有申旨、
就誠狀、被裁許之上者、子細同前者、依鎌倉殿
仰、下知如件、

正應式年四月七日

(北条重時)
前武藏守平朝臣在御判
(北条貞時)
相模守 平朝臣同

二四 伴法忍讓狀案

讓与 先祖相伝所職并所領田畠等事

一弥三郎經兼分

本万徳惣領職 加弁清使所務定

上村 給乃 弁清使職 清水寺院主職并田畠

等 在庁職 牛屎院書生職 南郷書生職

入來院塔原内南部村并弥毛原村 但此南部弥毛
原岡村、後ニ

ハ可讓給三 古枝名惣領職 宮里郷内正岡田地
郎太郎也

參町并堂蘭老曲 在御下知
(勲功御領筑前國七隈郷惣領職脱力)

一三郎次郎師藤分

万徳名内 又五郎居蘭老曲 源藤次郎蘭老曲

源藤太郎蘭老曲

山門尼御前本蘭老曲 藤四郎安元蘭老曲

以上五ヶ所許宛テ加弁清使所務

水田宇津木並八段 溝越四段同加弁清使所務

吉枝名内 西町老町 小山本三段十坪 保佐

田五段付下同四郎入道契約田蘭等老曲 在庁
給壹町元五町内 新五郎蘭老曲 西尾寺院主職

并加田蘭等定 勲功御領筑前國七隈郷内淵田
老岡 同長淵田地老所
入來院塔原大狩倉諸組拾五内 絹陸町

兼治分

細工作處

勲功御領

兼正分

本主ニ亮ラルル時
余人ノ競望ヲ止メ
テ買領知セシムベ
シ背ク子孫アラハ
不孝タルベシ

宮里郷内志奈尾田

一田地頭所務地頭
所務ヲ停止ノ由

鶴王丸名

五大院若吉名

新田宮領荒野

勲功御領筑前國橋
爪

一併三兼治分

万徳名内 石走五段 西部貳段 原田早田老
宛テ加弁濟使所務定 此坪等計二
段卅坪。八講田參段 軍原老曲加前原定 此分

許宛テ加弁濟使所務定
吉枝名内 横丸陸段 保佐田五段付上牧崎
當時細工作處老曲

入来院塔原内大狩倉請絹拾伍内 絹五兩
在庁給五段 元五町内

勲功御領筑前國七隈郷内袴田五段 件山者、書
落六月十七日讓狀之間、重所讓与也在判

又三郎兼正分
万徳名内 弥二郎入道蘭一曲 當時居蘭此分
宛テ加弁濟使所務定 又竹中蘭老曲 前小蘭老曲

此者、雖為小太郎之蘭、被亮本主之時、止余人競望、
可令買領知也、背此儀於子孫等者、可為不孝也

字水田參段坪 深町卅代坪同加弁濟使所務
宮里郷内志奈尾田陸段坪 免フクロ三段坪

大野本三段坪
平良々田二段卅坪 止一向地頭所務 正富内元小

田五段内 二反ハ地頭被田除之、三段内老段ハ停止
地頭所務、証文在之

鶴王丸名内 一房蘭老所同停止地頭所務、証文在之
五大院若吉内 柳田八段 小樋口二段 本方

新田宮領荒野老曲 限東正岡作山出 限西大俣田溝
限北毛茹田 限南力徳堀

吉枝名内 松本四段 橋口八段 長園老曲
勲功御領筑前國橋爪四段大六十步 在庁給五

段 元五町内
入来院塔原内大狩倉請絹拾伍内絹四領

女子乙鶴分

五大院若吉名惣領
坪付

兼長分

法忍ノ命後ハ知行
スベシ

経兼ノ命後ニ知行
スベシ

後家分

本錢返田蘭質券地
家内資財物并所從
下人等ハ後家ニ与
フ一期ノ後ハ惣領ニ
付スベシ

鶴石九分
土用御前
阿久利御前

伴(武光)法忍

一女子乙鶴御前分

万徳名内 榎木町蘭老曲加弁濟使所務
五大院若吉名惣領 但柳田八段、小樋二段 本方
又三郎讓与之、此外ハ可令知行之、坪付見本証文

一三郎太郎兼長所

万徳名内 當時居蘭加弁濟使所務
水田武津町老町 但法忍命之後ハ可令知行之

牧崎丹太郎蘭界河縁蘭老曲
入来院塔原内南部村、弥毛原村此両村者、経兼
命之後ハ可知行之

一後家分

万徳名内 當時居蘭老所 中津牟礼坪
吉枝名内 打開四段 本錢返田蘭并沽却田畠
等但除吉枝、質券地等定

家内資財物并所從下人等 但所讓与正安三年二月
廿三日於山蘭等者、一
期之後、可被付于惣領也

一鶴石分

万徳名内 中津牟礼坪加弁濟使所務定
上用 御前所
阿久利御前

平四郎蘭老曲但一期之後ハ可被返付惣領也
右、件所職田畠等者、守面々讓狀等、可令知行
之狀如件、

応長二年六月十七日 法忍 在判
(伴師兼)

(註) 入來文書、入來院家文書二二七号ハ本文書ノ
原文書ナラン

〔第参号〕

二五 新田宮執印并五大院々主職

文書案

1、北条時政下文案

2

北条殿

御判

下 薩摩国新田宮執印職并五大院々主職事

惟宗康友

右件所職、散在名田島等、無相違可令領掌、但

于御公事者、任先例可致沙汰之状如件、

建仁三年十月廿六日

ロ、北条時政雜掌奉書案

8ロ

北条殿

在御判

(惟宗) 藤内康友訴申、嶋津庄内鹿兒島郡可并弁済使職

事、召問兩方理非於庄官等、付文書道理、可令

致沙汰給之由所候也、仍以執達如件、

建仁三年 十二月九日

景成奉

長沢左衛門尉殿

当國守護所

ハ、執印康友解決案

3イ

(端裏書)

「尤康友朝臣申被停止守護所御教書案」

(外題)

「八幡新田宮執印神主職事、且任前々例、且

止狼籍、可令知行社務之状如件、在御判」

薩摩国八幡新田宮執印左馬允惟宗康友解 申進

申文事

執印神主職
執印左馬允惟宗康
友解決ラヒル

北条時政藤内康友
ノ訴フル鹿兒島郡
司并弁済使職ノ事
ニツキ長沢左衛門
尉ニ沙汰ヤシム

惟宗康友ヲシテ執
印職并ニ五大院々
上職ヲ領掌セシム

新山宮ニ於テハ頼
朝ノ代ヨリ守護地
頭所ヲ止メラル

鹿兒島康兼

鎌倉幕府守護島津

忠義ニ命ジテ矢上

盛澄ヲ召進メシム

島津忠義

鎌倉幕府惟宗康兼
ノ重テノ訴狀ニヨ
リ鹿兒島郡司職ノ
コトニツキ矢上盛
澄ヲ召進メシム

請被殊任代々將軍家御免許旨、重賜御判、弥
致丁寧御祈禱子細之事

右、謹檢案内、件八幡新田者、大菩薩崇廟之靈
社、殊勝擁衛之祠也、因之、自故大將殿御時、

至于代々將軍家之御代、於彼社領者、被止地頭

守護所、于今無相違、然而如此御代之刻、令止

旁々狼籍、任先例不可有相違之由賜御判、弥神

官所司等為致丁寧之御祈禱、粗勒子細、言上如

件、以解、

承久三年十月三日 左馬允惟宗康友上

ニ、關東御教書案

8ホ

(惟宗)

鹿兒島中務丞康兼訴狀如此、郡司職事、為對決、
可被召進矢上三郎盛澄之状、依仰執達如件、

貞永元年閏九月八日

(北条時政)

(武藏守) 在御判

(島津忠義)

豊後三郎左衛門尉殿

ホ、關東御教書案

8ハ

薩摩国御家人中務丞康兼中鹿兒島郡司職事、矢

上三郎盛澄請文令披露畢、而康兼重訴狀如此、

盛澄遲參之条何様事哉、康兼令參向之時、盛澄

可參会也、今度若及遲怠者、就康兼訴狀、可有

御成敗也者、依仰執達如件、

天福元年六月廿八日

(北条時政)

(武藏守) 在御判

(島津忠義)

(裏花押)

豊後三郎左衛門尉殿

鎌倉幕府鹿兒島郡
司職ノ事ニツキ矢
上盛澄ノ参上ヲ待
ツテ成敗スベキコ
トヲ執印康兼ニ下
知ス

鹿兒島康村

薩摩國鹿兒島郡司職
ノ事ヲ訴フ
論人忠重忠光ハ承
久合戰ノ時京方ト
ナル

へ、関東御教書案

薩摩國鹿兒島郡司職事、論人矢上三郎盛澄参上
之時、被召決兩方、可有御成敗之状、依仰執達
如件、

文曆二年九月十六日

(北条泰時)
武藏守 在御判
(北条時房)
相模守 在御判

(執印康兼)
中務大夫殿

故康兼

ト、島津忠義奉状案

薩摩國御家人鹿兒島太郎康村、上可罷入見参之
申歎申候、且折紙令進覽候、便宜之時、可令披
覽給候、恐々謹言、

十一月四日

(島津忠義)
左衛門尉 在判
大隅前司入道殿

進上 後藤左衛門尉殿

佐渡前司基綱

チ、関東御教書案

薩摩國御家人鹿兒島小太郎康弘申御郡司職事、
訴状遣之、如状者、論人忠重、忠光等承久合戰
之時、為京方云々、為被執明吏否、可令召進彼
兩人也、明年四月以前、可参着関東、若過其
期者、就訴状可有御成敗也者、依鎌倉殿仰、執
達如件、

嘉祿三年十二月廿四日

(北条泰時)
武藏守 在御判
(北条時房)
相模守 在御判

(裏花押)

鹿兒島康弘越訴

御家人中務次郎康
邦ト矢上盛澄後家
ト鹿兒島郡司并弁
濟使職ヲ争フ

矢上盛澄後家ソノ
身所勞タラハ代官
ヲ差遣ムベシ

(島津忠久)
豊後三郎左衛門尉殿

大隅前司入道殿

リ、北条泰時書状案

薩摩國御家人鹿兒島小太郎康弘申、御郡司職越
訴事、申状具書如此、尋究子細、可被中沙汰候、
謹言、

仁治元年七月三日

(北条)
泰時 在御判

撰津前司殿

実名師員

ヌ、山田忠繼請文案

薩摩國御家人中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄
後家相論、鹿兒島郡司并弁濟使而職事、去四月五
日重御教書、同七月四口到来、謹以拜見仕候了、
任被仰下之旨、不日可令参上之由、令催促候之
处、後家尼状進上之、以此趣可有御披露候、恐
惶謹言、

七月十二日

(山田)
武部丞藤原忠繼 請文
(裏花押)

進上 佐治左衛門尉殿

ル、関東御教書案

鹿兒島中務次郎康邦申、薩摩國鹿兒島郡司并弁
濟使而職事、為有其沙汰、可令召進矢上左衛門
尉盛澄後家之由、被仰下之処、注進状披露了、
所詮其身為所

(裏花押)

劣者、来月十日以前、差進代官、可□□之由、
可令下知也者、依仰執達如件、

弘長三年九月三日

(北条長時)
武藏守 在御判

(北条政府)
依御舅無御判 相模守

(北条時茂)
陸奥左近太夫將監殿

以上巻紙拾枚也 (花押)

○繼目裏花押二同ジ

二六 江口信阿弥陀仏議状

10

(端裏書)

「江口信阿弥陀仏状」

議進 上古仏田老町事

江口信阿弥陀仏、
其ノ親父新大夫正
持ガ山華代トシテ
取リシ上古仏田一
町ヲ友員ニ譲与フ

右件田者、信阿弥陀仏カ相伝之田地也、然間信
阿弥陀仏カ親父新大夫正持入道、所令取出華代
ニ差年記奉引畢、今又依有山緒、所奉讓備後守
殿也、於白今以後者、以彼状、為永代之領主、
無他妨、可令領知給之状如件、

文永五年三月 日

沙弥信阿弥陀仏 (花押)

二七 石清水八幡宮檢校御教書案

7

(端裏書)

「下新田宮執印隱岐守殿 法眼性禪」

在御判

神王面修複官校
コトニツキ院官并
府宣ヲ下シ給フ
大宰府ニ触レテ沙
汰スベシ

神王面修複官校間事、院宣并府宣如此、王面事
者、幸府白元領狀勿論也、於清校者、不可事行
之由、沙汰出来之間、雖為官校、可令遂行之
由、所被仰下也、社家存其旨、急相觸宰府、可
致沙汰之由、御気色所候也、仍執達如件、

十月廿一日

法眼性禪

謹上 新田宮執印隱岐守殿

常兄例立用田
山門院ノ幕足
惣領ノ切符

十一年間ノ未進
石一升七合

二八 別府多田両名主代行蓮請文

11

(端裏書)

「山門のへふたた両名のうけ状之正文也」

(常見) (例立用) (免田)
つねミのれいりうようのめむてんの事

(山門院) (幕足)
やまとのゐんのつのりあし七石五斗のうち、

(別府多田) (惣領) (切符)
へふたのふん、そよりやうのきりふにまかせ

て、八ふん一のそたうまい、いちねんのふん九
(所当米)

斗三升七合五斗にあいたり候、しこんいこハ
(白今日後)

まいねんニミしむたいかんあるへからす、た
(未進) (對釋)

しけんち三ねんよりこうあん十ねんまで、拾石
(建信) (弘安)

ケ年かミしん式石一升七合候によて、上ぞニを
(未進) (依) (訴)

よひ候といへとも、かつはしんもちそのをそれ
候、かつハしやうさいハ、かり候あいた、この
(未進) (今年中) (懈怠)

ミしんニをきてハこんねんちうニけたいなくわ
(免田)

きまへ候へし、かのめんでん二いたりてハ、
(自今以後) (對釋)

しこんいこたいかんのいたすへからす、よてこ
(後)

日のために、しやうくたんのことし、
弘安十一年五月廿一日

別府多田名主代行蓮 (花押)

二九 阿多五大院田名主蓮道請文

27

(端裏書)

「阿多名主請文田所入道状事」

阿多五大院田
大浦入道
河辺宮下

名主職

河辺左衛門三郎知行分
五大院内三町六段
兵衛太郎知行分
公文所ノ許ナクシ
テ権門人ニ売却ス
ベカラズ

執印職内市来如導
跡ノ田園等ヲ莫禰
彦太郎入道ガ相伝
ス

阿多五大院田内、跡平太与大浦入道除知行分、
今又河辺宮下仁令沽却參町六段下地候、被聞食
之由の可給御状候、又去々年御年貢未進等、無
一粒毛未進、八月申仁可致沙汰候、若未進候
ハハ時者、除此參町六段所殘候、先日任所入置
候証文之旨、名主職可有御知行候、仍為後日
之状如件、

嘉元四年五月廿五日

(阿多)
沙弥蓮道(花押)

三〇 阿多泰忠請文

34

(端裏書)
「あたいたや次郎申状正文」

就御注進候、河辺左衛門三郎知行分、五大院内
三丁六段、并兵衛太郎知行分、安堵仁候上ハ、
公文所無御免候て、不可沽却于権門人候、若又御
年貢以下社役等懈怠仕候者、知行分可被召候、
仍為後日之状如件、

元亨三年四月十七日

(阿多)
泰忠(花押)

三一 道巖安堵状案

50

(端裏書)
「莫禰施行案市来四郎入道跡田園等事」

薩摩国八幡新田宮執印職内、市来四郎入道如導
跡田園等事、莫禰彦太郎入道殿相伝知行云々、
然者早任如導跡躰手継状、無相違可被領掌之状
如件、

嘉暦式年八月二日

(執印忠義)
沙弥道巖(在判)
(花押)

鎮西探題北条英時
吉永友經ヲシテ新
田宮執印道惠ノ訴
フル江上村内荒野
等ノコトニ就キ參
對セシム

執印友雄ノ執印職
五大院院主職及ビ
散在名田畠免田等
ヲ知行セルコト
相違ナシ

光富名
新田宮免田未進ノ
抵当三田二丁ノ二
作ヲ渡ス

三二 鎮西御教書

56

薩摩国新田宮執印入道道惠申、江上村内荒野等
事、重申状如此、来月廿日以前可參對也、仍執
達如件、

嘉暦四年正月廿三日

(北条英時)
修理亮(花押)

吉永又三郎入道殿

三三 山田宗久請文案

79

去三月廿九日御奉書謹拜見仕候訖、抑左衛門大
夫友雄申、所領薩摩国新田宮執印職并五大院々
主職、及散在名田畠免田等安堵事、当知行無相
違候、將又可支巾仁有無事、不令存知候、若此
条偽申候者、
八幡大菩薩御罰可罷蒙候、以此旨、可有御披露
候哉、恐憚謹言、

曆応四年六月廿三日

(山田)
左衛門少尉宗久請文

三四 ゆた六郎忠経質券

87

(端裏書)
「ゆたの六郎とのゝ状也 みつとみのめんで
んの代下運引状也」

さつまの国光富名内忠経知行分、新田宮めんで
ん米、かうゑい元年のとしよりして、いせん
(不進)
みしんかたに、中むた志丁を、康永三年より式
作を、所当公事とゆめて、ひき渡進候所也、此
(約束)(年)
やくそくのとしすき候ハ、如本可返給候、仍

如件、

康永三年六月廿五日

忠經（花押）

三五 惟宗時友請文

88

市比野村原山
押領ノ実ナキ上ハ
時友安堵セラレベ
シ

薩摩国新田宮前執印友雄代申、同国市比野村内
原田老町參段、府宿鹽老ケ所事、件田鹽者、時
友無違亂之儀候上者、押領之条不実候、此上者、
時友安堵事、任先御沙汰旨、可蒙御成敗候、以
此旨、可有御披露候、恐惶謹言、
觀應二年七月廿四日 惟宗時友（裏花押）

三六 惟宗友行書狀

28

（端裏書）

「左衛門殿狀正文延慶三」

五大院内橋口水山
坪ノ内万毎日向
前司入道押領
五大院ハ重ニ桑代
ヲ以テ得分トスル
ニ皆相失セテ年貢
ヲ出ス由ナシ

神領ノ法

執印ノ執沙汰ナク
ハ直接領家ニ訴フ
ベシ

度々令申候五大院内橋口水田坪うち万得、日向
前司入道令押領候之間、御方ニ多年子細ヲ雖令
申候、無執御沙汰候之条、何様次第候やらん、
不審無極候、且被知食候様ニ、五大院ハ宗と桑
代こそ得分にて候つか、皆枯失候て御年貢の
足なく候へとも、私をかへりみす忠をぬき候て
たのひけいをもて毎年御年貢無懈怠致弁候了、
年々無足の致御年貢沙汰候事難治子細候、且所
々々神領のはうにまかせて、御祭の時五大院所役
をおさへて、可致沙汰之由存候へとも、今までは
御計を相待まいらせて候、誠執御沙汰あるまし
き子細候者、承候て候て可存知仕候、私ニ子細
を申へきに候ハす候へハ領家ニ此旨可令言上候
歟、執御沙汰候ましき左右を可承候へく候、
無足御年貢沙汰難治候之間、如此令申候、恐々

左衛門尉友行

阿多郡南方蛟島跡
水田一町

高城郡宮内五大院
園
毎月観音經八卷読
誦ノ為メ寄進

謹言、

（延慶三年）
九月十八日

左衛門尉友行（花押）

謹上 執印殿

三七 執印友躬請文案

103

（端裏書）
「あたのきしん狀」

一宮八幡新田宮御寄進事

薩摩国阿多郡南方蛟島跡水田老町字龜崎御寄
進云々、殊可奉致御祈禱之丁寧候、仍所請申
如件、

嘉慶二年九月 日

（執印友躬）
沙弥願真

三八 阿蘇谷久治寄進狀

104

八幡新田宮寄進園之事

右件園者、薩摩国高城郡内宮内五大院園一所、
阿蘇谷久治重代相伝依為所領、毎月観音經八卷
為読誦、所奉寄進也、至于子々孫々、此寄進狀
可奉仰者也、仍寄進狀如件、

應永三年丙子二月十三日 藤原久治（花押）

「第四号」

三九 島津忠宗番役覆勘状

18

警固役ヲ六月ヨリ
七月ニ至リ勤仕ス

警固役事、自六月至七月、被勤仕了、仍執達如件、

永仁二

七月卅日

(島津)
忠宗(花押)

新田宮執印殿代

(註) 折紙

四〇 島津忠宗番役覆勘状

19

警固番役奉分ヲ代
官ヲ以テ勤仕ス

警固番役事、今年春分、以代官被勤仕候了、仍執達如件、

永仁三

四月十六日

(島津)
忠宗(花押)

新田宮執印殿

(追筆)「御当家四代口」

(註) 折紙

四一 島津忠宗問状

32

石塚四郎入道
後家妙忍
諸大女軍
論人妙慶

石塚四郎入道後家妙忍代忠治申、諸大女軍事、重訴状如此、新田宮執印背度々奉書、不召進論人妙慶云々、早尋問実否、載起請之詞、可被注申候、仍執達如件、

元応二年十二月十日

(島津忠宗)
沙弥(花押)

山門郡司殿

四二 足利尊氏軍勢催促御教書

74

足利尊氏執印友雄
ニ命ジテ守護ノ催
促ニ隨ヒ肝付兼重
ヲ伐タンコトヲ求
ム

島津貞久肝付兼重
等誅伐ノ為メ大隅
國ニ向フ
執印友雄貞久ノ軍
ニ參ス

執印友雄郎從ト共
二度々ノ合戦ニ加
ハル川上頼久ノ手
ニ加リ越前敦賀城
ニ向フベシ

紀伊国冷水浦住人
後藤三等ノ訴訟
船以下勝載物ヲ奪
取ス

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之状如件、

建武三年三月廿八日

(足利尊氏)
(花押)

新田宮執印又三郎殿

四三 執印友雄着到状

75

肝付八郎兼重与党凶徒等為誅伐、御免向大隅國之間、為抽軍忠、薩摩國一宮新田宮執印又三郎友雄令馳參候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿八日

惟宗友雄(裏花押)

(島津貞久)

承了(花押)

進上 御奉行所

四四 足利直義軍勢催促御教書

76

度々合戦之間、自身并郎從等被疵之条、尤神妙也、於恩賞者、追可有其沙汰、將又敦賀城凶徒誅伐事、嶋津孫三郎相共、馳向彼戰場、可抽軍忠之状如件、

建武四年二月十二日

(足利直義)
(花押)

新田宮執印又三郎殿

四五 足利幕府奉行速署奉書

86

紀伊国冷水浦住人後藤三等申、奪取船已下勝載物由事、重訴状書如此、子細見状、先度被仰之趣、無音云々、甚無謂、所詮今月中可參洛之

小河小太郎同弥次郎

足利直冬ノ党尾張義冬執印友雄ノ参陣ヲ促ス

足利直冬ノ党畠山直親、伊東祐氏足利尊氏夫人ノ所領日向國豊佐院ニ拠ル
足利義詮一色範氏ヲシテ之ヲ撃タシム

足利義詮執印友雄ノ戦功ヲ褒ス

旨、相触小河小太郎、同弥次郎等、載起請之詞、可被注申、使節更不可有緩急之状、依仰執達如件、

康永三年二月四日

藤原(花押)

散位(花押)

山城守(花押)

(友雄)
執印又三郎殿

四六 尾張義冬軍勢催促状

89

大隅薩摩兩國為凶徒退治所発向也、急速相催一族、可被致忠節之状如件、

観応貳年八月廿八日

(尾張義冬)
左馬助(花押)

(友雄)
執印又三郎殿

四七 足利義詮軍勢催促御教書

90

將軍家御台所御領日向國豊佐院嶋津庄事、畠山直親(直親)修理亮、伊東八郎已下、直冬与同凶徒等、構城郭濫妨之間、可令対治之由、所被仰一色少輔太郎入道也、可致合力之状如件、

観応三年六月五日

(足利義詮)
(花押)

新田宮執印殿

(註) 切紙

四八 足利義詮御感御教書

92

於薩摩國、致忠節之由、嶋津判官所注申也、尤以神妙、弥可抽戦功之状如件、

文和二年三月十日 (足利義詮) (花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

(註) 切紙

四九 一色直氏軍勢催促状

93

薩摩國凶徒誅伐事、相談嶋津判官師久、可被致忠節、其子細可令注進也、仍執達如件、

文和二年四月廿六日

(一色直氏)
右京權大夫(花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

(註) 切紙

五〇 一色範氏感状

94

薩摩國凶徒退治事、令合力之由、嶋津上総入道所注申也、忠節尤神妙、可令注進、仍執達如件、

文和三年七月十日

(一色範氏)
沙弥(花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

(註) 切紙

五一 一色直氏感状

95

薩摩國知色城凶徒退治合戦事、致忠節之由、嶋津判官所注申也、尤神妙、可令注進京都、仍執達如件、

文和三年八月廿九日

(一色直氏)
右京權大夫(花押)

執印左衛門大夫殿

(註) 切紙

執印友雄知色城ノ合戦ニ忠節ヲ致ス一色直氏執印友雄ノ功ヲ京都ニ推挙ス

一色範氏嶋津貞久ノ注進ニヨリ執印友雄ノ忠節セルヲ注進ス

足利尊氏ノ將一色直氏執印友雄ニ島津師久ト共ニ薩摩ノ敵ヲ撃タシム

足利尊氏島津師久ノ注進ニ基キ執印友雄ノ戦功ヲ褒ス

島津師久一色氏及ビ大友氏時ノ肥後ニ攻入り合戦スルニ応ゼントシテ出テ發ス
執印ノ兵ヲ和泉城山門院ノ辺ニ徵ス

島津氏執印氏ノ援軍ヲ切望ス

要害ヲ構ヘ御免向ヲ待タルベシ

五二 足利尊氏御感御教書

96

凶徒対治事、致志節之由、嶋津判官師久所注申也、尤以神妙、弥可抽戦功之状如件、

文和三年九月三日

(足利尊氏) (花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

(註) 切紙

五三 島津師久軍勢催促状

97

一色殿并大友刑部大輔、攻入肥後国、被始合戦畢、仍為合力所打立也、来十五口以前、可被馳寄和泉城、同山門院間、依執達如件、

文和四年三月三日

(島津師久) (花押)

執印左衛門大夫殿

五四 島津氏久書状

101

此堺合戦事、今時分大綱候之間憑存候、御同心候者、日来可為本望候、尚々憑存候、委細御返事可承候、恐々謹言、

(貞治六年カ) 六月十七日

(島津) 修理亮氏久 (花押)

謹上 執印殿 (註) 切紙

五五 島津貞久施行状

99

去年十一月十日 將軍家御教書如此、早任被仰下之旨、構要害可被相待申御免向也、仍執達如

件、

文和五年二月廿二日

(島津貞久) 沙弥 (花押)

新田宮執印左衛門大夫殿

五六 島津師久書状

98

和泉庄名主等引合子菊池、米朔日可寄来当所之城之由其間候、彼日限以前、被馳寄候者悦入候、当国之案否此時候歟、尚々此状到来候者、不替時御打越候者喜入候、恐々謹言、

(文和四年カ) 九月廿七日

(島津) 師久 (花押)

執印左衛門大夫殿

(註) 折紙

五七 島津氏久安堵状

100

高城郡内重豊領分平分事、御知行不可有相違候、此段且延尉方可申談候、恐々謹言、

七月十六日

(島津) 氏久 (花押)

執印左衛門大夫入道殿

五八 島津氏久契約状

102

契約
右、雖以伝々説承子細候、不信用候之間、則申候畢、就其以契状如此承候之条悦入候、向後も何様義聞得候とも可申候、又其方にも風聞之説候ハル時者、則承候て可令落居候、若此条偽申

島津氏久ト執印友雄互ニ契約状ヲ交シテ盟約ス

島津氏久執印友雄ニ渋谷重豊ノ高城郡内ノ所領ノ半ヲ安堵ス

和泉庄名主菊池ノ軍ト相応シテ島津師久ノ拠城ヲ攻メシトスル風聞

候者、

当社新田八幡宮、并天満大自在天神御前、可
罷蒙候、仍契状如件、

貞治七年二月三日

氏久(花押)

執印左衛門大夫入道殿
(友雄)

(包紙) 一

執印左衛門大夫入道殿

氏久

五九 某議状案断簡并左衛門

25

尉朝員奉書案

イ 某議状断簡

○前缺

仍議状如件

正安貳年五月十日

左衛門尉朝員奉書案

新田宮執印職領内散在田畠并花北村領主尼信連

在御判

薩摩国新田宮領内市比野村并散在田畠事、就関

東御教書、任重代被還補国分治部房宗海軍、兼

又去年之冬、又二郎友家掠給御下文、致濫妨之

間、於鎮西有其沙汰、蒙御下知云々、此上不及

子細歟、向後於友家一族者、競望当村事永所被

停止也、然者御年貢捌拾貫文無未進懈怠者、不

可有改替者、依領家仰、執達如件、

正安二年八月十七日

(朝員)
左衛門尉 奉
在判

六〇 島津元久安堵状

105

薩摩国阿多郡内五代院、同国指宿郡内石室村、

指宿郡石室村乃徳
上村入道跡

執印友令

薩摩郡十町分

同国万徳上村入道跡之事、今時分於被致忠節
者、為料所不可有相違之状如件、

応永十年十月九日

(島津元久)
陸奥守(花押)

(友令)
執印豊前守殿

六一 島津久豊知行宛行状

108

於薩摩郡、十町分可相計者也、守先例、可被領
知之状如件、

応永廿八年八月廿三日

(島津久豊)
存忠(花押)

(友令)
執印殿

【第五号】

六二 執印友員相博状案

9

(端裏書)

「これはるすのしき■んその／＼のさうはくの
しるしふみのあんもん」

(相博)

さうはくせしむるその／＼の事

合

一所 さゑもん殿ふるの御やしき、同くわうね

んハラのやしき

一所 つや殿、同あかゝねのやしき

一所 四らう殿

一所 みつま二郎

一所 くわうねんはう

船ノ着キタル時ハ
津料ヲ先例ニヨリ
徴スベシ

段歩タリトモ売却
セバ一家寄合ヒ反
対スベシ
執印道教新田宮執
印職并五大院々主
職内田島并免田等
ヲ重友ニ譲与ス
惣領庶子互ニ煩ヲ
ナシテ違乱ヲナス
ベカラズ

已上五ヶ所 このそののの代分

(当公文)

一所 たうくもん所の御やしき

(蘭)

一所 まへのその

(川風)

一所 ちやうえうたうのやしき

(蘭)

みきくたんのそののさうはくせしむるところ

なり、たうしかやうにさうはくせしむるといふ

とも、あまりにくしなともおもひ候はんときハ、

もとのゆつりにまかせてりやうちせしむへし、

又かのそののまへにふねのつきたらんととき

ハ、つれうハせんれいにまかせてきたをいたす

へきしやう、くたんのことし、

ふんえい四年十月廿三日

執印

(友包)

六三 執印道教議状

24

(端裏書)

「ゆつり状」

此内雖段歩、於令沽却者、一家寄合、不可令

承引之状如件、(花押)

永仁五年十一月十一日、新田宮執印職、并五大

院々主職内、田島并免田等を重友ゆつりあたふ

る所也、但一身同心の思ひをなして、をの

(知行)

ちきやうせらるへし、もしこのゆつり状をそむ

きて、ことをさうによせて、惣領をしあひたか

ひに、わつらひをなすへからず、よてきやうこ

(違乱)

うのあらんをたうんかために、しひちをもて、

入来院中村宇曾越
一町代錢四十貫文
ニテ東郷尼御前ニ
売渡ス

執印道嚴執印友包
道念ノ父道教

不慮ノ外相違アラ
ハ本錢一倍ニテ返
却スベシ

おく事如件、

永仁五年十一月十一日 沙弥道教(花押)

六四 沙弥教忍同道思連署田地売券案

51

(端裏書)

「東郷ニ遣ス宇曾越売券状案」

売渡

薩摩国新田宮執印職知行内、同国人来院中村
内、宇曾越越町事、

右田地之事、為重代相伝、(道惠)

而依有要、代錢肆拾貫文、限永代、東郷尼

御前仁所奉売渡也、但彼水田事、聊依有子細、

舍兄執印入道々教并子思友包(法名)

教忍等、兩方出契

状者也、隨而教忍令同心令沽却同心候間、加判

形於彼状畢、且為不審、親父道教議状并道嚴・

教忍相伝之状等、於正文者、為連券之間、案文

仁封裏所副渡也、任彼状等可被知行也、此田地

者、迄于万難公事臨時役、自元不相懸之上者、

為一田不輸之地、可被知行之、若又此田地不慮

之外相違出来時者、本錢以一倍可令返返也、仍

為後口、売券之状如件、

嘉曆二年十月廿八日

沙弥教忍

(友包)

沙弥道惠

(忠義)

六五 沙弥道嚴惟宗友雄連署田

地売券案

49

新田宮常見免田代
引山 永利名
入来院内楠本
代錢三十五貫文ヲ
以テ東郷尼御前ニ
売渡ス
一田不輸ノ地トシ
テ知行セラルベシ
惟宗友雄
沙弥道嚴

口尊
彦八給分
恭忍方ニ避渡ス
質券状

〔端書〕
「土穴免田、楠本免田売券案、東郷被上候議状、書之遺之」

奉売渡

薩摩國八幡新田宮常見免田代引田、永利名内土穴免田、并入来院内楠本免田五段事
右件免田等者、知行無相違者也、而依有要用、代錢參拾五貫文、限永代、東郷尼御前奉売渡畢、然者為一田不輸之地、可有知行候、仍為後日之売券状如件、

嘉曆貳年七月卅日

惟宗友雄 在判
(重友)
沙弥道嚴 在判

六六 執印友躬避状

91

故日尊跡事、御口入之問、聊雖申子細候、新田宮御領内卅六坪三反、彦八給分、官脇園志ケ所事、兼忍方ニ避渡候了、於有限社役者、無懈怠可被勤仕候、至于彦八蘭者、以後々年任質券状、可請出候、但相互不可有違乱之儀、相違之儀、仍為後日避状如件、

友躬 (執印) (花押)

正平七年十月廿二日

〔裏書〕

「吉所田四反 くす本三反 山本七反
五ヶ所蘭中二ヶ所
一火田分

一丁南郷 一丁光口 (備本) 五段くすもと
五段中村 二丁東郷

六七 沙弥願真議状

107

豊前入道義忠
(友令)

新田宮執印職并ニ
五大院々主職

〔端書〕
「き太郎のゆつり状」

護与 豊前入道義忠所
(執印友令)

薩摩國八幡新田宮執印職并五大院々主職之事有、於件所職者、願真重代相伝之地也、然間次第相伝之手継等相副而、限永代讓渡畢、次所々散在之於田畠等者、本証文仁為明白之問、任証文之旨、無他妨、永代可令領知、仍為後証之、議状如件、

応永廿年六月廿九日

(執印友躬)
沙弥願真 (花押)

六八 前遠江守康令議状

109

〔端書〕
「三郎議状」

雖如此讓渡、官内五代之内ニ三町五ヶ所、薩摩郡之内四町五反、くきもと一町之内浮めん五反、平田一丁、康令一こハ可為計候、又計候熊少こころさしの分計候、熊一この後者、知行候へく候、かの神領おいてそりやう一人より外ニ讓あるましく候、此旨をそむき候する人ハ、康令の子孫にてあるましく候、仍なおき文如件、

文安三年丙寅十二月十三日

前遠江守康令 (花押)

執印三郎所

六九 新田宮執印職并五大院々主

職文書案

3

イ、執印康友解状案

鎌倉幕府新田宮執
印道教ノ訴フル所
職并名用鼎ノ事ニ
付本所ヨシテ難掌
陳状ヲ執進メシム

新田宮本所執印并
五大院々主職ヲ道
教ニ還補ス

○本文二五号ハ文書ニ同ジキヲ以テ省略ニ從フ
(要書)

「於彼狀正文者、依路次難儀、留置國之間、案
文ニ可封裏之旨、被望申之間、所封裏也、

貞和五年十二月十三日

(酒也)
久景(花押)

ロ、關東御教書案

薩摩國新田宮執印三郎兵衛入道道教中、所職并
名田島事、訴狀如此、相触本所、可被執進難掌
陳狀也者、依仰執達如件、

永仁三年五月六日

(北条宣時)
陸奥守 御判
(北条貞時)
相模守 御判

(久景)
(妻花押)

(北条盛房)
丹波守殿

(北条久時)
刑部少輔殿

ハ、左衛門尉朝員奉書案

御判

薩摩國新田宮執印并五大院々主職事、就關東御
教書、任重代相伝、被還補畢、兼又御年貢事、
無懈意可被致其沙汰之由、所被仰下候也、仍執
達如件、

永仁五年六月 日

左衛門尉朝員奉

(道教)
執印三郎兵衛入道殿

七〇 五大院主迎阿讓狀案

5

○本文ハ二二号文書ニ同ジキヲ以テ省略ニ從フ

地頭給田ハ二町二
段

宣澄ノ男平忠景ニ
子孫多ケレバ尋問
セラルベシ

康和紛失狀建久
山帳ハ往古ノコト
タルニヨリ証拠ニ
ナラズ

当國ノ習ヒ目代ノ
交ルトコロハ公領
ト稱シ交ハラザル
所ハ不輸領ト稱ス

本地頭

永慶

鮫島家高ノ申分

建久八年惣圖帳等
ニヨレバ社家ノ進
止ニシテ地頭関与
セズ

御前候校生西從來
一向社家ノ進止ニ
シテ檢注ヲ遂ゲ収
納ノ処去年始メテ
地頭濫妨ヲナス

地頭八年貢ヲ全ク
センガタメ郡司代
吉行ヲシテ檢注セ
シメ罷取ニ下行セ
シム百廿余石ハ滿
作ノ時ノコト

〔第六号〕

七一 關東下知狀案

6

○首闕

任彼例付代官畢、地頭給田參町參段也、有御
不審者、宣澄親類并宣澄男平權守忠景子孫
多之、可被尋問歟、康和紛失狀、建久凶出帳
事、依為往昔不知及之、宣澄之時結解狀事、
當國之習日代相交之所者、稱公領、不相交之
所者、稱不輸領、就彼狀、本地頭何不致沙汰
哉、因分寺御下知事、依為非勘所訴申也云々、
永慶等申云、西迎為行願代官之由虛言也、西
迎請作公出之時、行願召仕之許也、社家代々
任符進之云々、行願申云、西迎為行願代官否
事、地頭給田有無事、可被尋問國云々者、如
社家所進康和立券紛失狀、宣澄治承四年結解
狀、建久八年惣圖帳、年々取帳目錄者、為社
家之進止、地頭不相交之由所見也、如行願所
帶御下文以下狀者、不令領知神領歟、而行願
任自由、押領地本之条、難道無道之科矣、

一年貢事

右、如御前候校生西申者、一向為社家之進止、
遂檢注、令收納之処、行願去年始企濫妨、行
檢注納取所當之間、本所年貢關如、恒例神事
退帳、去々年者、百廿余石徵納之処、去年者
弁五十余石之条無謂云々、如行願申者、毎年
自官方遂檢注、收納所當之処、寄事於左右、
為致煩、依不遂其節、為全年貢、郡司代吉行
遂檢注、收納所當、下行罷取畢、百廿余石事、

質ノ高トニヨリテ
進米ノ相違アリ

社家政所敷地

座主親宗

熟印ハ安貞二年下
知狀ヲ以テ証文ニ
備フ

宮蘭白学桑藍

神七面

所当ノ濟否ヲ明ラ
メンガ爲メニ神領
ニ向フ地頭方ハ
ノ神三箇ヲ奪ツテ
百姓下ニ太ノ許ニ
置キ、ノ神王面ヲ
破ル

承久ノ比止八幡宮
領帖佐郷ニ於テ御
家人良正王面ヲ奪
取ノ先例朝廷ニテ
使讓ヲ行ハセラレ
奪取ノ罪ハ大辟ニ
当ルト議奏ス

神人等郡内横行ノ
間ニ打落シタルナ
ラン

問注奉行入藤連嘉
氏

地頭ノ不輸ノ神領
地本ヲ押領シ自由
ノ檢注ヲ遂ゲ年貢
ヲ減失セシメシコ
ト明瞭

滿作之時者不知之、去年分五十九石余也、依
質之高下、有進米之相違云々、前々自社家遂
檢注、令收納之處、行願去年始行檢注、遂收
納、減失年貢之条、承伏已畢、難避其科矣、

一 社家政所敷地并宮蘭白学桑藍事

右、如座主親宗申者、行願背先例、押取彼色
々物畢、可被執返云々、如行願申者、社家政
所事、無先例、以執印安貞二年下知狀備証文
事、新儀之条顯然也、宮蘭白学桑藍者、自本
取畢云々者、彼敷地等社家進止之由、見先段、
然者子細同前矣、

神王面事

右、如生西申者、彼面者往古之靈物、大昔藤
之御鉢也、寛元四年八月為明所当之濟否、罷
向神領之處、奪取一神王面、奉置百姓下平太
之許、打破二王面畢、承久之比、依正八幡宮
領帖佐郷事、御家人良西奪取彼宮王面之間、
關東有御沙汰之上、公家被行仗議之處、所奪
取之罪当大辟之由、議奏畢云々、如行願申者、
神王面何物哉、不知名字、若王舞面形歟、大
昔藤御鉢之由有何所見哉、不及破損、無奪取
之儀、奉置下平太許之由事不知之、神人寄事
於左右、打鼓合聲響郡内之間、不知手足之所
指、若打落歟云々、打破二神王面事、以問注
奉行入藤連、基氏等、被突檢之處、無異儀歟、
一神王面者、奉置百姓下平太許之由、生西令
申之處、不知之旨、行願陳詞非無矯饒歟、行
願或押領不輸神領地本、或遂自由檢注、令減
失年貢之間、狼藉事難論申、不足信用、然者
難避罪科矣、

社家政所

樞大官司末綱

地頭宗高ツノ三子
家用及ヒ郡司代等
ヲ遣シテ放火セシ
ム

政所ハ初ヨリナシ

神人福万法師

地頭郡司景古等ヲ
シテ神人福万ノ頭
ヲ破リ友安等ヲ捕
フ

國分寺神人

突檢ノ結果ソノ統
明瞭タルニヨリ地
頭ノ非定マル

西迎郡領山ヲ請作
ス所当未進ニヨリ
稱ニ点札ヲ立ツ

一 焼払社家政所事

右、如樞太官司末綱申者、寛元三年十二月廿
八日行願差遣子息三郎家用、郡司代吉行、四
郎丸、為燒政所、雖令放火傍在家、無風難之
間、政所者令殘之處、其後行願加下知、令燒
畢云々、如行願申者、焼払政所由事、極無災
也、自本無政所、安貞二年執印下知狀事新儀
也云々者、不燒社家政所之由、行願雖論申、
自余条々行願所行、旁為無道之間、放火之条
無所遁歟、

打破神人福万法師頭、折宗清指、摺

右、如宗清并福万法師申者、行願對取神領田
之間、為子細、謂向彼所之處、郡司太郎
景古、越後房、二郎大夫以下、遺數多人勢之
間、福万者以杖被打破頭也、宗清者被折中
指畢、友安、末光者、被付繩畢云々、如行願
申者、打破、折指、付繩由事、極無災也、
且先年國分寺神人令付、小門退出、訴申
事由問、給御教書畢、交名注文如此、置
越後房、次郎大夫罷向之由申之、然者隨仰可
召進也、可有尋歟云々者、打破神人福万頭、
折宗清指、摺友安、末光等、論申之、可被
召對交名畢之由、行願雖令申、被突檢之、其
疵見在之間、為勿論歟、然者行願旁難避其科
矣、

一 被連取西迎稻由事

右、如行願申者、西迎請作郡田之處、所當未
進五十余、為明子細、立点札於西迎稻畢、
而神人藤平太并定使發神、取畢云々、如末

田所吉忠ハ西迎ノ
子息

還俗ノ身トシテ侍
所ニ参ルベカラズ
師久ノ祖父ハ島津
忠久ノ小舎童

鯨島家高知行ノ阿
多郡北方地頭職ハ
他人ニ改袖トナル
下手人ハ京都ニ進
メ断罪セラル

鹿兒島郡司職
弁済使職
忠重裁許ヲ待タズ
シテ庄内ヲ逃脱ノ
上御米ヲ私用ス

繩申者、田所二郎吉忠^{西迎}耕作官領之処、
収稻、為弁所当、依所置官園運取畢、有米進
者、可被責^口敷云々者、被改易行願所帶之
上、不及沙汰焉、
一 兩方惡口事

右、如行願訴状者、行願還俗之身、不可參侍
所之由、師久令申^口、可被糺明也云々、如師
久陳状者、師久祖父為島津豊後前司忠久小舎
童之由、令申畢、尤可被糺也、如行願甥二郎
左衛門尉^口、行願還俗之由依申之、申子細
畢云々者、彼此申状、為枝葉之間、非沙汰之
限矣、

以前条々、子細如斯、行願所行旁難違罪科之
間、於河多郡北方行願知行分地頭職者、被改袖
他人畢、至下手之輩者、召上京都、可被断罪之
由、令下知六波羅畢者、依錄倉殿仰、下知如件、
宝治元年十月廿五日

(北条時頼)
左近將監平朝臣 在御判
(北条正時)
相模守 平朝臣 在御判

七二 鹿兒島郡司并弁済使職文書案

1、北条時政奉書案(中欠) 81

嶋津庄内鹿兒島郡司、弁済使而職事、康友与忠
重召問兩方、任文書理、可沙汰付之由、先日令
下知之処、件忠重不待裁許、令逃脱庄内之上、
剩私用御米之条、罪科不輕之由在厅并代官所申
也、如聞者忠重所行甚以

(ゴノ部分後ノ鼠
入ナラン)

山田忠繼是阿ノ書
状ヲ進上ス

六波羅山田忠繼ニ
触レテ矢上盛澄後
家ヲ重ネテ召進メ
シム
散状

薩摩国御家人鹿兒嶋中務次郎康邦与矢上左衛門
尉盛澄後家相論、当国

建仁元年

十一月廿二日

(北条時政) 在御判
遠江守 北条殿

口、山田忠繼請文案(前欠)

郡司矢上左 月中可催上

(下之方)

了、任被仰 九日到來、謹以并見仕候
進上之、以此趣可有御披露候、恐惶謹言、

十二月廿二日

式部丞藤原忠繼 請文

進上 佐治左衛門尉殿

ハ、六波羅御教書案

82

薩摩国御家人鹿兒嶋中務次郎康邦与矢上左衛門尉
盛澄後家相論、当国鹿兒島郡司并弁済使而職事、
散状被見了、此事去二月中召進彼後家之由、被
下関東御教書之問、相触之処、于今不參之条太
自由也、不口可被催

弘長元年四月五日

(北条時茂)
左近將監

(繼日裏花押)

(山田忠繼)
大隅式部丞殿

七三 引付衆交名注文写

45

○首欠

左京權大夫 安芸守 宇都宮三川權守入
波多野因幡入道 町野加賀前司 嶋津下総
(鳥津忠氏)野

合奉行
四番

五番

侍所

開闔

前司 足田能登權守 飯尾左衛門大夫入道

三須雅樂大夫、和田四郎入道 大野越前房 布

施禪正忠 飯尾木工左衛門尉 飯尾大藏左衛門尉

合奉行 豊前四郎左衛門尉 島田兵部丞

四番 (石橋和義) (膳堂行連) (佐々木善範)

左衛門尉 参川入道 近江入道 老賊入道 撰

津華人入道 撰津左近大夫將監 山城大夫判官

参川判官大夫入道 諏方大進房 齊藤五郎左衛門尉

雅樂左近將監 齊藤七郎入道 安富三郎

左衛門尉 松田八郎 因幡右近藏人 松田掃部

五番 (佐々木道彦) (連智) (時秀力)

佐渡判官入道 宇津宮遠江入道 佐々木備前守

中条備前々司 下総前司 町野遠江權守 梶原

河内守 土左宮内少輔 雜賀半入入道 富部周

防前司 大野彦次郎入道 飯尾新左衛門尉 兼

賀掃部允 齊藤左衛門四郎入道 和泉三郎左衛門尉

侍所 矢野孫太郎

菅領未定候 栗原 中条備前々司 下総前司 足田能登權守 杉原

左近將監 齊藤五郎左衛門尉 飯尾新左衛門尉

〇尾欠 (注) 本文書ハ貞和五年編成替ノ室町幕府引付衆交

名ト推定、(佐藤進一)「室町幕府開創期の官制体系」ト「中世の法と國家」所収一四五八

頁以下)人名(一)モ同論考ニヨル

異國降伏ノ祈禱ノ
タメ劍一腰神馬一
疋ヲ一宮ニ獻ス

薩摩國一宮ハ新田
宮ト開闔社ト相論
アリ

鎮西談議所ハ先例
ニヨルベシト裁許
ス

先例アルニヨリ新
田宮ニ進獻ス

開闔社司訴訟ニ及
ブ

之ノコトニヨリ一
宮ノ決定ヲ見タル
ヲケニ非ズ

幕府異國降伏祈禱
ノ大般若經転読及
御神樂ノ用途十二
貫ヲ送ル

薩摩ノ守護島津忠
宗幕府ノ命ニヨリ
大般若転読及ビ御
神樂ノ費用十二貫
ヲ新田宮ニ進ズ

七四 異國降伏祈禱劍馬等進獻文書案

イ、島津忠宗書下案

為異國降伏御祈、御劍一腰、神馬一疋可獻一宮
出事、今年二月十一日、關東御教書今月廿日到
来、案文如此、於當國一宮者、新田宮與開闔社
御相論之間、先度令申子細於談議所之處、就近
例先可致沙汰之由被仰出之間、新田宮依被帶近
例、令進官畢、而開闔社司雖及訴訟、御成敗未
斷之間、任先日沙汰竊、所令進獻當官也、依之
不可有一宮治定之儀、且存其旨、且可被進請取
候、仍執達如件、

正応六年四月廿日 (島津忠宗) 左衛門尉 在判

薩摩國新田宮執印殿

ロ、關東御教書案
異國降伏御祈事、薩摩國新田宮大般若經転読、
并御神樂用途錢十二貫一社別早速沙汰送之、可
令執達社家請取之状、依仰執達如件、

正応六年三月廿日 (北条宣時) 陸奥守 御判
(北条貞時) 相模守 御判

(島津忠宗) 下野三郎左衛門尉殿

ハ、島津忠宗書下案
異國降伏御祈事、薩摩國新田宮大般若經転読、
并御神樂用途錢可沙汰進之由事、今年三月廿日
御教書案如此、任被仰下之旨、錢拾貳貫進官
云々、可給請取候、仍執達如件、

(島津忠宗) 左衛門尉 在判

正応六年五月十一日

銀劍
征矢
弓
幕府ヨリ宝物ヲ進
宮ス

(一枚目)

迎阿大問状

忠兼ハ執印職相承
ノ道教ノミタリナ
ガラ友成相承ノ大
中嶋ヲ押領

新田宮執印殿

二、島津忠宗書下案

進宮

銀劍一腰 文相

御征矢一腰 宇須部尾
津候共

御弓一張 長藤

右御宝物等、自關東被進宮之候、早速給請取、
可進上候、仍執達如件、

正応六年五月十一日

(島津忠宗)
左衛門尉 在判

新田宮執印殿

七五 国分友兼重申状案

13

○首闕

固、忠兼得議条、子孫相承之議、不可有相違
歟、又云、相互不可違乱由乃文者、如今友兼之
非抛お誠置所見也云々、此条度々如令言上、如
迎阿弥陀仏大問状者、友成一期之後者、於執印
職者、可讓康秀今道教、其時者、康秀所帶五大
々中島者、可讓友成子息、至此儀子々孫々、不
可有相違云々、^取此条、兩流不合混亂之天、
執印職者、康秀道教子々孫々令相承、於五大院大
中島者、友成子々孫々可令相伝知行次第明鏡也、
爰今忠兼者、乍為執印職相承之道教子息、令押
領友成相承大中島之条、專令違背曾祖母迎阿大
問状畢、然則非實令混亂而流、既是孝令違犯之企
也、其科惟重、況構出偽書、称讓状之条、罪科
令重置者哉、而今不顧己之重科、相互不可違乱
之由乃文者、^(友兼)如今友賢之非抛お誠置之由、忠兼

道法嫡子
嫡庶子ノ文字相論
ニナシ

(十枚目)
友氏ハ父友成ニ先
立ツテ早世セシニ
ヨリ道法嫡子タリ

友教ノ死期ノ問題

友兼同宿ノ友教ヲ
殺害ノ説
友教ハ弘安十二年
十月十一日播磨國
御家人北野道証ノ
宿所ニ於テ酒宴ノ
時太郎兵衛尉頼兼
ト当座ノ辯論ニヨ
リ死亡ス

令申之条、^{新曲之至}、且所仰正直之由訴申之処、
忠兼以之称非抛、如友賢之非抛お誠置之由、令
撩申之条謀計也、迎阿所誠置者、子々孫々不可
混亂而流之由為最詮歟、而忠兼令混亂而流之上
者、如忠兼乃非抛お誠置之由、所見分明哉、
以白科讓友賢之条、^(友)理豈可然哉、次同状云、
道法為嫡子之由、被載領家御下知事、就一方申
状、被成下知歟、嫡庶之字無相論所見云々

(紙縫目)

此条、道法立友成嫡子之次第、領家御下知明白
之間、忠兼承伏分明也、但道法舍兄友氏者、先
于親父友成、令早世畢、此上者、道法立于嫡子
之条、誰人可論申歟、今忠兼無相論之所見之由
称申之条、道法立嫡子之条顯然也、同状云、如
友兼去年六月訴状者、友教去々年十月之比死去
畢、年来令扶持友教、令相承關東御筆状以下証
文等云々、仍云友教死去次第、云卒状以下証文
等相承事、可明申之旨、載陳状之処、如今年正
月友兼重解者、弘安十年十一月十一日友教令死
去之由載之、友教而度死去之由原申之条、憚殺
害造意結構歟、令相承証文之由乍載訴状、令扶
持同宿友教問、令帶持之由申之上者、殺害之
後、令抑留条無異儀云々、此条、如哉先解、友
教者去弘安十二年十月十一日播磨國御家人北野
左衛門入道々証之宿所酒宴之時、友教与太郎兵
衛尉頼兼、依当座之評論、兩人共令死去次第、
云年記、云宿所評論、及兩人死去之段載先陳状
了、今為十一月之由事、不存知者也、若然者執
筆之失錯歟、強依之不及所難者歟、而今忠兼殺
害造意結構之由称申之条、希代未聞謀言也、

奏事不実ノ科

(三枚目)
友兼御家人ト称シ
ナガラ本所一門地
筑後国下妻庄預所
職ヲ望給ハル

嫡判証判

友兼繼母ニ密懷

位置

依之殺害造意之由載盡陳之条、尤可被証人証
拠省歟、不出申其証者、奏事不実之科爭可相逼、
令相承証文之由、載訴狀之間、成疑殆之由、忠
兼令中之条、無理至極之間、構出不実、擬令避
遁御沙汰之条、不足御信用者哉、尤友教殺害之
段、可立申証人証拠也、同狀云

(紙綴目)

抑留他人証文之事、被処罪科事、為傍例歟云々、
此条証文相承次第載先段畢、不能重言、同狀云、
友兼乍專申御家人由、本所一門之地、望給筑後
国下妻庄預所職、令殺害預所五郎兵衛尉并舍弟
云々、此条前守護之時、両方及訴陳、友賢就令
申、不誤子細被注進了、是非為上裁歟、何聞訴
人忠兼、可及追口哉、同狀云、友教無実子由、
先々載先陳了、無子息上者、嫡判証判事、為枝
葉之間、不及委陳云々、此条、忠兼偽書之段、
今訴訟之肝心也、仍条々謀計之企令言上内、取
嫡判及証判事、有傍例之上、且迎阿護狀仁為後
証加子息等署判畢、尤任其例為向後証驗、若於
為実書者、可取一門之証判之處、無其儀之条、
為謀計之企之由、先度言上之處、嫡判証判事為
枝葉間、不及委陳之旨令中之条、既卷舌于陳答
畢、且承伏之条分明也、次同狀云、友賢密懷繼
母由事、無跡形不実也、責而依無陳方、掠申非
拠子細者也、更非御信用之限、同狀云、任諸司
助由云々、此条、去弘安年中排避狀畢、仍今度
申狀位署仁毛不載之、限于忠兼、令書彼位署条、
謀案之企也、同狀云、忠兼非指奉行人、何可取
置友兼訴狀哉云々、此条、友賢望申本所由事、
無其儀由載先訴狀之處、不帶狀文旨、令承伏上

所領ノ相伝ノコト
ハ領主ノ意ニ任ス

(八枚目)

道法嫡子ニ立ツノ
問題

一門他門ノ地頭御
家人ノ名字ヲ名指
スベシ

(九枚目)

守護代式部三郎忠
光

守護祇候人
在国司四郎道時

忠兼ハ本所進止ノ
仁友兼ハ御家人

者、胸臆謀言令露頭歟、同狀云、所領相伝事宜
任領主之意之間、友教依無実子、讓与舍弟忠兼
之条、何可為不審哉、為偽書否事者、手繼相公
仁等相並致

(紙綴目)

靜論之時事歟云々、此条、友教自元依無実子、
不与讓狀之處、今忠兼構出偽書、為讓狀之由、
令申之条、希代陳詞也、且謀略之企令露頭了、
只為偽書之由、載先段上者、可為上裁、同狀
云、道法立嫡子事、載狀、右上方、不能重言、同
狀云、相向戰場之時、不論親疎、相並大馳向
事、為承前例旨載先陳畢、就之平承狀之由載申
之条、用捨可為上裁云々、先度平承伏之由載申
之条、今又不論申之上者、不及子細、同狀云、
一門他門之地頭御家人不差申名字之間、不能委
陳云々、此条、友教者、道法、友賢二代令扶持
之間、且合戰之時、付友

(紙綴目)

賢手之次第、当国中一門他門以□□□□無
其隱歟之由令申之處、不差申名字之間、不能委
陳之由令申上者、隨所望所注申也、其時守護代
式部三郎忠光、守護祇候人中務三郎入道、又同
岩屋次郎入道、当国御家人在国司四郎道時所令
見知也、可有御尋歟、其上於致各別合戰者、可
捧申狀之處、無其儀上者、付友賢手致合戰之条
勿論也、同狀云、如友兼所進陳東御教書御返事
者、大略執印職事也、又云、執印職相承仁可帶
持之由事、取此条、友成、道法、友賢三代相
承文書事、載先段了、同狀云、抑留件御教書
等、如自分証文、忠兼者本所進止之仁、友兼者

(二枚目)

本所一円

重書

知行相伝ノ地頭御
家人ニ指シタル誤
ナクバ本所收替セ
ラルトモ武家ヨリ
御口入アルハ先例

(五枚目)

(紙綴目)

御家人之由令称申之条、嘗非破迎阿状、奉違背
關東御教書哉云々、此条、前後不覺申状也、文
書相承事、并忠兼本所進止次第、載先段了、且
友賢所帶等事、守迎阿状、不可混亂之由、始中
終訴申之、忠兼令違背彼大間状畢、又友賢立申
關東御口入之先例、忠兼称申本所一円之由、而
今以忠兼兩条謀案、讓友賢之条存外也、且陳詞
明白之問、不及巨細、同状云、友賢古色一紙御
教書中仁立申用捨儀之問、云關東云本所、共以
奉違背条顯然也云々、^取此条、彼地關東御口
入之条、御教書等明白之問、任先規言上關東、
可申入本所之由令申之条、何可為奉違背關東本
所之儀哉、將又一紙御教書中仁用捨之条、忠兼
備案之了見也、同状云、友賢令抑留社家重書、
執印職証文等云々、^取此条、載先段了、同状
云、雖為本所進止、地頭御家人相伝知行之時、
無指誤之處、本所被改替之日、有武家御口入条先
例也、相伝知行証文炳焉也、令帶本所任補、令
領知事者、云關東御式目、云先規例、無相違之
處、當給人無指科令望申之、友兼爭通重科哉
云々、此条、如忠兼所存者、無科御家人本所被
改替之時、只限此一事、在關東御口入之由、那
推之趣心狹濫陳也、有理運之子細之時者、爭無
御口入哉、且傍例非

(紙綴目)

一歟、況彼所帶等者、自元有關東御口入之先規、
忠兼又稱偽書、致無道押領、爭無御口入哉、而
今忠兼偽書之次第達上聞者、罪科難通之問、無
道押領爭無御口入哉、而今忠兼偽書之次第達上

非御家人并凡下
ノ仁ニ改補スルハ
幕府議ム

天福・寛元御教書
本所進止地ヲ知行
スル鎮西御家人ノ
張行ヲ議ム

式目ニ守護非法ヲ
議ム

(六枚目)

友兼ハ友教ノ甥忠
兼ハ友教ノ舍弟

友教ハ有筆ノ仁ナ
レバ變決ニ白筆ヲ
用フベキニ代筆ナ
ルハ不審

聞者、罪科難通之問、頻痛巾之条、忠兼奸謀令
露顯者哉、同次云、雖為本所進止、地頭御家人相
伝知行之時、以非規被改補非御家人并凡下仁等
之条、有御誠歟云々、此条關東御口入之段者承
伏了、但以非御家人凡下仁、被改補之時、有御
口入之由、忠兼令申歟、況重科令露顯之時、任
先例有御口入事、為勿論歟、同状云、忠兼者本
所進止之由難之、友兼者乍帶本所進止証文、御
家人之由名称之趣、招罪科歟云々、^取此条、
忠兼本所進止之段、并友賢任先例、言上關東、
可申入本所之由、令訴申之次第、載先段畢、可
有何科哉、同状云、如天福・寛元御教書者、鎮
西御家人令知行本所進止地之處、被鎮本所非法、
被誠御家人張行之旨所見也、御家人不可知行本
所進止領之由不被誠云々、此条、御家人不可知行
本所進止地之由、不申之上者、天福・寛元御教
書非忠兼謀陳之潤色歟、隨而友賢理訴何語与忘
相違之由可令申哉、同状云、所被載御式日者、
被誠守護非法歟云々、此条、忠兼了見之次第、

(紙綴目)

非御式日之趣存外也、同状云、諸人相論之法讓
狀自他筆跡事、相當于相論竊望仁之時事歟、友
兼者以為友教甥之許、不帶手懸狀、令相承証文
之由、構出虛誕及誣訴、忠兼者為友教舍弟上、
帶讓狀之處、以無指所難証文、暗為偽書之由称
申云々、此条、忠兼所稱申讓狀之状、紙綴非一、
先度一々仁令注申畢、友教者有筆之仁也、尤可
用白筆之處、何為他筆哉之由令申之處、不及分
明陳答、相當竊望仁之時、可有自他筆跡沙汰之
由、令申之条希代謀言也、友賢為友成嫡

(七枚目)

友教ハ弘安三年実
名ヲ友教ト定メシ
ガ友教ト改メス
実名ヲ知ラザル場
合姓ノミ成ハ姓名
ノミ成ハ姓名ハ一
般ノ例

(四枚目)
鶴熊丸

弘安四年九月領家
下文ニ惟宗鶴熊丸
ト載ス

友教ガ領家ヘ進上
ノ状ノ位署ニ鶴熊
丸トアリシ故領家
ノ下文ニニ重名ヲ
用フ

(紙繼目)

孫、帶迎阿大間帳以下証文并最明寺殿御教書等、所擬札明忠兼偽書也、競望尤當其仁哉、將又不帶一紙狀、以一腹兄弟之儀、難備偽書実書証掘之処、忠兼者為友教舍弟之由許ヲ称申之条、所存如何、同狀云、友教加冠俗名事、弘安三年雖定実名お友近、令改名友教了、実名お依無御存知歟、被載重名お本所下知之条、何可為所難哉、不知食実名之時、或載姓許、或載重名許、或被載姓与重名之条、公家武家政道無相違云々、此条、忠兼偽書事今沙汰之条片心也、弥令露頭者哉——書載名字

(紙繼目)

〔奉行所令申鶴熊丸之間、請彼狀文領家、所被成下知也、実名お不知食之由、載今陳狀之条、先後不覺申狀也、令改名友教由事、疑殆非一者也、弘安四年以前、遂加冠定名字者、爭同年九月領家御下文仁可被載惟宗鶴熊丸哉、謀計企令露頭之処、如忠兼濫陳者、弘安三年雖定実名お友近、令改名友教了、而実名お依無御存知歟、被載重名お本所御下知之条、何可為所難之由令申之条、謀計之企、偽書之構忽令露頭了、其故者忠兼所構出之偽書以後、鶴熊丸令進上領家狀乃位署云、惟宗鶴熊丸進上伯耆左衛門入道殿云々、就此鶴熊丸狀、領家御下文云、大中島事、鶴熊丸如元可令知行之由、先度加下知畢云々、而今領家無御存知志大被載重名之由、忠兼令申之条、眼前之奇謀也、將又弘安三年遂加冠、雖定実名お友近、令改名友教者、爭令進上領家之狀、惟宗鶴熊丸ト可令書哉、凡前後相違、紕繆

忠兼ノ所論一貫セ
ザルハ友教死亡ノ
後ニ偽書ヲ構出シ
タルニヨル

執印友雄ノ新田宮
執印職等ヲ當知行
セルコト相違ナシ

執印友雄ノ新田宮
執印職等ヲ當知行
セルコト相違ナシ

非一、是則友教死去之後仁忠兼所構出之偽書之間、首尾令相違畢、且所仰高察也、凡忠兼不帶一紙文書、奉探本所、押妨非分所領之条、爭可遁重科哉、仍擬申破因東御口入之条、忠兼所存者憚偽書露頭之故也、同狀云、於重代相伝御家人

七六 左衛門尉朝員奉書案

23

(端裏書)
「本所狀」

本文一〇号文書ニ全シキヲ以テ省略ニ從フ

七七 執印氏具書案

80

イ、山田宗久請文案

去三月廿九日御奉書謹拝見仕候迄、抑左衛門大夫友雄中、所領薩摩國新田宮執印職并五大院々主職、及散在名田畠免田等安堵事、當知行無相違候、將又可支申仁有無事、不令存知候、若此条偽申候者、

八幡大菩薩御罰可罷蒙候、以此旨、可有御披露候哉、恐惶謹言、

曆応四年六月廿三日 左衛門少尉宗久 請文案

ロ、沙弥權藏請文案

左衛門大夫友雄中、所領薩摩國新田宮執印職并五大院々主職、及散在名田畠等地頭職安堵事、去三月廿九日御奉書謹拝見仕候畢、抑彼所領所職并五大院々主職、及散在名田畠免田等當知行無相違候、將又支申仁無之候、若此条偽申候者

八幡大菩薩御罰可罷蒙候、以此旨、可有御披
露候、恐惶謹言、
曆応四年四月七日 沙弥禅殿 請文
在裏判

七八 某請文案

84

薩摩國八幡新田宮執印友雄、訴申候神領下地押
領神役対捍山事、今年二月廿九日、同三月四日御
教書案、六月五日御催促状、七月一日到来、謹
拝見仕候畢、抑如友雄謀訴状者、神領下地押領
神役対捍云々、此条不知案内申状也、号下地押
領者、当官所司座主智性房職田益丸名内仏性八
段、并友雄庶子道忠^{今者}死去、忌宗馬入道宗印分領
内日公介五段事歟、此田地者、自宗印并智性之
手、令買得以來、於社役者、任本主智性契状、
毎年無闕怠、令勤仕之間、恒例神事無相違被遵
行畢、於下地者、買得知行無相違之處、關本主
等、員外友雄以○後歟

七九 武光忍性請文案

85

〔端表書〕
「武光大学入道請文 康永元九廿四」
薩摩國八幡新田宮執印友雄、訴申候当社致^{端力}最中
致新田由事、今年三月四日御教書案、同六月五
日御催促状、七月二日謹拝見仕候畢、抑如友雄
謀訴状者、当社御放生会致^{端力}最中、島廻田三段
致新田云々、此条不足言申状也、当國南方凶徒
等、以去曆應武年六月廿日、押寄薩摩郡嵯山
守護代并忍性子息、城、及度々合戰畢、爰号神人十
兼材以下御方等

宮里ノ檢見城

味方ノ早山ヲ劫取
ル
敵ニ与同ノ科タル
故味方ノ兵糧トシ
テ守護方ヨリ斯取
ル
下作職

薩摩南方ノ宮及ビ
洪谷ノ人々、嵯山城
ニ酒匂久景ヲ攻ム
新田宮ノ御山ヨリ
鎗音二三度寄手ノ
軍中ニ響入り味方
ノ勢勝トナル

酒匂久景

郎太宮司者、隨友雄催促、属于式部藤三郎手、
楯籠宮里檢見城、差遣彼下郎太宮司以下友雄從
人等、令取兼材以下御方人々分領早田等之間、
依為罪科之仁、凶徒引退之後、自守護代酒匂次
郎左衛門久景方、於彼太宮司作出等者、依凶徒
与同之科、為御方兵糧米可劫取、於下作職之地
者、任夷正可注給之由依被申、島廻田三段令皆
免之旨就申之、自守護方被劫取畢、全以忍性令
新田不破致^端者也、仍為披御不審、守護代久景
書狀備進之、若猶有御不審、
可有其隱、國中狼藉有○後歟

〔第七号〕

八〇 酒匂久景注進状

77

去六月廿二日薩摩國南方御敵并洪谷人々押寄嵯
山城、及散々合戰、御敵既取破城壁桓立、攻入
之時、自八幡新田宮御山、鎗音二三度響入于寄
手凶徒等中、其時神慮令然哉、御方軍勢乘勝致
合戰之間、彼凶徒等討負引退畢、神明貴仰而猶
可奉仰者哉、仍為御不審、注進言上如上件、
曆應二年八月十五日 左衛門尉久景(裏花押)
進上 御奉行所

八一 島津忠恒知行宛行目錄

113

薩州郡之内知行目錄
限城

隈城西手村

豊臣秀吉ノ時勅落
セラレシヲ復ス

執印吉左衛門尉

薩摩郡干畑名ノ水
田萩原ノ内五反

惣官職ハ従前ノ筋
目ニヨリ執務セラ

西手村之内、屋敷一ヶ所

高五拾石 但七拾石卷斗六升八合五勺之内

右、知行之事、先年以京儀、雖勅落候、為当
家繁栄、武運長久、奉寄進候、於神前、可有
祈禱者也、

慶長四年拾月廿八日

忠恒(花押)

執印吉左衛門尉殿

八二 島津家久書狀

115

昨日者、此方迄預御尋候之處ニ、殊外致沈酔、
即不遂参会候之事、不及是非候、委者尚可申
述、如此候、恐々謹言、

正月十二日

(島津)
家久(花押)

執印河内守殿

御宿所

(註) 折紙

八三 島津氏家老連署神領寄進狀

110

新田宮

薩摩郡干畑名之水田萩原之内五反
為御神事領、奉寄進之狀如件、

文明十年三月六日

村田肥前守經安(花押)

平田右馬助兼宗(花押)

執印殿

八四 島津氏家老連署書狀

111

今度相論之事、以有恕之儀、先々被差置候、神
妙之至候、仍惣官職之事、任而々筋目、可有執

ルベシ

御造宮千部会

伏見城普請人夫三
千石ニ付人宛十
石ニ付四十四文宛
ノ出錢ヲ懸ク

務候、社司神宮等、如先規、可隨御下知之旨、
被仰出候、以此趣可有御成敗条、可申由候、恐
々謹言、

五月十日

(平田)
兼宗(花押)

(村田)
經安(花押)

執印殿

(註) 折紙

八五 島津氏家老連署書狀

117

猶々各ハ城へ被登せ候へ共、貴所之事者、御
造宮ニ別而御入魂肝心たるへく候、

就御造宮千部会之儀、各々御申ニ而候敷、乍去
御感無余儀子細候之問、不用有間敷様仰達肝要
候、題目御祈禱之儀候之条、難決無之、入魂可
目出候、恐々謹言、

二月八日

(伊集院)
久信(花押)

(平田)
光宗(花押)

(伊集院)
忠棟(花押)

執印河内守殿

御宿所

(註) 折紙

八六 島津氏家老連署書狀

112

覺

伏見御屋形御普請ニ付被召上候夫盛之事、三千
石ニ付召人つゝ盛にて、依其拾石ニ付四十四文
つゝ、出錢相懸候、其元社家中之高六百斛分出錢

社家高六石分ノ
出錢ヲ納入スベシ

近日中ニ此方へ可被納候、殊之外御急用之儀ニ
候条、聊御抽斷有ましく候、以上、

後八月廿八日

比志島紀伊守(黒印)

鎌田 出雲守(黒印)

川内にて

執印吉左衛門尉殿參

八七 島津氏家老連署杜領寄進狀

114

御拜進領

薩州

市來
鹿兒
之内

市來之内大里村 上野門

高四拾石五斗

鹿兒之内

本寺屋敷

高拾六石九斗三升四勺

同所

宮原やしき

高拾四石七斗九升七合八勺

同処

鹿兒原屋敷

高拾七石四斗八升二合五勺

知覽滴水別府之内

浮免

高拾石三斗三升

合百石四升七勺

右知行之事、此度御念願為御成就、被相付候、
勿論公役之儀者、可為諸寺社御同前候、本日録
之事者、從京都御下国之御、可被仰付候、先以
為御祈念、証文如斯、

慶長七年
拾二月廿四日

鎌田出雲守
政近(花押)
比志島紀伊守
国貞

高城郡麓村ノ内
浮免

六月御祭田不足ニ
ヨリ六石寄進ス

御遷宮
維新様

包丁仁

八八 島津氏家老杜領寄進狀

116

日録

薩州高城郡麓村之内

一 浮免

はす町 中田 四反式畝 五石八斗八升 馬場、源太

同所 三反一畝六歩之内

中田 三畝六歩 四斗四升七合九勺六才 町ノ金藤

合分米六石三斗二升七合九勺六才

右知行六石者、六月御祭田不足之由候間、被相
付旨候、仍如件、

慶長十年 正月廿九日 (黒印) 伊勢平左衛門尉

執印吉左衛門尉殿

八九 御遷宮覚書

118

覚

一 御遷宮来廿八日ニ相定候事

一 維新様御越之儀者、来廿五日ニ相定候事

一 御光儀ニ付、前を以目出度存候通、使にて可
被申上候事

一 御振舞可被中通、平左衛門尉殿迄被申上尤ニ
存候事

一 就夫包丁仁、御前之御道具等被申請候而可然
候事

已上

樺山權左衛門尉
久高(花押)
圖書頭
忠長

執印休左衛門

杜家ノ主取

千儀
大檢校
權執印

京泊口出入ノ船改
メ置目他船ノ岸
ノ時ハ役人出合ヒ
点検スルノ要アリ
旅行者ノ薩摩内地
旅行ノ時ハ証券ヲ
要ス

九月廿日

九〇 權執印外二名連署請文

120

書物

今度執印休左衛門と我々相論之儀申出候、先休左衛門被申候者、新田杜家主取、前々より吾人ニ而仕之由被申候、我々申候者、休左衛門与同役ニ而諸事相勤申候由申上候、左候而御与所へ被召出、双方之口柄并古来より格護申候諸証文御覽被届、休左衛門理運ニ被聞召究、向後休左衛門可隨下知ニ之由被仰聞候、此上者申分無之御座候、休左衛門下知ニ難決申間敷候、此旨可然様ニ被仰付可被下候、以上、

寛文三年卯六月十九日

新田杜家

千儀 (花押)

大檢校 (花押)

權執印 (花押)

肝付伴兵衛殿

川上上野殿

島津安芸守殿

御筆者中

九一 京泊船改条目

119

京泊口出入之船改目之事

一他国之船着岸之時者、早々出合、先以一人もおろさず、船頭、水手、中乗、積荷等迄、細可被相糺事
一旅人内場へ罷通候ハ、先之宿主へ墨付被相付、帰宅之御者、亭主之墨付持来候様ニと、

地下船

法度ニヨリ外国へ禁輸ノ商売物

火急ノ場合ノ早打

ニハ案内者ヲ付ク

ベン

權執印良運阿多院
田本名主子息泰忠
ガ實券入流ノ蘭及
ビ押領物ヲ打渡サ
レンコトヲ請フ

亡父妙慶

權執印妙慶ノ訴フ
ル阿多本名主子息
泰忠ノ入置ク所ノ
質券蘭一所

可被申付事

一地下船、從他国帰帆之時、便船之人於有之者、為其船頭、役人へ懸合可申事
一從所中、他所へ出船之改、別而念を可被入事付連々被成御法度候之商売物、堅彼出間敷事一自然急用之儀ニ付地方より早打等、夜中なとニ来着候ハ、案内者を付、可被指通事
右之条々、若於違背者、到役人、可有其沙汰者也、以上、

慶長二十年正月四日

(比志島岡貞) 紀伊守 (花押)

〔權執印文書古写七 自元享四年八月二十七日通〕

九二 權執印良運重申状并具書案 62

イ、權執印良運重申状案

八幡新田宮權執印良運重言上

欲早仰御使、被打渡、為阿多院田本名主子息

新大官司、所入流質券御館田北園一所并年々押領物事

副進

一通 領家御教書 元亨四年八月廿八日

右件通事、亡父妙慶存日、令言上領家之日、可尋成敗、就于被仰下、先日御權促畢、然任傍

例、仰御使被打渡、於年々押領物者、任員數為糺給之、言上如件、

元徳三年二月 日

ロ、領家御教書案

權執印妙慶申、阿多本名主子息泰忠所入置質券蘭一所事、申状具書如此、早且令尋成敗、且可被注申之由、被仰下候也、仍執達如件、

元亨四年八月廿八日 紀御在判
謹上 新田宮執印殿

九三 領家下知狀案

39

在御判

新田宮權執印妙慶与阿多五大院田内弥平太入道跡名主久頭代重僧相論、書生得分并算失段米等事

權執印妙慶ト阿多
五大院田内名主大
隅久頭代重僧トノ
相論
書生得分
算失段米
執印道殿
三問三答

下人愛王女妙慶舞
ノモトニ逃籠ル
懸置ク所ノ下人愛
王女ニ未進分ヲ便
補又
大隅久頭

右、如今年七月十八日執印道殿注進狀者、番三問三答問、統訴陳可令注進之由雖相觸、留案統進之云々、如訴狀者、雖多子細、所詮彼院田内弥平太入道跡書生得分、算失及段米、久頭知行以後、元応元・式兩年抑留云々、如重僧陳者、彼進分者、下人愛王女逃籠妙慶舞許之間、懸置可使補彼得分由約束畢云々、抑留彼得分之案不及異儀、可使補所懸置之女童由事、為胸臆之間、非沙汰之限歟、次応長二年未進事、重僧不相符之由雖申之、自元対久頭訴申歟、隨而難決之篇及注進之上者、旁久頭罪科難通歟、然則於元応元・二兩年書生得分并算失段米等者、☐解、任員數、可令札返之狀、依仰下知如件、

元亨四年八月廿八日

紀清兼

九四 權執印妙慶申狀案

41

〔端裏書〕
「妙慶訴狀案文 本名主并泰忠等書生得分未進事 元亨五年正月日」
權執印妙慶謹言上

阿多新大宮司泰忠
父蓮道ノ未進十五
石
書生得分
元ノ名主ノ拘分算
失段米以下七十六
年間未進又

新田宮權執印職惣
檢校職惣殿上職

五大院寺下司

政所職

大檢校職

書生職

宮里鄉勢万名三分
二方

高城郡世戸口

弟共ニ七分議

阿多新大宮司泰忠親父蓮道未進拾伍石事、不日可并濟山、雖及御下知度々、一向泰忠不致其并上者、難通違背罪科者歟、次延慶貳年書生得分、公文所御切符内、元名主拘分算失段米以下壹斗壹升六合云々、然則自延慶貳年、至于元亨四年、拾陸ヶ年不致其并条、不可說次第也、云以前未進、云自延慶二年以來未進、不日可勘渡由欲蒙御成敗事

右、未進等事、云度々御下知、云公文所御切符、旁明白也、然則令違背領家御下知、背公文所御切符、一向泰忠憊急之条、無所通罪科者哉、所詮彼未進等任員數、不日可札渡之由、為蒙御成敗、言上如件、

元亨五年正月 日

就此狀御書下米見出不審也

九五 權執印妙慶讓狀案

43

讓与 当權執印所

〔一カ〕

〔一カ〕新田宮權執印職、惣檢校職、惣殿上職

〔一カ〕

〔一カ〕寺下司政所職、大檢校職、書生職

一薩摩國宮里鄉勢万名參分貳方、但此内參分壹

民部房讓之、讓狀在別紙、關東御公事以下諸

公事等、且依先例、且任鄉例可勤仕、

一同國高城郡内字世戸口伍段坪令知行大、御公

事以下任先例可勤仕、

一滿熊丸仁自余略之

一此外 自余略之

〔新田〕

〔一カ〕宮近案所職内田畠等、弟七毛仁面々所讓与

所從
所持物具足

若シ弟等ノ中ニ異
儀ノ輩アル時ハ江
口殿ノ前ニテ評定
シ正直ニ任セテ裁
断スベシ

權執印妙慶、嫡子
良邁ニ所領ヲ讓ル
宮里郷内勢万平田
高城郡内世戸口
莫禮院恒本田并ニ
牧野園ハ女子等ニ
一期ノ間之ヲ讓ル

五大院用
書生得分

也、守彼面々讓狀、不可致違乱、皆成子息思、
可宛不便、將又所從并所持物具足等、弟上毛仁
讓与外、田畠免田皆當權執印可令進退、彼等仁
所讓田畠所從具足等、聊不可致違乱、若□□等
中仁有令申異儀輩者、於江口殿御前、遂評定、
任正直、可止弟等異儀、聊不可違、仍讓狀如件、
正中參年卯月廿二日 權執印妙慶在判

九六 權執印妙慶讓狀案

44

讓与 執印良邁所
薩摩国宮里郷内勢万平田一町
同国高城郡内世戸口五段
同国莫禮院内恒本田三段、并牧野園式所、
但莫禮院田畠者、女子等一期之後者、
可知行良邁、

右田畠者、妙慶重代相伝所領也、然間相副御下
知以下証文等、依為嫡子、所讓与良邁也、至于
子々孫々、無他妨領掌之、於關東御公事等者、
任先例可令勤仕、仍讓狀如件、
正中參年卯月廿八日

權執印妙慶在判

九七 大隅新三郎久顯書狀案

46

〔端書〕
「大隅新三郎殿書札 嘉曆元十二四」

懇と令申候、五大院田内知行四十六段分御年
貢、此程不被致其弁候、何様候乎、急々被弁候
者、可為御意候歟、通書生分も少々未進之由申
候、互ニ御結解之□可有治定候、毎事期後信、
(上カ)

大隅久顯

新田宮雜掌道海造
宇佐宮用途ヲ免ゼ
ラレンコトヲ訴フ
使者宗寛
探題赤橋英時奉行
筑後入道ニ事ノ実
否ヲ注サシム

新田宮雜掌道海造
宇佐宮用途ヲ免ゼ
ラレンコトヲ訴フ
使者増成支証等ヲ
披見シ正校ス
探題赤橋英時奉行
佐渡次郎ニ事ノ実
否ヲ注サシム

恐々謹言、

十二月四日

〔大隅新三郎〕
久顯 判

謹上 權執印殿

九八 鎮西御教書案

48

〔端書〕
「筑後入道殿ニなさるゝ御教書の案文」
薩摩国新田八幡宮雜掌道海申、造宇佐用途事、
訴狀書 如此、子細見狀、於当社領、無所謀之
次第、使者宗寛令披見支証狀等、令正校云々、
早実否可被注申、仍執達如件、

嘉曆式年七月五日

〔北条英時〕
修理完 在判

筑後入道殿

九九 鎮西御教書案

47

〔端書〕
「佐渡次郎殿ニなさるゝ御けうその案文」
薩摩国新田八幡宮雜掌道海申、造宇佐用途事、
訴狀書 如此、子細見狀、於当社領、無所謀之
次第、使者増成令披見支証等、令正校云々、早
実否可被注申、仍執達如件、

嘉曆式年七月五日

〔北条英時〕
修理完 在判

佐渡次郎殿

一〇〇 新田宮雜掌道海申狀并具書案

52

イ、新田宮雜掌道海申狀案

〔端書〕
「道海庭中狀案」

新田宮雜掌道海博
多ニ在ツテ訴フ
國分道善ノ申狀ヲ
召下サレ當奉行人
大保契道方ニ訴訟
ノ促進ヲ仰セ付ケ
ラルベシ

新田宮領ニ宇佐宮
造管役ヲ停止セラ
ルトノ院宣及六波
羅御教書ヲ下サル
國分道然院宣等ノ
正文ヲ抑留ス
一番御手山城崇盛
奉行タルトキ訴ヘ
道然ニ御教書ヲ下
サル
武六郎以兼代ツテ
奉行タリ
武員兼閑東へ上ル
ニヨリ大保契道奉
行トシテ改メテ召
文ヲ執印ニ成還サ
ルトノコトヲキク
博多ニアル雜掌ヲ
聞キ執印ニ改メテ
御教書ヲ下サルル
ハ參差
國分道善ノ申狀ヲ
下給ハルベシ奉行
ハ使館ノ請文ヲ待
ツベシト返答
而便文書正文ヲ正
校セシメシヤハ

八幡新田宮雜掌道海博庭中言上

(善)
欲早被召下薩摩國分助次郎入道々然申狀、可
被經急速御沙汰旨、被仰下當御奉行人大保六
郎入道契道方、道然抑留上宣以下六波羅御教
書正文等事

副進

三通御教書案、二通先進畢、
雜掌道海中成之、

右、於當宮御領者、先規被止宇佐造管役之由、
被成上宣以下六波羅御教書於社家之間、云往山、
云當先度、聊不致其并、隨而彼上宣以下正文御
使宗實等被披見之處、道然猶以抑留之間、為一
番御手、山城三郎入道崇盛御奉行、就訴申、所
被成御教書於道然也、其後被渡成武六郎貞兼方、
及使御教書畢、而貞兼閑東參上之間、道然就
申渡彼沙汰於契道方、被成還召文於執印之山承
及之間、被聞不退在津雜掌道海、被成還御教書
於執印之段、御沙汰參差眼前也、適道海雜掌之
案、備進御教書分明之上者、不及御不審、雖然
事繁之間、御奉行人被思食涉歟之間、所詮下給
道然申狀、可明申旨、連日令申之處、敢以不被
召下之、剩可待使節請文到來之由、返答之間、
空送數十ヶ日之案、無術之第也、早可被召下道
然申狀之旨、欲被仰下矣、次貞兼奉行之時、彼
上宣以下正文事、兩便宗實、令正校否、被成度
々御教書於兩御奉行佐渡方之處、不被申分明左
右之間、重可被成御教書之旨、捧訴狀之處、如
契道返答者、道然令申成還召文於執印之上者、彼
請文到來之時、相並可被成御教書於兩奉行人之
旨、引付一同之由返答之案、是又難堪之次第也、

ニ讀フ
神訴タルニヨリ默
止シガタシ

新田宮雜掌道海宇
佐造管用途ノコト
ニ付訴フ
國分助次郎入道
善院宣并六波羅施
行狀正文等ヲ持參
セズ

渋谷人々
新平次入道
弥平三入道
車内又二郎入道
守護代酒勾平内兵
衛入道
溫田地頭代
觀音丸地頭代
牧納使太郎兵衛入
道
在國司兄弟

貞兼奉行之時、被成三ヶ度御教書上者、有滯令
今更可被押御教書乎、適為神訴之間、難被默止者
也、然早被成重御教書於御奉行人佐渡方、被召
出請文、為經急速御沙汰、庭中言上如件、
嘉曆三年七月 日

口、鎮西御教書案

八幡新田宮雜掌道海申、宇佐造管用途事、重訴
狀如此、薩摩國分掃部助次郎入道々善背催促、
不持參院宣以下六波羅施行正文等云々、早相尋
実否、載起請之詞、可被注申也、仍執還如件、
嘉曆二年七月五日
(北条英時)
修理亮 御判

(二階堂行雄)
隱岐三郎左衛門入道殿

一〇一 新田宮國分氏相論証人
交名注文家

55

(端裏書) (名案カ)
証人交 (名カ)
注進 於新田宮 (名カ) 上宣等國分助二
郎入道々然所持之間、自社 (名カ) 可買之由、令
中之案、聞及否可有御尋人 (名カ) (為事)
一渋谷人々 新平次入道 弥平三入道 車内又
二二郎入道 副田北尾 寺尾 中村地頭 副田
山口 楠本地頭代
一當國守護代酒勾平内兵衛入道子息兵庫允
一高城郡
地頭代大藏左衛門入道 溫田地頭代衛門次郎
入道 觀音丸地頭代青 (牧納使太郎兵衛入
道) (經兼)
道 在國司兄弟等 武光弥三郎入道 舍弟伴三

武光弥三郎入道 同伴三郎入道
一分地頭代本田民部入道
郡司吉富又太郎入道
成枝領主
成富太郎
山田九郎入道
延時
光富又二郎入道
白浜三郎入道
宮里郷地頭
三分二地頭高崎二郎入道
郡司九郎入道
安養寺院主
高江石塚三郎入道

郎入道 上村六郎入道 舍弟三郎入道
一薩摩郡内
一分地頭代本田民部入道 一分地頭小田原弥二郎入道 郡司吉富又太郎入道 成枝領主
上野四郎太郎 舍弟三郎四郎 成富太郎
同舍弟彦二郎 山田九郎入道 延時 富長
赤佐水姓仙 光富又二郎入道 白浜三郎入道
同五郎入道 同孫六入道
一宮里郷 地頭式部孫七 三分二地頭高崎二郎入道 郡司九郎入道 益富松本入道 弥五郎入道 又三郎入道 又太郎入道 又二郎入道 弥四郎入道 三郎二郎 弥六入道 禪理房
安養寺院主
高江石塚三郎入道 同又太郎入道 同平七入道 同小四郎入道 同三郎四郎 又四郎入道 大三郎入道 五郎太郎入道 紀平三入道 紀藤五入道
長崎寺淨觀房 源朝房 正末三郎五郎入道 堀切六郎太郎入道 了性房 六郎二郎入道
一市来孫太郎
一東郷三郎左衛門入道 子息左衛門入道 鳥丸在国司四郎入道
右為有御尋交名人注文、粗言上如件、
嘉曆三年

一〇二 鎮西御教書案

53

〔端裏書〕
「延時四石御供米事、使節御教書案到來 嘉曆三八月廿三日」

御神拜内神馬并供米
鹿兒島郡司矢上左衛門五郎薩摩郡司次郎入道延時法仙

平氏女并子息熊次郎九下大夫律師妙慶下ノ相論

尼妙心

新田宮領阿多五大院田
院田
名主大隅久頼抑留

薩摩国八幡新田宮雜掌申御神拜内神馬并供米等事、重訴狀三通如此、鹿兒島郡司矢上左衛門五郎、薩摩郡司次郎入道跡 延時又三郎入道等、背度々下知、不致沙汰云々、尋問違背実否、載起請之詞、可被注申、仍執達如件、
嘉曆三年七月三日
〔北条英時〕
修理亮 御判
〔東郷重吉〕
波谷又次郎入道殿
〔奥書〕

「此御教書者、社家訴狀ハ三通上タルヲ一通ニ被成、鹿兒島・薩摩郡司次郎入道跡分訴狀ハ在公文所也、四石御供米延時ヲ訴狀許書之、
嘉曆三年八月廿三日於公文所書之」

一〇三 權執印良還請文案

57

就平氏女并子息熊次郎丸、大夫律師琳慶相論尼妙心□美否事、去二月十三日御教□、今月四日御催促狀、同五日□拜見仕候畢、抑琳慶□□尼妙心由事、全以不存知□□□、可有御披露候、恐惶謹言、
元德二年三月十二日 新田宮權執印良〔良運カ〕

一〇四 新田宮雜掌申海申狀案

59

〔端裏書〕
「新田宮雜掌申 元德二八五」
薩摩国八幡新田宮雜掌道海謹言上
為当官御領阿多五大院田内弥平太入道跡名主大隅新三郎〔久頼〕、違背領家御下知并執印權

ノ所当米及書生得
分算失段米守護方
ニ訴フルハ差合ア
ルニヨリ公方ニ言
上ス

書生得分支配状

院田檢注地ノ書生
得分ハ權執印重代
ノ職タリ
算失段米
田所次郎蓮道檢注
使入部ヲ止メ書生
得分ヲ弁ゼンコト
ヲ請フ

熊丸ニ知行セシム
ベシ

促状、抑留四土陸段所□□、書生得分、算失
段米等間、雖可訴申守護方、依有差□□令
言上公方也、然且依先例、已任領家御下知并
執印催促状旨、欲蒙御成敗事

副進

一通 鎮西御教書

守護差合所見備之
正和四年七月廿四日

二通 領家御下知

元亨四年八月廿八日
同年同月同日

一通 執印催促状

延慶二年十月晦日

一通 書生得分支配状

一通 可弁書生得分等由名主蓮道状

右院田者、於毎年檢注地、書生 權執印 算失
段米等之条先例也、爰彼院田名主田所次郎入道
蓮道止檢注使入部、有限可弁書生得分等之由白
請申之以來、迄于当名主等、致其沙汰之処、限
久願抑留彼得分物等之間、於社家公文所相番訴
陳、被注進彼状等於領家、雖蒙裁斷御下知、久
願募武威、不致其弁之上者、且任先規例、只依
御下知等之道理、云々々抑留分、云向後段、可
究済之由欲蒙御成敗矣、次四土陸段所当米久願
押取事、子細雖多之、所詮任相伝知行之旨、停
止久願濫妨、任元應御下知、熊丸可令知行、所
抑取之所当米者、遂結解任員數、可究済熊丸之
由、雖預領家御下知、為久願非分知行名主、不
及其沙汰之条罪科不輕者哉、然早任彼御下知等
之旨、為蒙御成敗、粗言上如件、

元德二年六月 日

一〇五 新田宮雜掌道海申状案

58

新田宮雜掌宮里鄉
内安養寺院主導門
房正海ノ出舉米粗
等ヲ返サレンコト
ヲ訴フ守護方ニ訴
フルト雖モ差合フ
ノ間公方ニ言上ス

修理料出舉米粗

鎮西探題北条英時
大隅久願ヲシテ新
田宮雜掌道海ノ訴
フル段米以下ノコ
トニ就キ言明セン

(端裏書)

「新田宮雜掌申 元德二七廿八」

薩摩國八幡新田宮雜掌道海謹言上

為同國宮里鄉内安養寺院主導門房正海、入置

當宮浜殿修理料浮免田伍段代引田下二郎丸内

山本新開田三段於質券、乍請取彼修理料米粗

等、依不致其弁、雖可訴申守護方差合間、所

令言上公方也、然早任請文旨、欲蒙御成敗事

副進

一通 御教書 守護差合所見

一通 正海請文

右、正海入置彼引田於質券、乍請取修理料出舉

米粗等、不致其弁之条、無謂之次第也、適質券

地者、浜殿修理料浮免田代引田也、有子細正海

令知行之、入流彼出舉米筆質券之上者、早任請

文之旨、為被勸後社家、粗言上如件、

元德二年六月 日

一〇六 鎮西御教書案

60

薩摩國新田宮雜掌道海中、段米以下事、訴状 副具
如此、子細見状、早可明申也、仍執達如件、

元德二年八月五日

(北条英時) 修理完 御判

大隅新三郎殿

一〇七 寺家政所下文并富磨手繼状案

一、寺家政所下文案

(寺家) □□政所下 新田宮所司神官等

例名常見淨免田百五十余丁

御建立以来三百余歳

講經供田立用免

国威ニ任セテ新田

宮名山ヲ勘合セズ

別府五郎忠明ノ地頭政所職ヲ停止シ

静秀ヲ以テ政所職

トナサンコトヲ請フ

万得名

前沙汰人兼俊ノ子孫謀計ヲ構ヘテ横人ヲ詔ヒテ私ニ議沙汰セントスルニヨリ彼等ノ沙汰ヲ停止スベシ

富磨政所ノ証文ヲ渡ス

本司率主御房

仰下参箇条

一可早任先例、牒送国衙、企出厅、令勘合当所例名常見淨免田百五十余丁事

右、件御名田如例文者、御建立以来三百余歳之間、天長地久御願為講經供田立用免、無相違御名田也、而今任用各為貪利潤、寄事於有国威、背先例、不勘合之条、尤有神慮之事歟、早付任用

厅官、任先例、可勘合、若有遷避者、可忿言上為経奏聞也、

一可早停止字別府五郎忠明地頭政所職事

右、忠明所行甚以不敵也、何号政所、恣陵隣神民、損亡境内哉、旁以非常也、早停止忠明所職、以静秀可用政所職之状、所仰如件、

一可早任先例当国内万得所領田畠等為官領、且宛神事用途、只調進御年貢事

右、如訴申者、前沙汰之人兼俊之子孫、今構事於謀計、被相語横人、令讓沙汰之由者、事实者、停止彼等沙汰、為官領可致沙汰之、以前条事、任下知之旨、可致沙汰之、敢勿違失、以下、

永万年七月 日

檢校法師 在御判

ロ、富磨手継状案

(富磨)とみまろわたしまいらせ候、まんところのせ文(枚数)(七枚)

うもん、まいすしちまいか事(先相和伝)

右、件せうもんは、せんそさうてんなりといえとも、いまにをいてハ、ほんすすのおんハう

(異)にまいらせ候了、もしこのせうもんをのいそを(誰人)事人にたひ候といふとも、たれのひとにててもあ

(用)れ、もちさせたまふへからす、よてこうたいのためにてつくしたの事し

(七治二年)にんちにねん正月十九日 とみまろ在判

しやうこんハうのまと所のうりけんのあんほんのうわかきにあり

元徳二十年廿日 書之 檢校御房所持案文以テ書写之畢

一〇八 鎮西御教書写

イ、鎮西御教書写

薩摩国八幡新田宮雜掌道海申、免田壹町御供米事、重訴状如此、不応裁許云々、無謂、任先下知状、遂結解、可被究済也、仍執達如件、

元徳三年五月十日 (北条英時) 修理亮 御判

島津下野三郎兵衛尉殿 (実忠)

ロ、鎮西御教書写

薩摩国八幡新田宮雜掌申、免田御供米事、重訴状□此、裁許之後雖催促、不叙用云々、無謂、任先下知状、遂結解、可被究済也、仍執達如件、

元徳三年七月九日 (北条英時) 修理亮 (花押)

島津下野三郎兵衛尉殿 (実忠)

右文書式通、其方家所持之處、就御用御記録所江被召揚、本書無相違致臨写、可相渡旨、依被仰付如件、

延享元年十月十八日

御記録奉行 町田仲右衛門

俊雄(花押)

川上平右衛門

親央(花押)

新田宮權執印

一〇九 新田宮雜掌道海重申狀案 63

〔端裏書〕

〔新田宮雜掌〕

薩摩國八幡新田宮雜掌道海重言上

島津三郎兵衛尉実忠令對捍当宮免田老町御

供米間、可被弁勤旨就于訴申、以去年^{元德}十

月廿五日預御下知処、送而兩年不被遣其道上

者、任定法被經御沙汰、欲糺賜年々抑留御供

米等子細事

副進

一通 御下知要段

右、御裁許先訖、然早為糺賜年々對捍御供米等、

重言上如件、

元德三年五月 日

一一〇 新田宮雜掌道海重申狀案 65

〔端裏書〕

〔新田宮雜掌〕

薩摩國八幡新田宮雜掌道海重言上

島津下野三郎兵衛尉実忠背度々御下知、于今

不被遣其道上者、任定法被經御沙汰、欲糺賜

年々抑留物、当宮免田老町御供米等間事

副進

一通 追御下知案

右子細裁許先訖、然早為糺賜年々抑留御供米等、

重言上如件、

元德三年六月 日

一一一 新田宮五代院領家下知狀案 66

1、新田宮五代院領家下知狀案

〔端裏書〕

〔到來正文者公文所在〕

御判

薩摩國新田宮五代

被仰

下旨、随御使所勸、留守

參洛、有限御年貢已下神用

其沙汰間事

右、当別宮者鎮西五所別宮之尊一、宮寺一円進

止

廿六日御他界之問、依当門跡之家督、且任御契

約、且就被成下給旨、壇前檢校法印御房朝清所

有御管領也、仍帶彼給旨之案并本所御下知等、

被差下御使者也、随御使之所勸、守被仰下之旨、

所司神官沙汰

參洛、有限御年貢已下可被進濟也、更不可有不

法懈怠、兼又御使經廻厨雜事、上落衣裳、草手、

任先例可有其沙汰者、社家宜令承知、不可違失

之旨、依領家之仰、下知如件、

元德三年六月十一日

左衛門尉 藤原在判

前肥後守 平朝臣在判

前淡路守 藤原朝臣在判

山城新免転説田地
薩摩国新田宮五代
院
土佐国用野庄
全 八福庄

新田宮修造料并二
段米
宮里導門房
大隅久頭

薩摩新田宮五代院事、繪旨并領家

八幡宮領山城新免転説田地、并薩摩国新田宮
五代院、土佐国用野庄、同国八福庄事、二条率
相入道契狀之趣、被問食畢、相互向後不可有相
違之由、天氣候也、仍執達如件、

元徳三

三月十一日

左中弁冬長

檀前檢校法印御房

八、新田宮領家雜掌奉書案

八幡宮寺領薩摩国新田宮五代院事、繪旨并領家
御下知如此、子細見于狀候歟、早任被仰下之旨、
所司神官名主已下、帶地下文書等、念々可被企
參洛也、次御年貢已下事、如員數、可被沙汰進
八幡之由、所被仰下候也、仍執達如件、

元徳三年七月一日

前肥後守平朝臣在判

新田宮五代院所司神官沙汰人名主等御中

此三通正文在公文所在之

一一二 新田宮雜掌道海重申狀并

具書案

69

イ、鎮西御教書案

薩摩国新田宮雜掌申、当宮修造料并段米事、重
申狀二通如此、宮里導門房、大隅新三郎等、背
度々催促之間、尋問実否可注進之由、先度仰之
処不事行云々、早速可申左右也、仍執達如件、

正慶元年八月十日

(北条英時) 修理亮 御判

莫彌郡司入道殿

口、新田宮雜掌道海重申狀案

薩摩国八幡新田宮雜掌道海重言上

新法

宮里導門房度々ノ
權足ニ背ク

薩摩国一宮新田宮
ノ本神人等ノ名帳
序座分宮仕檢校
宮仕僧
權宮仕

三昧

淨檢校

副進

(紙縫月)

同国宮里導門房、背後々召文、令難洪問、莫
彌郡司入道被尋問違背実否、依新法、重可
被相触由被仰出上者、任定法、欲被經御沙汰、
当宮修造料米事

一通 御教書案 數通先進畢

右、子細言上先訖、然早急速為被經御沙汰、重
言上如件、

元徳四年七月 日

八、鎮西御教書案

薩摩国新田宮雜掌申、当宮修造料米事、重申狀
如此、宮里導門房背後々催促之間、尋問実否、
可注進之由先度被仰了、早速可申左右也、仍執
達如件、

元徳三年七月二日

(北条英時) 修理亮 御判

莫彌郡司入道殿

案 宮里導門房事、阿多段米事

一一三 新田宮本神人等名帳写

35

薩摩国老宮

八幡新田宮本神人等名帳事 權執印

一庁座分宮仕六人檢校一人

宮仕僧勝源子

今者源顯

息宮仕僧増嚴 宮仕僧運

心 權宮仕親宗 權宮仕淨榮 權宮仕慶

一檢校道覚

三昧六人

新檢校慶意 順檢校成重 權檢校弁

道檢校道蓮 重檢校安光 淨檢校忠

行事僧 二
檢校職 大宮司
檢校職 大宮司
別當僧
御殿守
講衆座分三昧
下部
神宮座分御鑑取
繪所大宮司
神人職司
下檢非違使
行列司
五部神御曾木檢校

行事僧二人
宗門檢校 行專檢校
檢校職六人内大宮司二人
三郎大宮司藤原季友 正檢校道
乘檢校乘慶 源平太宮司春
了檢校慶宝 定檢校慶明
別當僧五人
別當僧正法 別當僧正慶 別當僧
別當僧忠順 別當僧榮金
(紙繼目)
(追筆)「元亨三年八月十日守護代酒匂殿被請
取畢」
御殿守五人
殿守隨心 殿守乘一 殿守
殿守道智 殿守鏡明
一講衆座分三昧三人
宮道檢校 隨行檢校 良田檢校
下部三人
十樂法師 勢樂法師 宗智
一神宮座分御鑑取二人
太郎大宮司山久宗 中江大宮司橘
繪所大宮司一人
内藏清成
神人職司二人
下檢非違使火寸中原定宗 下檢非違使火寸
中
行烈司三人内火寸一人
火寸高橋定広 大宮司江本友永 大宮
御部神御曾木王檢校五人

御馬所神人
大藏種持
御取物神人
御劔持神人
大宮司
御天蓋持神人
御差波持神人
御阿久羅持神人

一天兒屋根神御曾木春日範繩
二太玉命御曾木清原光末
三天鉶女命御曾木清原正次
四石凝姥命御曾木伯佐定信
五玉屋命御曾木藤原定清
御馬所神人十五人内
檢校遊計安弘
德王檢校高階朝宗
孫太郎檢校藤原兼光
五郎檢校平吉房
弥五郎檢校橘宗員
平八檢校八木氏行
六郎檢校八木氏常
八郎檢校河内恒行
御取物神人
御劔持神人三人
上村藤四郎大宮司藤原友弘 高江大宮司布
井
十郎大宮司藤原為永
御天蓋持神人三人
大宮司平景成
大宮司佐伯持広
御差波持神人三人
大宮司小野惟員
大宮司田上景隆
御阿久羅持神人三人
大宮司藤原基治
大宮司大江景忠
太郎檢校藤原国房
馬三郎檢校藤原季治
大四郎檢校大藏種持
藤檢校源兼末
新五郎檢校平基平
紀四郎檢校河内
三郎檢校平兼
新馬關五人
新馬關十人
大宮司中原定親

御與阿久羅持神人

御前弘神人

御幡并唐幡持神人
火寸

秦友平

御前火寸

白杖神人

御鉾神人

御與阿久羅持神人三人

大官司源信成 大官司在原宗能

大官司平政資

御前弘神人火寸二人

(紙綴目)

二郎火寸安部家宗 藤火寸伴良清

御幡并唐幡持神人十二人内唐幡持四人

火寸藤原恒員 火寸平保清

火寸社清時 火寸安部高頼

火寸春道季親 火寸三善経右

火寸平範房 火寸藤原資信

火寸秦友平 火寸平包助

火寸橋国定 火寸安部武頼今者子息□□

御前火寸二人

平八火寸佐伯行親 紀太郎火寸紀永季

白杖神人十五人

檢校清原守房 檢校藤原定光

檢校源持成 檢校文部定広

檢校中原義親 檢校物部澄平

檢校平久国 檢校紀正道今者(正力)子息□□

檢校平道平 檢校三善元家

檢校三宅景康 檢校藤原顯元

檢校田中久則 檢校伯親隆

檢校藤原季秋

御鉾神人十九人

橋次檢校橋正親今者子息正安 太郎檢校財為光

馬太郎檢校財光重 清次檢校清原季国

二郎檢校平国家 源三郎檢校源□□

三郎檢校秦□□ 平八檢校平行吉

(紙綴目)

御鏡磨神人

修理神人

別当職神人

命婦座

左市 右市
中座市 出所市
八立命婦

稻本檢校紀信国 馬三郎檢校伴安光

又六檢校源顯幸 彦三郎檢校社重頼

源次郎檢校財季宗 又五郎檢校泉長光

石太郎檢校平末光 又次郎檢校錦国政

彦次郎檢校紀家吉 彦六檢校橋永行

藤九郎檢校藤原安秀

百卅人

御鏡磨神人十人 檢校文部恒平

檢校平宗頼 檢校藤原教時

檢校佐伯道康 檢校秦重信

檢校藤原教成 檢校橋持村

檢校季久頼久 檢校三宅高宗

檢校平朝恒

修理神人八人

六郎檢校藤原基弘 藤次檢校藤原家久

紀二郎檢校秦守正 平太檢校平頼景

草次檢校草部定持 藤内檢校平常吉

平五檢校源国永 文四郎檢校大中臣胤員

別当職神人十人

藤四郎別当藤原康国 權次郎別当酒井篤平

六郎別当藤原俊秀 八郎別当山辺忠利

清次別当清原春季 中別当文部義通今者子息□□

草六別当平成国 紀藤別当都兼親今者子息□□

權別当中原定永 新次郎別当平助実

一命婦座分

(紙綴目)

左市草部氏女 右市藤原氏女
中座市平氏女 田所市中原氏女
八立命婦八人
市藤原氏女 二命婦上部氏女

懸司命婦

能樂命婦

命婦職司

樂所神人

小社二十四所
太宮司

小社命婦

草道命婦藤原氏女 藤平命婦藤原氏女
庄命婦田上氏女 千与石命婦財氏女
龜松命婦秦氏女 元夜 命婦錦氏女
懸司命婦八人

湯田命婦內藏氏女 屋須命婦源氏女
財福命婦田中氏女 能樂命婦藤原氏女
德石命婦平氏女 物童命婦大中臣氏女
黑房命婦平氏女 虎一命婦藤原氏女

命婦職司一人

四郎大宮司平実光^{今著}息実末
樂所神人六人

禰宜弥藤太夫上部宗清祝太郎大夫藤原幸^口
弥太郎檢校藤原持光 三郎大夫上部師俊
藤四郎檢校平久固 新大夫上部清行

一小社二十四所太宮司二十四人

平 重繼 台 清有 秦 利平

丹治成定 中原弘範 藤原忠澄

藤原道季 広田時敦 大藏種里

小野惟政 小野惟能 源 成連

平忠顯^{今著}息忠末 大江明實 三善成藤

平田氏頼 源 景仲 高階定春

坂上則房 藤原親信 草部道利

(紙繼目)

平 氏弘 藤原為清 橘 国仲

小社命婦二十四人

虎鬼命婦平氏女 田尻命婦藤原氏女

乙命婦清原氏女 石重命婦中原氏女

德夜叉命婦中原氏女 但馬命婦田口^口

勝命婦藤原氏女 宮童命婦物部氏女

若一命婦伴氏女 福增命婦^口氏女

御供所神人

曹司

權曹司

作手神人

放生会宮下荷興丁
御幸荷興丁
猿山彦神御車引神
人

土与石命婦丹治氏女 尾防命婦源氏女

持命婦藤原氏女 田口命婦藤原氏女

有增命婦平氏女 帥大命婦綾部氏女

彦満命婦菅原氏女 朔命婦平氏女

倉満命婦宗像氏女 姫鬼命婦財氏女

鬼増命婦平氏女 福大命婦藤原氏女

土佐命婦秦氏女 龜童命婦藤原氏女

御供所神人十二人

切手檢校藤原道行 棚所檢校平正秀

大宮司源景純^{今著}息景房 大宮司藤原眞信

大宮司酒井弘顯 大宮司平道助

大宮司清原教隆 大宮司丹治正^口

大宮司田上成里 大宮司清原親^口
(次方)

大宮司平親秀 大宮司平頼忠

曹司五人

御炊藤原氏女 高富曹司源氏女

土橋曹司藤原氏女 馬場曹司春日氏女

田島曹司元氏女

權曹司五人

(紙繼目)

松石曹司安部氏女 姫若曹司平氏女

土与石曹司伴氏女 若直曹司源氏女

助命婦平氏女

作手神人二人

紀平檢校紀俊道 藤八檢校曾禰重元

一御放生会宮下荷興丁十二人 社役

一御行同還御荷興丁十二人 國衙役

一猿田彦大神御車引神人二十五人

檢校藤原基方

檢校丹治友景

風車立神人
雌立神人
園分寺別当役
雄立神人
泰平寺別当役
御神領定使神人
高城郡定使
五大定使
大中島定使
阿多定使
市比野定使

檢校丹治俊政
檢校春道國有
檢校田口重仲
檢校海宗長
檢校藤原清実
檢校源助重子今者助俊
檢校中原成元
檢校綾氏頼
檢校清原春秋
檢校小槻持清
檢校平守時
檢校泰頼助
一風車立神人一人
五大政所役
一雌立神人一人
園分寺別当役
一雄立神人一人
泰平寺別当役
一社頭松除神人五人
曾禰吉田 物部重永 平道
草部道貞 安部為光
一御神領所々定使神人五人
高城郡定使大官司紀親平五大定使大官司藤
大中島定使大官司平家國阿多定使大官司
市比野定使大官司泰忠頭
百八十九人
右、所司神官講衆内侍之外、神人等名帳、任
神注進、言上如件、
元亨三年八月一日

(二枚目)

※ハ賦物ヲ示ス
一一五モ同ジ

(以上上段)
(以下下段)

元徳三年八月 日 重注進之 死去跡者
参百十九人在之 任被仰下 号子息

一一四 何人百韻連歌懷紙

(元カ)
三三五夜

通夜之時

何人連歌

□ やかすめる月 □ るし
□ きよなして □ はる風
□ くみし小河の □ きこえけり
□ るまづハこけ □ ひて
□ 行たもとに □ 夜ふかし
□ たつ野辺の □ のした道
□ いまいるへき □ ふもとにて
□ くなきぬる秋 □ のこゑ
檢原よ ぬくる村雨
ゆふ日のかげそかた くもりする
なみあらし浦のなか こそすしくて
しほくむあまの 一重きるきぬ
身をかくす草のい ほりもせいけれハ
庭をうちにて かこふまつのみ
ほかハみな雪のうつ ミて道もなし
つまきとるへきかた ハしられす
又みるもさきいそき たる花なれハ
くもとさくらハたゝ ひとつ色
なみとみてかすみハ よそにあらハれて
うゑになかるゝ山 河のミつ
谷あひのゆふした風 の五月雨に

平 礼 井 平 名 井 如 礼 平 名 平 和 平 ■ ■ ■ 如 名 井 如 平 和

— 47 —

(以上段)
(以下段)

波も **■**むかへのほ **■** よりしつまれハ **■**
 きみにち **■** **■** あふてなしハ **■**
 心さし **■**れ **■** ハうかりけり
 たつめるはくなれハ つくなへける **■**
 このやまは **■**れをはし めのさくらかり
 わ **■**そまよ人 **■** **■**ふみ **■**して
 跡はたゞ霞 **■**て **■**なれは
 ふ **■**や竹の音に なるゝ雨

礼廿五	平三十	如十三
弁六	夕廿三	和三

二一五 何目百韻連歌懷紙

何日連歌

□ さを風のわけ □ ほかけかな
 □ なく方に松ハ □ ひて
 □ もるゆふ日や □ かゝるらむ
 □ のあとにはれ □ る山
 □ むくちるハまさ □ もみちにて
 □ のこるやあさ □ 月
 □ よはるきぬたの □ のたゝしるに
 □ んしろくまし □ すきり
 ひくしほにうきてな かるゝ舟みえて
 まさこちとをしあ まのすていは
 松のはもかゝねはくもる こかくれに
 くちて枝なきたに のむれ木
 かけはしも年ふるまゝ にかたふきて
 雪のはるれば 〓て ある雲
 ふくるよの月やこほり てきむからん

31

覺井家覺寂覺家円道寂覺家円井寂

■夕如夕□夕□□□

(二枚目)

(以上上段)
(以下下段)

つくはねをしのつ ましたふとあ
ひとりのうき思ひいるの もなみたにて
かなしからすハなき ゆふへかな
をのつからとひきて も猶うらむれば
いつかなけきのひまと ならまし
いまよてハよはらぬ 花の嵐にて
さくらハあめをな さぬうき雲

〇き月ハはるゝと 〇むらん
 〇のきはゝもと 〇しやと
 〇きていまかへり 〇さとに
 〇のあはれ渡 〇ふ
 〇ハ心ひとつに 〇もて
 〇はかきるすゑ 〇まし
 〇らんといひし契 〇れねは
 〇よはにもたの 〇の
 〇けの身をはな 〇かたミにて
 〇れのゝちハはて 〇ぬ恋
 〇と心にまつ 〇なれは
 〇ぬるはなの跡や 〇らん
 〇て行はるも渡 〇はれて
 〇なとてかくかへる 〇のね
 さむくふる雪に日か 〇けやしつむらん
 たきゝをまつも 〇ちかきいろりひ
 又たつも浦のもし 〇ほの煙にて
 心のなきかくもる 〇夜の月
 くさ木まで露のやとり 〇となる物を
 野にふきいつる 〇松の秋風
 さをしかもをの 〇なくねを時にして

寂覺道円井覺家覺道家井覺家四覺井家円覺井寂 円家覺寂円井寂

(三枚目)

ことにゆふへや恋はしめけん
身のうさもまきるゝほとハふするゝを
さめてくやしき 夢のわかれち
旅ねまで跡をし のふ手枕に
なれてちきればあ けやすき月
はなもけにたゞ一時の さかりにて
老のすゑなるはる そすくなき

こそもふりぬる 中に
れる雪をミよ のゝ山
のしろきやうき なしけん
あひ せと

いまたゝむほとに たにて
ゆく秋の野の あけ
りもかゝる時こそ わかれ
きならぬ人 りに

なるの色になき りぬへし
くむはなハなつ の露
ほこのミちハと 思ひにて
をとふもまた ぬかた
なるミ山の の初雪に
しはの煙はふ し

秋さむき草の上 野に月はれて
ちとせのなミハきく にこゑなし
さくくさのうへなる 袖の色をミよ
つゆもこかけの きとそなる
きりに猶ぬれても わくるたかゝりに
こすゑはくもるなら のしたミち
のきちかきにはもの 山に日は入て
ゆふくれさむし道の うす雪

井家井道家覚円道円道井寂道家井寂道家井覚道家 道円覚家道寂井

(四枚目)

とはれすハこよひ そことにうかるへき
いつはりまつとまし るうたかひ
一方に思ひきためぬ つらさにて
たちかへる身は 行ゑしられす
世をいてていかなる山 にいとひけん
いちやのほともふか きかくれか

なる雲のを 二て
きりハたゝ の声
る時雨やゆめニ らん
まつをぬら るへき
をもちいほりの 月て

くひさとのすゑ ハつかり
ハのへたて くらん
ともさそふう しは舟
のよりあしたの になミうきて
な水ハとまる なし
ゆく月日やはや きぬらん
をかきても身 けるゆへ
心つくし をしるゆへ

たのめつるゆふへの かねの一声を
こすやうらミやふかく ならまし
あすまでハげにのこる へき花ならす
鳥をおひたる道の 梅かえ

(二日出来方)

寂十 井十九 平十五
家十九 覚廿 道十七
元応二六十一

道円家道井円井覚井覚円覚家道家井円 覚道円井家覚

新田宮權執印良遷
正中ノ麥二代官ト
シテ子息俊正ヲ博
多ニ派ス

京都騒動
宮里郷一分領主權
執印良遷子息三郎
二郎俊正着到ニ就
ク

光富又次郎入道
頼門
同子息孫三郎入道
新田宮御立用ノ内
勢万勤免田

御祈禱忽チ退転セ
ントス

一一六 權執印氏具書案

40

イ、島津貞久覆勘状案

正校了

(俊正)

今度騒動之間、被進子息於代官候之由承候了、
仍執達如件、

元亨四

(島津)
貞久 在判

十一月十日

(良運)

新田權執印殿

ロ、紀俊正着到状案

依京都御騒動之事、任御教書之旨、薩摩國御家
人宮里郷一分領主權執印良遷子息三郎二郎俊正
令馳参、就御着到、迄于今月十七日在津仕候、
以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元徳三年十月十七日

紀俊正 在裏判

承了 在御判

一一七 新田宮雜掌道海申状案

67

(端要書)

「みつとみのめんでんの申状案初度」

薩摩國八幡新田宮雜掌道海謹言上

為同國薩摩郡光富又次郎入道頼門、同子息孫
三郎入道^{不知}法名、自去嘉曆三年、抑留當宮御立
用内勢万勤免田伍段所当米^志毎年^石三斗伍升

無謂子細事
右免田者、為天長地久御祈禱料、自往古至今無
相違處、頼門同子息孫三郎入道^{不知}法名等、令対捍
彼免田米間、御祈禱忽擬令退転之条、難測神
慮、然早被糺返年々抑留所当米、於向後者致米

薩摩國御家人權執
印良遷世上動乱ニ
ヨリ在京ス

權執印兼五大院寺
政所妙慶五大院寺
立用職田以下所務
条々

進懈怠者、可処其咎之由、為預御裁許、恐々言
上如件、

元徳四年七月 日

一一八 雜掌道海申状案

68

(端要書)

「新田宮雜掌道海重状」

○本文第一一七号文書ニ全シキラ以テ省略ニ從
フ

一一九 權執印良遷着到状案

71

薩摩國御家人新田宮權執印良遷、依世上動乱事、
馳参、令在京候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
元弘參年七月三日 僧良遷上

進上 御奉行所

承了 御判

一二〇 權執印慶妙申状案

30

(端要書)

「于時元弘三年八月 日

於正文者隨身土洛、仍案文留之了(花押)」

八幡新田宮權執印兼五大院寺政所妙慶謹言上
欲早且任先規、且依証文道理、蒙御成敗、五
大院寺御立用職田以下所務条々事

副進

一通 故執印中務丞康兼外題状

貞永元年十二月廿日五大院寺
立用職田任先例、以得用可算出事

二通 關東御下知内取要、自余略

五大院領山ハ政所
ノ沙汰トシテ百姓
ニ下作セシム
定得田ノ内ヨリ御
立用職田ヲ宛行ヒ
白余ノ所納米ハ公
文所ニ徴納ス執印
兼ノ不法檢注ヲ
留メ下地一町ヲ以
テ得田一町ノ分ニ
押免ツ
上料トシ米一斗
ヲ公文所ニ弁済セ
シム
永慶執印ノ不法ヲ
京都ニ訴フ

康兼一旦外題ヲ出
ス薩摩在国司權執
印ノ政所職ヲ侵ス
所務年記

近年ノ例ニヨリ變
替役二立一前ヲ勤
仕ス
所司職田徵使出以
下歲町牟多等ノ分
モ變替役上下十
前ヲ出ス
執印方先手ヲ打ッ
テ訴フ

建長五年四月十七日
文永三年八月廿六日

不依所爲年記出申

右五大院寺御領田者、為政所之沙汰、令下作于百姓、請每年檢注、而以定得田之内、被宛行御立用職田、於余殘所當米者、被徵納公文所之条、証文等分明也、然お故康兼所務之時、以得田引募立用職田之後者、母無得分、故永慶親父幼少之刻、任雅意留檢注、以下地壹町、被押宛于得田壹町分之間、政所得分莫太令減少之上、号上料、令弁済公文所於米壹斗之条、旁違先例之間、無謂之由永慶連々雖申之、不及叙用、仍欲令參訴京都之日、任先例可募得田由、去貞永元年十二月廿日午被出

(裏花押)

康兼外題、猶以不合于得田、然間雖含愁訴、自当国在国司方、被押妨彼政所職、連々成其煩之間、自然罷過者也、不依所務年記之傍例分明之上、五大院寺御立用等也、雖被准人物者哉、令達上聞者、爭任先例募得田、可致嚴重勤之由、可不預御裁許哉、爰去正安年中可遂檢注之由、被加催促之間、雖立申先規之次第、被下御教書之上者、令違背歟之由被申之間、奉成恐、先遂其節之刻、妙慶於當知行田地者、為得田分之上者、雖不可有變替役、任近年例、令勤仕二立一前許者也、此外自余所司職田、徵使出以下歲町、及牟多等之分、變上下拾余前之程、令支配之間、面々勤其役了、今年又可遂其節之由令催促、正安變仁猶可加増之旨相觸之、頻呵責之条、為難治之處、自執印方、遮而条々事書令進覽、

檢注ヲ行ハルル上
ハ先例ニヨリ定得
田ヲ以テ立用職田
等ニ合セ執印押領
ノ田地ハ妙慶ニ返
付セララルベシ

被訴申之間、所令言上子細也、先段如申、依先例可有檢注者、尤任先規、以定得田可被合立用職田者也、依近年之例者、又米壹斗許可被請取者哉、遂檢注、以得田被合立用職田事、同時之例也、何可有用捨之儀哉、所詮任先規、可遂檢注之由、被進申之上者、如先例、以定得田、合立用職田等、被押置之田地等、如本返付妙慶、可致嚴重勤之由、為蒙御下知、粗言上如件、
正和二年十月 日

(裏花押)

第二部 薩藩旧記雜錄所收文書

一 院主石清水權寺主大法師某下文 (前編一 權執印文書) 1

五大院政所正信所

可早任下知旨、令政所沙汰宛下、耕作寺領田畠等事

在高城東郷、同仲郷、入来院

薩摩郡、并宮里郷、阿多郡等内

(随カ)

右件田畠等、春時不令知沙汰人、各恣令耕作、不限秋所刈、有限沙汰等令通避之事、甚以奇怪事也、若於自今已後者、於院主者有任替限、於政所者永代不朽人也、早任下知旨、可令政所正信沙汰宛下耕作件寺領田畠等也、就中於入来郡者、有公驗限、雖為坪々、以往之間、全以不令知沙汰人過來之条、所不解罪科也、早任下知旨、可令致沙汰之条、令下知畢、敢不可違失、故下、

保延元年十月廿五日

院主石清水權寺主大法師(花押)

二 五大院主桑田信包申状 (前編一 權執印文書) 2

新田宮先執印桑田信包謹言

押書畢

右、件押書根元者、宮御領市比野浦公驗等、以去年五月中旬之比、為沙汰隨身令參洛之處、指無御沙汰之間、件浦御公驗等、留主御房三進上畢、然彼公驗依不隨身下向、雖通諸司等勸發者、於公驗者、令參洛本家申返、如本可令進宮之状如件、

長寛二年六月一日

己丑主世僧(花押)
先執印當時五大院主桑田(花押)

三 新田宮所課染絹請取状案 (前編一 權執印文書) 3

御判有

納、新田宮所司所課染絹内事

合式段内 一段紺矢汲絹文 覽通進

一段紺中星文 從秀進

右、件宛廻色々絹内、且所進檢納如件、

治承元年十一月五日

權寺主大法師

敬位藤原 御判

四 新田宮檢校僧靜秀去状案 (前編一 權執印文書)

(秀カ)
大乃謹言

渡進相伝從女字乙前身事

右件從女、卒木次郎貫首殿仁、限永年所渡進也、可令無他人妨服仕、仍不可有後口

(ママムシクイ) (ママ)

化四府檢校友次娘也、為後口、以解、

治承元年十二月十三日

檢校僧靜秀 判

(註) 本文書島津家本旧記雜錄ニヨリ補フ

五 新田八幡宮所司等申状 (前編一 權執印文書) 4

八幡弥勒寺御領薩摩国新田

并申 参簡条

一 御宝殿燒失事

右、件御宝殿燒失子細、見于先日所進解状、件御宝殿依為国役、令言上子細之日、被成下宣旨并大府宣畢、因茲、付国司致沙汰之刻、至于重綱任者、令造立借殿之間、經一任畢、次親賴任中、退本所、擬令造立新所之間、引構新所地之刻、所被謫也、次忠度任、加催之處、平家追討之故、任中其身已失畢、爰當国司初任、次任一兩年者、或驅動、或依飢渴、白然而馳過也、自第三四五年迄及重任七八年、追年雖致沙汰、一切所不被承引也、何況近來国土興復、人民快樂之時、不被遂彼造管者、何時哉、就中正直憲法之世、諸国七道神社仏寺破損等、注損色可令修造之由、依

官官、悉所被加修復也、何當官許于今未被遂其造管哉、而當國司重任三箇任、未嘗有事也、是即當國相叶神靈歟、尤可被遂造管也、云前司云後司、加以寄事於左右、不被遂造管者、當社及滅亡歟者、任先例、可被造管之由、欲被宣下矣、

一御立用田百八十町事

右、就同陳狀并申云、件立用之事、同所進解狀具也、而依豐後冠者義吏追討、人民繼死之事者、一兩年之事也、何國^(上カ)興復之時、以彼例可令減合哉、且可被垂御還迹也、但丹神領、令押領國領之由、被陳申之条、無極虛言矯誘也、何郡何鄉內押領哉、早可有御尋也、有限立用田者、相要那要名請事既先例也、而當國司背先例、諸郡諸鄉副收納^(使カ)不可令募之由、所令下知也、往古立用田尚令減合、何被押領國領哉者、任先例、可被勘合之由、欲被宣下矣、

一所司狼藉由事

右、就同陳狀并申、云御寶殿云立用田、并神拜沙汰、參國庁連々訴申之處、一切無裁許、被令上洛之故、為逼自身無道、遂國司等狼藉之由被訴申歟、但至于國庁前橫付封事者、前沙汰人助綱先日陳子細畢、爰付國司訴訟、所司并在庁相共令上洛、可遂一決之由、依宣下、所司等申云、所司無指誤、不及上洛、對決之時可陳申、何大乎、自去年春比、令上洛、雖相待在庁、于今未令上洛之条、非無國司理裁、何無難意之所司等身、可被行罪科之由、被訴申哉、是自由之沙汰歟者、任道理欲蒙御裁下矣、以前三箇条、就問官官并國司陳狀、大略披陳言上如件、所詮者、被遂御寶殿造管、可被勘合立用田之由、被宣下者、奉經御神威、慰所司神官等愁嘆矣、

建久五年五月 日

所司等上

六 高城新郡司豐津友安奉免案

(前編一 權執印文書)

5

(高カ)
城新郡司豐津友安謹言

奉免 八幡新田宮新燈油料出致段參拾代事

在 高城郡字谷口田

右件田、為本領主時古彼燈油井田、所寄進也、隨國免之狀明鏡也者、任件料田致段參拾代之後官物、為聖朝外朝右大將家、千葉御領御願成就、限永年、所令免奉如件、

建久九年三月 日

新郡司豐津 (花押)

七 紀政家寄進狀

(前編一 權執印文書)

6

宮里鄉地頭散位紀政家

奉寄進 志奈男社修理料田字并

參段并長畠老處事

右件社本給田者、有時古名田之內、雖然依為件料田荒野之地、已令破壞畢、且鄉內坐鎮守、何鄉內名頭等不崇奉哉、依之為息災祈禱、奉寄進件田畠畢者、件田畠等令耕作、彼社破壞顛倒令修造、可被祈願一家息災延命之由、仍奉寄進之狀如件、

建仁四年二月十日

散位紀 (花押)

八 薩摩國庁下文

(前編二 權執印文書)

庁下 諸郡鄉院

可早任先例、令勤仕八幡新田宮御放生雜事

高城郡

宝樹二本 騎兵一人 出馬一疋 薙馬一疋 松百把 相撲二人 菩薩料

一人 浜梯除庁屋七間 東郷三間 時吉一 吉枝一 二立一前 次三十前

薩摩郡

宝樹二本 騎兵一人 出馬一疋 薙馬一疋 松百把 相撲二人 菩薩料

一人 持夫一人 浮七文 浜梯除僧坊二字五間 二立一前 次三十前

流鍋馬二番 流河二番

入来院

道造自御館御門 山馬一疋 競馬一疋 (松脱方) 五十把 相撲二人 持夫一人 樂
 所屋一疋三間 二立一前 次十二前 騎兵一人
 那答院
 道造自御館御門 騎兵一人 競馬一疋 出馬一疋 相撲二人 國掌屋三
 二立一 次三十
 牛尿院
 道六段卅 騎兵一人 出馬一疋 競馬一疋 松百把 相撲一人 菩薩料
 一人 持夫一人 浮六丈 家子屋 三立一 次三十
 山門院
 道自橋本至 騎兵一人 出馬一疋 松百把 相撲二人 菩薩料一人 持
 夫一人 御斤三間シレス 屋形浮四丈 二立一前 次三十前
 莫禰院
 道自橋本至 騎兵一人 出馬一疋 松四十把 相撲二人 菩薩料一人
 浮三丈 相撲屋三間 二立一前 次十五前 不田百把 鉄二延 御渠修
 理 流鏑一番
 伊集院
 道六段 騎兵一人 出馬一疋 相撲二人 松百把 浮二丈 持夫一人
 指宿院
 道二段 騎兵一人 山馬一疋 松五把 相撲一人 浮三丈 持夫一人
 額姓院
 道二段 騎兵一人 松五十把 出馬一疋 浮三丈 相撲二人
 智覽院
 道一段卅 騎兵一人 松五十把 出馬一疋 浮三丈 相撲二人 藥一連
 御簀二間長八尺
 河辺郡
 道五段 騎兵一人 出馬一疋 松五十把 相撲二人 持夫一人 藥一連
 御簀二間長八尺
 阿多郡

道八段 騎兵一人 出馬一疋 松百把 相撲二人 浮六丈 持夫二人
 竜頭船一艘 安幕一間 持夫一人 菩薩料一人 浮七丈 御目代屋三間
 二立一前 次二十騎 流鏑二番郡司一番
 市来院
 道五段卅 騎兵一人 出馬一疋 松五十把 相撲二人 菩薩料一人 持
 夫一人 小舍人所屋三 浮四丈 二立一前 流鏑一番
 満家院
 道三段 騎兵一人 出馬一疋 松五十把 相撲二人 浮三丈 持夫一人
 小舍人所三間 二立一前 次十五前
 鹿兒島郡
 道六段卅 騎兵一人 出馬一疋 松百把 相撲二人 持夫一人 浮七丈
 持屋三間家子 鼓打一人 笛吹一人 拍子打一人 殖女一人 苗引一人
 二立一前 次三十前
 谷山郡
 道六段廿 出馬一人 松百把 相撲一人 持夫一人 浮五丈 鼓打一人
 笛吹一人 拍子打一人 殖女一人 高足一人 安幕二間 騎兵一人 二
 立一前 次二十前
 給黎院
 道二段 騎兵一人 山馬一疋 松五十把 相撲二人 二立一前 次三十前
 口置南郷
 道三段廿 騎兵一人 出馬一疋 松五十把 相撲二人 持夫一人 浮三
 丈 雞首船一艘 家子屋三間
 同 北郷
 道三段廿 騎兵一人 出馬一疋 相撲二 (人脱方) 持夫一人 松五十把 浮三丈
 御厩副屋三間 二立一前 次十五前 流鏑一番
 右色々雜事等、任先例守式目、可令勤仕之状、如件、
 承久三年八月廿一日

在判
 在判

大目一判

據——大前在判

(註) 本文書島津家本日記雜錄ニヨリ補フ

九 八幡新田宮所司神官等諸文案 (前編二 權執印文書) 7

八幡新田宮所司神官等謹言

申請 起請文案

右、起請文申請元者、執印故馬允存生之時、稱□□沙汰大、御公驗并調度文書等書留案文等於者、隨身上下洛畢、而指無詮下向之處、可被進宮□□公驗等之由、所司神官等雖雖申、寄事於左右、今不被進宮志天死去畢、仍付後家、令致沙汰之□□、抑留件御公驗、且為自由之沙汰之条、上神慮有□□之事也、然者不被進宮御公驗并調度文書等之□、於故馬允之伴類者、所司神官等、令以不可用申□□、若件条虚言ヲ申候者、日本鎮守八幡三所大菩薩當國鎮守開門正一位所大明神、惣普天率土六十余州大小神祇冥道乃□□所司神官等乃身、一々毛穴毎可罷蒙之狀如件、

寛喜二年三月七日

權執印大法師

座主兼政所大法師

殿上檢校大法師

殿上檢校大法師

殿上檢校大法師

檢校大法師

檢校大法師

宮主大法師

宮主大法師

三 味 僧 在判

三 味 僧

三 味 僧

三 味 僧

執行貫首散位紀

修理行事平□

散位大中臣□

御馬所檢校□

阿多院田庄司□

一〇 執印康兼下文案 (前編二 權執印文書) 8

下 勢万所

可早以得出、引募例立用職田事

右、於件立用職田者、任先例令引募得田之□、有限恒例仏神事之役、可致嚴重勤之狀如件、

貞永元年十二月廿日

執印中務丞 在判

一一 八幡新田宮權大宮司大藏種良陳狀 (前編二 權執印文書) 9

八幡新田宮權大宮司大藏種良解、申請、本所御裁事、陳申、為本万得名主代成後訴申種良領分水田可被返付本名内子細狀

副進 祖父師高入道沽券等案、

右、件水田内松本八段者、自師高入道之手、有指由緒被充渡畢、但國方所

當米并當名御加地子者、任檢注定出之旨、可令弁勤之、至于自余万難公事

臨時課役本郡役者、為本名之沙汰、可令勤贊之由、沽券在之、因茲兩方所

當、任得田員數弁來事、于今先闕怠、然者、至于種良之身者、有功無過者

也、所知領掌之道、以令究濟地利之人為領主歟、何謂非分之領主哉、次殘

四段小淺山、段者、師高之内持他領、以種良之領田四段、引替神領田四段之

由事、件根元者、牟木三郎丸名内種良所領、以大路田一町、引替神領田伍段、

於万難公事者、如松本被停止畢、巨細具于沽券之狀也、以大田四段、令相

博神領田四段之由、訴申之条、虚誕無極事也、此条不可及御叙用者歟、所

詮師高入道沽文之面、嫡子師永、舍弟本万得名主師綱加判畢、而何成後午

為彼代官、不顧師高之書狀、不知師綱之判形、只以胸臆之狀、可被返行本名之由可訴申哉、凡存知之企、今案之至、不可勝計者也、如此謬無道、動又成俊就彼水田、為成俊依致違亂、令言上子細於當名并濟使所之刻、任道理、度々成賜支行畢、雖然成俊尚無承引、訴申國之口、尋明沽却之実否、任証文之旨、可為本名沙汰之由、因判明白也、又在庁与判炳焉也、豈非令押領、種良者以方々支行与判、為文書、成俊者構今案、為証拠、是則非正義者哉、以大路田一町、自令相博御神領田五段以降、雖段步不令不作、隨御方御加地子、更以無關意、至于本名成俊之領分者、以不作為宗之間、而方所當米、莫不令闕如、是既不能領主歟者、望請本所御裁、且任師高入道沽却之旨、只依并濟使所支行並國御解題、在庁等与判之実、停止名主代成俊之非論、於公事者、勤贊本名之由、欲蒙御下知矣、仍粗披陳言上如件、以解、
嘉祿四年十二月 日 大藏種良上

一二 寺家公文所下文

(前編三 權執印文書)

10

寺家公文所下 五大院所司神官等

可早止權大官司友綱沙汰、如元令權執印永慶還補政所職事

右當職者、本所進止也、而去年友綱依有申旨、雖被宛補之、今又永慶備相伝証文、訴申之間、所被還補也者、早任先度御下文、可令安堵狀、依長吏仰、下知如件、所司神官等宜承知、以下、

延應元年五月 日

右衛門尉平 (花押)

散位 平 (花押)

少別當法橋上人位

少別當法橋上人位 (花押)

都維那法橋上人位 (花押)

權上座法眼和尚位 (花押)

一三 關東御教書案

(前編三 權執印文書)

11

(端裏書) 「關東御教書案」

薩摩國新田宮所司神官等申、阿多郡北方地頭鯨島刑部丞家高法師条々所行

難通罪科之間、被改補彼地頭職畢、下手人 在交名 注文 者、早召上京都、申入冷泉殿、宣被斷罪者、依仰執達如件、

宝治元年十月廿五日

(北条時賴) 左近將監 在判

(北条重時) 相模守 在判

(北条長時) 相模左近大夫殿

一四 六波羅御教書案

(前編四 權執印文書)

14

薩摩國新田宮所司申、神王面破損下手人阿多郡北方地頭鯨島刑部丞家高法師所從吉行間事、訴狀書 副具 如此候、被下關東御教書之間、度々令下知之処、逃去之由令中之条何様事哉、尋搜在所、早速可令召置其身之狀如件、

建長元年八月十一日

(北条長時) 左近將監 在御判

守護代

一五 新田宮權執印見參料請取狀案

(前編四 權執印文書)

15

納 御判 錢參貫文

白四文布三段

右新田宮權執印永慶見參料、所納如件、

建長三年六月廿八日

源 御判

一六 奉行人藤原某奉書

(前編五 權執印文書)

16

長宗与裔宗相論事、同意長宗被致狼藉之由、裔宗依令訴申、可止所務由、先日雖被御下知、令書起請文、被申披子細之上者、如元更不可有相違之旨、被仰下候也、仍執達如件

文永四年四月廿七日

奉行藤原 (花押)

權執印御房

一七 左衛門尉友員相博狀 (前編五 執印文書)

17

(和博) (南々) とうはくせしむるそのの事

合

一所 つや殿、同あかゝね四郎入道やしき (屋敷)

一所 くわはたのやしき、同くわうねんはうのやしき (水間)

一所 みつま二らう

一所 四らう殿 (南々)

このそのの代分

一所 たうくもん所の御やしき (当公文)

一所 まへのその (前園)

一所 かわしり九郎のその (川尻)

一所 ちやうにうたうのやしき (相博)

右、件そのさうはくせしむるところ也、たしかやうにさうはくせ

しむといふとも、ありにくしな思候はん時は、あひたかひに、もとのゆ

つりにまかせて、りやうちせしむへし、又かのそののまゑに、ふね

のつきたらん時ハ、つれうハせんれいにまかせて、御さた候へきしやう、

くたんのことし、

文永四年十月二十九日

左衛門尉友員 (花押)

一八 権執印永慶重申狀

(前編五 権執印文書)

18

八幡新田宮権執印僧水慶謹言上

欲殊且依御教書違背実、為向後傍輩、於氏女者被行其科、且任証文道理并度々御下文旨、如元永慶可為五大院内古仏堂檢校職由、直蒙御下知子細事

副進 領家御教書案 文永四年七月三日

件檢校職者、永慶重代相伝無異儀之次第、度々訴狀具書等分明也、而氏女之親父致濫訴之刻、去文永之比、永慶就令言上子細、被下御外題、無相違之處、氏女去年三年種々謀計、不顧和与之趣、致其妨之由依訴中、蒙御下知、永慶之作田等令妨取之間、永慶今年四年氏女今所立申之狀者、非和与之儀、不可背永慶命之旨載之畢、隨彼氏女不帶一紙之文書、然者任証文之道理、可宛給之由、令訴訟之處、氏女因之問、所詮來九月中、可令進次第証文、任道理可有御裁許故也、御成敗以前者、可刈置作稻於中、被下御教書之處、無其理之問、忝違背領家御下知、不令進証文、剽取作稻之条、無其理之至顯然、則依御教書違背之実、為向後傍輩、於氏女者被行罪科、且任証文之道理、并度々御下文之旨、如元永慶可為古仏堂檢校職之由、為蒙御成敗、重言上如件、

文永四年十一月七日

權執印僧永慶上

一九 紀持房証狀

(前編五 権執印文書)

19

故新大夫入道持房かしんふ□□被護候、証文被取候間、その所々訴訟申して候へは、御下知給りて候へは下向之時まいらせ候、可在、仍為後日狀如件、

文永十年八月廿三日

紀持房 (花押)

二〇 雜掌某書狀案

(前編五 権執印文書)

20

新田宮造營事、領家半分御勤不可事行敷、以杜領九十余町、引募長日朝家御祈禱講經供料以下神事立用之事、以彼料田内如形縱神殿年々加修理候、而四十余町圍街与九十余町神領、御造營等配御勤不便次第候敷、但五ヶ年内造營事、国司御領狀候者、社家又於涯分勤者、不可有子細候、若猶国司被刈捍申候者、如天満宮、被寄附所望要郡五ヶ所於当社、可致本功候、以此趣可有御披露候、恐惶謹言、

建治三十一月七日

雜 掌上

二一 道胤書下 (前編六 權執印文書)

22

權執印妙慶申、五大院上家分專、訴狀如此候、無子細候者、可令計下知給候、若又異儀候者、可令注巾先例給之由候也、仍執達如件、

弘安元年三月十一日

道胤 (花押)

(二階堂奏行)
隱岐右衛門尉殿

二二 六波羅御教書案 (前編六 權執印文書)

24

薩摩國新田官所司神官等申當官造營事、院宜并奉宮大夫家・新大納言家御文副領家御文、如此、早相尋了細於彼郡司名主等、可被注巾也、仍執達如件、

弘安元年後十月十七日

(北条侍頭)
左近將監 在御判
(北条侍頭)
陸奥守 在御判

(島津久經)
大隅修理亮殿

二三 某下文 (前編六 權執印文書)

25

(花押)

新田官五大院政所職事、在(所)國司道氏與權執印妙慶、雖有相論、政所職以下妙慶領知之、割分名出道氏可知行之由、去九月廿口山和與狀畢、然者早止向後半籠、妙慶可為彼職之狀、如件、

弘安元年閏十月廿二日

二四 龜山上皇院宣案 (前編六 權執印文書)

26

當國鹿兒島・莫禰・薩摩郡等、被(宛力)新田官造營畢、於檢注者、可為國衙沙汰候、彼檢注用途可被宛造營候也、鹿兒島郡永吉名事、先例各別知行之上、可為國衙沙汰之由、院宣如此、仍執達如件、

(朱書)
弘安二年
五月十日
薩摩守殿

參議 在御判

二五 平重峯申狀案 (前編六 權執印文書)

平重峯謹言上

為薩摩國八幡新田官執印重兼以下所司神官等、得同國住人在國司道氏語、令打擲刃傷神人由、構山無突、催上重峯、為訴人身、令在國、令延引沙汰、無謂事、

(右宛力)

件執印重兼子息重友者、為在國司道氏聲、愛道氏乍為地頭預人、令違背地頭、致濫訴之刻、重兼得道氏語、依為一社神官、執印相誘所司神官等、令打擲刃傷神人之由、構出無突致偽訴、申賜六波羅殿御教書於幸府、乍催上重峯、彼濫訴之事、令在國、于今未令上府之条、無謂者也、是則無突濫訴、依無陳方、上訴事不突之罪科、為令通遞對決也、然者早差日限、被召上彼輩、尚以令難渡御催促者、其子細為有御注進、粗言上如件、

弘安三年八月 日

(註) 本文書島津家本日記雜錄ニヨリ補フ

二六 沙弥某奉書 (前編六 權執印文書)

27

(花押)

大中島事、所被改易新左衛門尉成氏知行也、給主未禰之間、所司神官相共致其沙汰、夢代・桑代・作稻・御年貢以下令収納之、可令注進員數、若得重兼并濟使代官等語、於緩急所司等者、追出其身、可被召上所職之旨、所被仰下也、仍執達如件、

弘安四年閏七月廿六日

新田官所司神官中

沙弥 (花押)

二七 關東御教書案 (前編六 權執印文書)

28

薩摩国田文事、前々雖令注進、不予細敷、神社仏寺國衙庄園、關東御領等、且注分地頭御家人、且又尋明領主之交名、來十月中可令注申之狀、依仰執達如件、

弘安八年二月廿日

(北条貞時) 左馬權頭 在御判
(北条兼時) 陸奥守 在御判

(忠宗) 島津下野前司跡

二八 大前道調藤原久氏連署書下案 (前編六 權執印文書) 29

薩摩国田文事、如去年弘安八年二月廿日關東御教書者、前々雖令注進、不委細云々、神社仏寺國衙庄園、關東御領等并領知之分、任被仰下之旨、且云次第相伝之由緒、且云地頭御家人領主之交名、注分分明、余田分限無偏頗、載起諸文詞、來廿八日可令注申給之狀如件、

弘安九年正月廿一日

大前道調 在御判
藤原久氏 在御判

社司收納使并濟使御中

二九 按察使下文 (前編六 權執印文書)

薩摩国新田宮造營料所々一ヶ所可止國衙妨之由、先々被仰下、与動猶致其妨之間、社家祈申之也、造營可停止之由、重殊可令加下知給之由候者、以此趣可令申沙汰給之狀、如件、

弘安九 九月廿三日

按察使在判

參河前司殿

(註) 本文書島津家本日記雜錄ニヨリ補フ

三〇 石築地用途支配注文案 (前編六 權執印文書カ)

30

新田宮政所注進、為蒙古用心、管崎小松 洲崎石築地用途支配

合

勢万 六町二段廿中 分錢七百十四文
益丸 十三町五段中 分錢一貫五百四十文
千義 三町一段 分錢三百五十四文
得丸 三町一段 分錢三百七十六文
正岡 二町六段卅 分錢三百八文
御供出 二町二段 分錢二百五十二文
宮男田 四町 分錢四百五十六文
市比野 十五町 分錢一貫七百十文
右、任支配之旨、今月中仁可被致其沙汰之狀、如件、

弘安九年十月 日

執行貫首紀
六名略ス
執印散位惟宗判

三一 串木野忠行後家尼如阿申狀 (前編七 權執印文書) 31

(端裏書) 串木野後家如何申 正應 一

薩摩国御家人串木野太郎忠行後家尼如阿謹言

欲早任度々院宣・國宣・大府宣・太宰府宣以下代々、且被停止當國新田宮所司神官等濫訴、如元 廣庭、且被召決雜掌程、被止當時平責子細事

右、當村御年貢者、太宰府尊崇十五社神事法會之、用途也、謂之庸庭、爰代々院宣・國宣・大府宣・府施行、也、仍彼只書等先日備進之、則所被召置于御奉行所也、學擬被糾明是非之處、彼雜掌依謀書執筆之咎、被令延引之刻、執印所司等、稱擬賜當所御奉書、御代、被可貴之條、無術之次第也、縱雖為理運、飢饉之上、為 其可貴者政迫也、何況於當村者、為庸庭料所之間、院宣嚴重也、隨而如雜掌所帶院立案者、太賜因宣、不 百圓所令申出敷、云彼云此、爭可被致理不尽之責哉、且任先例、且

任証文之旨、被召決難掌之程者、欲被止御苛責之、言上如件、

正応元年六月 日

三二 本 仏書 下案 (前編七 權執印文書)

32

新田宮雜掌申当官造管用途事、重訴狀具書如此、子細見狀、所詮止帰國之儀、可被終沙汰之篇候、仍執達如件、

正応元年七月廿五日

本 仏在判

鹿兒島郡司矢上弥五郎殿

三三 本 仏書 下案 (前編七 權執印文書)

33

新田宮雜掌申当社御造管用途、国「正稅物事、重訴狀具書如此、如狀者、背六ヶ度召文、不及參決云々、此条太自由也、所詮今月十八日以前、可被參對、若猶無參決者、就難決篇、可被裁許候、仍執達如件、

正応元年

八月十五日

本 仏在判

鹿兒島西方郡司弥五郎殿

三四 新田宮雜掌重申狀 (前編七 權執印文書)

34

薩摩国八幡新田宮雜掌重言上

為莫禰郡司入道覺也代行連、不相待御沙汰左右令逃下間、任傍例可蒙御成敗旨、訴申候、重難被下日限召文、猶以不及參上、奉令違背御奉書上者、任先例可遂檢注由、欲蒙御成敗事

副進 先度御奉書案

右、子細言上畢、而行連令無音逃下之上者、任傍例可蒙御成敗之処、重難被下召文、猶以不及參對、日限以後、既送数日畢、所詮当院檢注事、文永目錄分明也、然者早任院宣并先例、可遂檢注之由、為蒙御成敗、重言上如件、

正応二年二月 日

三五 新田宮命婦建部氏女重申狀案 (前編七 權執印文書) 35

八幡新田宮命婦建部氏女重言上

為入來院清色内下村地頭代弥源次入道不知、令台籠無指誤氏女并神人守友間、依成神慮恐歟、乍令進宮氏女許、不遂行清被、就不被糺返追捕物等、就訴申子細之刻、雖被遣氏女申狀彼入道許、依難逼自科、不及一言陳詞上者、任先傍例、欲被終御沙汰了細事

件案、先度且言上畢、爰弥源次入道依令召籠、無指誤之命婦神人、成嚴重神威恐歟之間、雖令進宮氏女許、不遂行清被、就不糺返追捕物等、訴申子細之刻、雖被遣氏女申狀於彼入道許、依難逼自科、敢而不及一言陳詞之上者、所詮任先傍例、被遂行清被、為被糺返追捕物等、重言上如件、

正応二年七月四日

三六 関東下知狀案 (前編七 權執印文書)

36

薩摩国八幡新田宮所司神官等与当国宮里郷地頭大隅式部三郎忠允相論免田以下事

右、如幸府注進者、子細雖多、所詮於当宮堅儀御供料并二月二日御祭饗膳料等免田者、自往古所引募当郷也、而忠允押領彼免田之上、放入使者於神領、押取身代、令詰却之由、神官等訴申之処、忠允肯度々催促、不及請文云々、尤難逼其料歟、然則於件免田者、如元可引募当郷、至身代者、為忠允之沙汰、可令糺返也、次忠允狼藉料事、可被付鎮西寺杜修理者、依錄倉仰、下知如件、

正応二年八月二日

(北条吉時) 在御判
(北条貞時) 在御判
相模守平朝臣 在御判

三七 鎮西奉行連署奉書 (前編七 權執印文書)

薩摩国上野太郎忠樹以下輩等、破当国新田宮夏越鎮濟、依ムシツキ傷在序等、御神事延引由事、尤非無其恐歟、然者於狼藉者、尋明実否、可令注進

關東也、至御神事者、相觸在序等、先如元可令遂行給候、仍執達件、
正応二年八月十七日

在岡司殿

(註) 本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

前因攝守
沙 弥

三八 鎮西奉行奉書 (前編七 權執印文書)

薩摩国開門宮雜掌申、相語守護人被押取御劍并神馬由事、去年十月二日關
東御教書 具書案如此、早任被仰下之旨、為教沙汰、可令出對博多給也、仍
執達如件、

正応五年二月五日

前因攝守 (花押)

新田宮執印殿

(註) 本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

三九 新田宮權執印妙慶代僧栄仙重申狀

(前編七 權執印文書) 38

(端奏書) 「新田宮權執印代重申 永仁六十廿四」
薩摩国 八幡新田宮權執印妙慶代僧栄仙重言上

同国伊作庄地頭彦三郎左衛門尉忠長被拘情妙慶所從二郎女童問、雖申付
(談) 諸議所七箇度奉書、終依不被糺返、就訴申、十月十五日以前、召具生口
可參決由、雖被下而度御教書、不及諸文散狀上者、任相伝道理、可糺返
由、欲蒙御成敗子細事

副進 二通御教書案 一通先進畢

件条、前々口紙言上事旧畢、而忠長無理至極之問、不能參陳之上者、早任
相伝服仕之旨、可糺返之由、為蒙御成敗、重言上如件、

永仁六年十月 日

四〇 新田宮雜掌道久重申狀 (前編八 權執印文書)

39

(端奏書) 「嘉元三十一」
薩摩国八幡新田宮雜掌道久重言上

同国延時名主三郎入道 実名 下知背御教書、不□对上者、欲蒙御成敗四石御供
米事

副進 二通御教書 一通先進畢

件条、先度言上畢、而背御教書、不及諸文、陳狀之上者、任被定置之旨、
為蒙御成敗、重言上如件、

嘉元三年十月 日

四一 鎮西御教書案 (前編八 權執印文書)

薩摩国新田宮雜掌申、国司初任御神拜物事、重訴狀如此、而度被仰之処、
不參上候、早尋問違背之笑否於論人、可被注申也、仍執達如件、

嘉元三年十一月二日

上 總 介 在判

河内小太郎殿

洪谷弥平二殿

(註) 本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

四二 平某施行狀案 (前編八 權執印文書)

薩摩国新田宮雜掌申、国司初任御神拜物事、今月二日御教書并訴狀如此、早
任被仰下之旨、可被申分明左右候、仍執達如件、

嘉元三年十一月廿日

平 在判

延時三郎入道殿

(註) 本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

四三 權執印妙慶申狀 (前編八 權執印文書)

40

權執印妙慶謹言上

為伊作庄内花熟里地頭代津野弥次郎左衛門尉 実名 不知令悋惜妙慶下人犬土童
無謂事

件大王重者、花熟里百姓又太郎男不明地頭米并領家米、下司名主公事料以下負物等、令逃脫自船、令付寄田德内小湊之由、妙慶承及之間、即懸置干所、就令申、方々差遣兩三方之使者、隨負物多少、被分取彼、於大王・藥師二人重者、被付名主方畢、然間令服仕來之処、花熟里地頭代去々年押所彼大王重於理不尽之条、希代狼藉也、然者早任申狀道理、於彼重者、不日可召渡之由、蒙御成敗口地頭代者、為被行罪科、粗言上如件、
德治三年八月 日

四四 鎮西下知狀案 (前編八 權執印文書)

41

〔國八幡新田宮雜掌申同國宮里鄉鶴王丸名々主章追太〕正平法師
法名道惠 子息七郎正時抑留當官免田老町式段神用米由事
今者死去

〔解去永仁七年五月十日、同六月十三日、正安元年七月廿日、雖不參之問、仰於谷彦太郎重清法師法名・河内小太郎重雄、四日尋問去之処、如淨重等執進同五月廿日、同四年道惠而通諸文者、無對捍儀之処、近年當名損亡之間、雖口家明申畢、所詮於道惠知行分五段所當米者、可致其口也、而道惠死去之間、今年八月三日以重雄并谷彦太郎、催促之処、如為重執進同九月廿五日正時諸文者、鶴王丸名口道惠之時、伊集院野田淡路坊兼祐・武光日向入道法忍、口惠等令知行之間、不能陳申云々、爰如雜掌注文者〔武光〕自弘正應二年拾石陸斗、自永仁五年、至正安三年、拾式石伍斗、〔武光〕拾參石壹斗云々者、於知行分者、可致沙汰之旨、亡父〔伏狀之処、正時為彼遺跡、稱他人領知之由、擇自由諸文、不口不遺難決捨敵、然則任先例遂結解、可令究濟也者、依〔仰下知狀案〕件、

延慶二年十二月十二日

(北条實政)
前上總介平朝臣

四五 鎮西御教書案 (前編八 權執印文書)

薩摩國莫禰孫太郎入道成道申實人等事、訴狀具書如此、子細載狀、為有其沙汰、早可令參對也、仍執達如件、

延慶三年十一月十二日

前上總介判

下野前司入道殿女子跡

(註) 本文書島津家本日記雜錄ニヨリ補フ

四六 沙弥道雄起請文案 (前編八 權執印文書)

薩摩國新田宮雜掌申同國延時三郎入道抑留當官御神并御供米由事、去八月廿九日御教書并重訴狀同九月四日到来、謹拜見仕候、早任被仰之旨、雖相觸延時三郎入道候、不及請文陳狀候、若此条為申候者、日本國六十余州大小神祇冥道御前可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
延慶三年十二月五日
沙弥道雄

(註) 本文書島津家本日記雜錄ニヨリ補フ

四七 薩摩國御家人交名注文 (前編九 新田宮觀願院文書 42)

薩摩國御家人交名注文

谷山 式部孫五郎入道 同彦七 谷山五郎入道 薩兒島 矢上又五郎左衛門尉 倉弟彦五郎 伊數領主 山上領主 上田領主
滿家院 比志嶋孫太郎 西兵衛又三郎 大丸六一丸 山口入道 厚地座主取納使
川田右衛門太郎 中兵衛孫四郎入道 山口入道 厚地座主取納使
地頭御代官 羽月右衛門入道 牛尿二郎左衛門入道 牛尿二郎左衛門入道
同兵衛入道 同兵衛入道 同兵衛入道 同兵衛入道
永竹二郎入道 同兵衛入道 同兵衛入道 同兵衛入道
下司國書入道 兵衛五郎入道 兵衛五郎入道 兵衛五郎入道
同杉左衛門二郎入道 井口入道 知色入道 跡部名主并濟使
山門院 郡司殿孫二郎 市來崎兵衛五郎入道 郡山名主
莫禰院 郡司殿太郎 龜島 小川小太郎入道跡 遠矢入道 同太郎三郎
右、大略注文如此、此外相漏人々者、可致注進之狀如斯、

文保元年七月晦日

四八 門 仏 讓 狀 (前編九 權執印文書)

讓与 子息道海所仁

在薩摩國那答院內中津河村、次第証文等并宮里鄉田園^{四至界本券在之}等事

右所領証文等、先年仁雖讓与道海、臨最後之間、重讓与畢、然者守先度讓狀、無他妨可知行也、仍為向後、讓狀如件、

文保元年十月十一日

沙弥内仏 (花押)

(註) 本文書島津家本旧記雜錄ニヨリ補フ

四九 鎮 西 御 教 書 (前編一〇 宮内大檢校文書)

八幡新田宮雜掌申当御供米事、訴狀如此、背下知狀云々、不日可致并済也、仍執達如件、

正中二年九月五日

(北条英時) 修理亮 (花押)

(島津忠宗) 下野三郎兵衛尉殿

五〇 宗 覺 書 狀 案 (前編一〇 執印文書)

造宇佐宮薩摩國所課事、被免除新田宮領候、院宣并六波羅御教書令披見正文等候畢、此様可披露候、恐々謹言、

正中二

十一月十八日

宗 覺 (花押)

執印社司御中

五一 鎮 西 御 教 書 案 (前編一一 權執印文書)

薩摩國新田宮雜掌申段米以下事、重申狀如此、先度催促之處、無音之上、所詮采月廿五日以前、可明申也、仍執達如件、

元德二年十月廿五日

修理亮御判

大隅新三郎殿

五二 鎮 西 御 教 書 并 島 津 貞 久 書 下 案 (前編一二 權執印文書)

九州士卒事、宜隨分國守護人催促之處、或捨役所、馳向他國、或分遣子息親類由候、有其聞、於如然之輩者、可被処罪科之旨、可被相觸薩摩國地頭御家人、至違犯輩者、可被注進交名候、不蒙允許、有知國之輩云々、不日可被催進也、仍執達如件、

正慶二年四月一日

(北条英時) 修理亮御判

(貞久) 島津上總入道殿

九州士卒事、隨分國守護人之催促、可暫因役所之用、御教書如此、然且可被存知其旨也、仍執達如件、

正慶二年四月一日

(島津貞久) 沙 弥 在 判

薩摩國地頭御家人御中

(上書) 御教書并守護施行等案

權執印一

(註) 本文書島津家本旧記雜錄ニヨリ補フ

五三 權 執 印 良 違 着 到 狀 案 (前編一二 權執印文書)

判有

薩摩國新田宮權執印良違、世上依動乱事、馳參令在京候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年十月廿三日

權執印 遣

五四 預 所 肥 後 守 書 下 案 (前編一三 權執印文書)

薩摩國新田宮權執印并五代院政所兩職等事、領家御下知如此、早依代相伝^(ママ)之旨、被補任彼職之上者、殊抽忠勤、可被致御祈禱之誠、仍執達如件、

元弘三年十月日

權執印殿

預所肥後守平願判

(註) 本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

五五 新田宮領家雜掌沙弥某奉書 (前編一二 權執印文書) 47

(花押)

八幡宮領新田宮權執印良運申、當宮々仕等□權大別當□預上上燈油料田
等人遣賃券、令關如所役候事、訴狀具書遣之、子細見狀歟、為事災者不可
然、相守彼官仕別當等載起請之詞、悉可被執達語文之旨、領家仰所候也、
仍執達如件、

元弘參年十二月十二日

沙 弥 (花押)

新田宮殿上檢校御房中

五六 國 宣 案 (前編一二 權執印文書)

48

(端裏書)

「國宣案本物返事 建武元十月七日、到同二四六日」

當國分助二郎入道追然中、石塚四郎入道・同三郎入道・在國司女子中禪

(良運)

尼・天辰与次清三入道・新田宮權執印・武光一郎太郎入道・泰平寺禪行・

谷山孫八等、本物返田地抑留由事、申狀十通書等遣之、不日企參上、可明

申之由、面々相觸之、急速可被申散狀、若有異子細者、可有注進旨、國宣

如此、仍執達如件、

建武元年十月七日

散 位在判

(重運)
薩摩國在庁武光三郎殿

五七 某 書 下 案 (前編一二 權執印文書)

薩摩國一宮八幡新田宮所司神官等申、沽却并賃券地「ムシクイ」決斷所御牒

(具書等カ)

副□并御奉書如此、早任被仰下旨、可被申散狀候、仍執達如件、

建武二年後十月一日

權執印御房

(註) 本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

五八 足利尊氏軍勢催促狀案 (前編一三 權執印文書)

50

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

御判

官里郡司名主中

五九 紀俊正着到狀案 (前編一三 權執印文書)

49

肝付八郎兼重与党凶徒等誅伐由事、任御教書之旨、薩摩國御家人新田宮權
執印良運子息三郎次郎俊正令馳參候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿五日

紀 俊正

進上 御奉行所 承了

六〇 紀俊正軍忠狀案 (前編一三 權執印文書)

51

薩摩國新田宮權執印良運子息三郎次郎俊正謹言上

欲早預御注進、浴恩賞、大隅國肝付郡加世田城連々合戰間、抑寄最前野
類、焼払乱杭逆向木、致拔群軍忠事

(押覽カ)

右、俊正自去五月六日、至于六月十日、隨大將軍催促、寄加世田城、尽欠
種後、焼払乱杭逆向木、致軍忠之上、連日之間、云野類云水手、將又後卷
禦手如此致警固、抽拔群忠之条、島津七郎・官里郡司九郎入道・本田孫二
郎、為同所合戰、被見知畢、然早預御注進、浴恩賞、為施可前面目、恐々
言上如件、

建武三年六月 日

承

(島津貞久)
了 在判

六一 紀俊正軍忠狀案 (前編一四 權執印文書)

52

薩摩國新田宮權執印良遣代子息三郎次郎俊正申、今月廿二日大隅助三郎以下凶徒等寄來之時、最前令馳向薩摩山口、致合戰事、右、散々合戰之案、御見知之上者、早預御注進、為致軍忠之、言上如件、
建武四年三月廿五日

酒匂殿
承 了 在判

六二 足利直義御教書案 (前編一四 權執印文書)

53

薩摩國凶徒等蜂起事、致合戰抽軍忠之由聞食畢、殊以神妙也、亦可勵忠節之狀如件、

建武四年正月十六日

(正永種正)
宮里名主中

(酒匂)
御 判

六三 權執印代俊正軍忠狀案 (前編一四 權執印文書)

54

權執印三郎次郎俊正合戰軍忠事
右、今月十四日夜、市來院赤崎合戰時、致種々軍忠之案、斷島地頭小河小太郎、同小三郎等、同所合戰之間、令見知畢、然早預御注進、為施弓箭面目、言上如件、
建武四年八月 日

(朱書)
一酒匂殿
檢 知 了 在判

六四 權執印代俊正軍忠狀案 (前編一四 權執印文書)

55

薩摩國宮里鄉一分領主權執印良遣代子息三郎次郎俊正申軍忠事
自七月廿五日発向市來城之間、日夜致合戰畢、八月十四日夜、赤崎合戰抽軍忠之子細、守護御代官酒匂兵衛次郎見知之上、同時合戰之人宮里九郎入道

等同見知之訖、九月十七日、重馳向彼城、合戰昼夜致攻戰之案、御見知之上、宮里兵衛三郎、莫福太郎次郎等令存知畢、同并日馳向後巷、致散々合戰之案、石塚弥八、宮里兵衛三郎等令見知畢、右、今年三月以來、云守護所警固、云城攻後巷、合戰軍忠之上者、且給御判、且為預御注進、言上如件、
建武四年十一月 日

(朱書)
「頼久」
島津三郎左衛門尉殿

承 了 在判

六五 執印友雄契狀案 (前編一五 權執印文書)

56

勢万名内僧變膳米式石捌斗參升四合、道嚴被入置雜掌用途質券之間、致結解、依致其并不殘、彼請文一通被撰出候畢、但明年迄々年認許者、可被引募彼僧膳米、其以後者、可被致并之狀、如件、
建武五年五月廿八日

執 印 (花押)

六六 酒匂久景外一名連署充行狀案 (前編一五 權執印文書)

57

為御方、橘籠砦山城、被致軍忠之案、神妙之間、關所地薩摩國宮里六郎次郎入道跡田地事、所被預置也、可被知行候、且此子細可令注進京都候、仍狀如件、
曆應二年六月廿三日

(酒匂)
久 景 在判
道 頭 在判

(俊正)
權執印三郎次郎殿

六七 權執印代俊正軍忠狀案 (前編一五 權執印文書)

58

薩摩國宮里鄉一分領主權執印良遣代子息三郎次郎俊正申軍忠事、今年六月十八日當國南方凶徒等可寄來之由依有其聞、自同日橘籠砦山城、請取水手

矢倉、所致警固也、同十九日為對治御敵式部藤三郎、被遣御方勢之間、俊正自身令免向、燒払藤三郎宿所畢、同月廿日凶徒等押寄碓山城、致合戰之間、俊正於水手致軍忠者也、同廿二日南方凶徒并波谷孫二郎、同小四郎入道、同平次五郎以下御敵等押卷當城、致散々合戰之間、俊正為水手、致合戰之處、同日酉刻御敵打破城太手之山承及之間、走向大手、致軍忠、追掃御敵之衆、酒匂兵衛四郎、高城彦六為同所令見畢、同廿五日夜合戰之時、御敵欲破水手之間、自水手之小城戸、被出御方之勢、令追払御敵之間、俊正為彼人數、打山城之外、追掃御敵之衆、當御奉行御見知畢、同廿九日凶徒等引退碓山城、桶籠人來院淵上城之間、即時馳向彼戰場、欲致合戰之處、城内無人數也、可致警固由被仰之間、致警固畢、然早任軍忠之夷、且預御注進、且為給御証判、粗言上如件、

曆応二年七月 日

承了 在判

(久景)
(追筆)「酒匂殿」

六八 酒匂久景充行狀案 (前編一五 權執印文書)

59

桶籠碓山城、被致軍忠候之段、神妙之間、雖被預置宮里六郎次郎入道跡出、為小所之間、關所之地出來者、迫可有計沙汰旨、可令披露候、仍執達如件、

曆応二年八月六日

(俊正)
權執印三郎次郎殿

(酒匂)
久景 在判

六九 足利直義御教書案 (前編一五 權執印文書)

61

薩摩国凶徒事、相催當国并隅州地頭御家人等、可退治之狀、如件、

曆応三年三月三日

(貞久)
島津上總大進殿

(嚴密)
(足利直義力)
御判

七〇 島津貞久軍勢催促狀 (前編一五 權執印文書)

60

薩摩国凶徒退治事、去三月二日御教書如此、急速致用意、相催一族、可被免向狀、依仰執達如件、

曆応三年五月十五日

(良通)
新田宮權執印殿

(島津貞久)
沙弥 (花押)

七一 島津貞久軍勢催促狀案 (前編一五 權執印文書)

62

薩摩国凶徒退治事、相催一族、致用意、今月廿日以前、可被免向也、仍執達如件、

曆応四年七月七日

(良通)
新田宮權執印殿

(島津貞久)
沙弥 在判

七二 島津貞久軍勢催促狀案 (前編一五 權執印文書)

63

薩摩国凶徒為退治、来月十五日可令免向南方、相催一族、可取向城致用意、可被打越白羽也、仍執達如件、

曆応五年五月廿六日

(良通)
新田宮權執印殿

(島津貞久)
沙弥 在判

七三 八幡新田宮所司神官等請狀 (前編一五 權執印文書)

薩摩国一宮八幡新田宮所司神官等謹進覽之、清被所見狀二通之内、一通、建久五年八月廿二日注文狀、一通、鎮西御教書嘉元二年十一月十九日狀、者、去曆応二年六月廿三三四日南方凶徒等當官濫妨之時、令紛失候之間、不撰出候、若此條偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰各候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆応五年六月五日

檢校僧融俊

檢校僧融榮

檢校僧永榮

僧榮範

經官僧還智

學頭僧兼隆

(追筆)「國分左衛門友成ノ子橋口次郎友

光事カ友光事家忠ト同人ナラハ宝

治ヨリ見エレハ八十九才ナラン、御前檢校長嚴

別人カ」

殿上檢校靜範

殿上檢校春嚴

殿上檢校隆宗

座主榮宗

權執印良還

(追筆)「銘々裏判アリ略ス」
(註)本文書島津家本旧記雜録ニヨリ補フ

七四 權執印代俊正軍忠狀案 (前編一五 權執印文書)

目安

新田宮權執印代三郎次郎俊正申所々合戰忠軍事

一薩摩國南方市來城為退治、去曆応三年八月八日、大將御発向之時、致軍忠畢、

一同十一日、阿多郡池辺城可警固之由、被成御奉書問、罷向之處、同廿九日、御敵等打出觀音寺、茹取作毛之刻、馳向致合戰畢、

一同十一月八日、馳參鹿兒島、取向城權馬榮城、此手迄于矢上右衛門五郎降参之期、連々致合戰忠畢、

一同四年八月、伊集院為平城退治、御発向之時、屬御手致軍忠畢、

64

一同月、阿多郡鯨島城御発向之時、属于御手致軍忠畢、次加世田別府御發向、同致合戰畢、

一同五年八月、谷山城為退治、御発向之時、属于御手、馳向浜手、致合戰畢、

一同九月、在国司入道道超可誅伐之由、依被成御奉書、酒匂次郎左衛門尉久景相共馳向之處、道超没落畢、

同又阿多郡池辺城可警固之由、被仰之問、馳向致忠畢、

一嵯山城可警固之由、被成御奉書之問、自去年十月迄于今年七月致忠畢、右、如此度々軍忠拔群之上者、且預御注進、且給御判、為備後代龜鏡、言上如件、

康永二年九月

承 (島津貞久)
了 総州 在判

七五 權執印代俊正軍忠狀案 (前編一五 權執印文書)

(良通)

薩摩國新田宮權執印代子息三郎次郎俊正申軍忠事

右、鹿兒島郡權馬榮城為退治、大將御発向之問、最前馳参之處、可警固東福寺城之由、被成御奉書之問、自去九月十二日参彼城、迄于今月七日夜權馬榮城没落之期、令警固、致軍忠之上者、給御判、為預御注進、目安言上如件、

康永二年十一月十日

承 (島津貞久)
了 総州 在判

七六 沙弥道義奉書案 (前編一六 權執印文書)

家御教書貞和五六月廿三日到來、御使元俊 (左衛門尉尚義)

当宮今年七月安居僧供頭 (可力) 有御勤仕也、且社家之大宮、且為辨通之御役之問、御坊領平均被宛課者也、仍当正分参拾五貫文、隨御使筑後左衛門尉尚義所勘、米六月十五日以前令京着之様、可致其沙汰也、兼又御使在庄之問

66

尉事、上洛衣裳草手等、殊存別忠可沙汰与之旨、依領家之仰執達如件、

貞和五年二月 日

沙弥道義 奉

新田宮所司神官沙汰人百姓中

七七 平重躬寄進狀 (前編一六 權執印文書)

奉寄進

新田八幡御宝前

薩摩国高城郡内田地五段久留事

右当社者、慈悲万行之名構、朝家無雙之靈神也、然聞以彼田地限永代、令寄附堂官処也、仰願者心中懇祈、身上愁腸、垂哀憐乘加被給、殊別為金輪聖主宝作延長、国土泰平諸家豐饒也、仍奉寄狀如件、

貞和五年八月十二日

平重躬 (花押)

(註) 本文書島津家本旧記雜錄ニヨリ補フ

七八 權執印良邊讓狀案 (前編一七 權執印文書)

讓与 子息三郎次郎俊正所

薩摩国八幡新田宮御領、并五大院内、田畠免田等事

一高城郡五大院御領内、下津町(方カ)宅町本号、九段坪、

一宮里郷、鶴王丸免田、中腹帶六段、并志奈男東部宅段、木名引狀在案文、

通渡之、妻加判畢、又自名平山免田半分矣、

一北園當權執印當屋敷地四至北者通田給公、自東南角、直通卯津本宿畢、

一柿本園一所四至北東老權政所垣根、南者限民部房垣根、西限信濃境、

右、件田園等者、良邊重代相公所領也、然者限永代、所讓与俊正也、宛于色々所役等、以於国庫舛米參斗、毎年仁惣領方可弁之、社頭御勤公事等、

惣領可勤仕也、臨時濟物者、宅町五段分可弁也、又守護方重忠御公事等者、

惣領相共可勤仕之、至于子々孫々、器量子息一人仁可讓与也、不可分讓、

若無男子之時者、惣領子孫可知行、惣領又無男子者、俊正子孫為養子可讓

与也、自先祖不可他人讓沽却之旨所定置也、相互存親子之儀、可令勤仕御

公事、若雖為一事、於背此儀者、可知行違也子孫彼田畠等、仍讓狀如件、

觀成式年辛卯八月十八日

權執印兼五大院政所良邊 在判

七九 尾張義冬軍勢催促狀 (前編一七 執印文書)

大隅薩摩兩國凶徒退治事、去月廿一日重被仰付之間、急速南方所発向也、早一族相共可被致忠節之狀如件、

觀成二年十月二日

左馬助 (尾張義冬) (花押)

新田宮權執印殿

八〇 島津師久充行狀 (前編二〇 執印文書)

薩摩郡内寄田村牧事、被致忠節之間、以別儀所預置也、可被存其旨之狀、如件、

貞治七年三月廿七日

師久 (島津) (花押)

執印左衛門大夫入道殿

八一 島津氏久書狀 (前編二〇 執印文書)

先日計申候料所事、若相違之時者、可致別沙汰候、聊不可有等閑之儀候、兼又寄田村牧事、以別儀預申候、恐々謹言、

應安元年 卯月二日

氏久 (島津) (花押)

執印殿

(朱書) 「遠江守友和カ」

氏久

八二 島津氏家老連署書狀 (附錄一 執印文書)

先札申入候御拜進之馬今日差遣申候、明日明後口兩日之間吉日に而候、各被成談合、涯分御祈念肝要候、彼馬川原毛印為御心得候、此馬一黒之御馬にて候間、別而御祈念可被成之儀專一候、御延引有ましく候、尤事期来□之時候、恐々謹言、

天正十六年戊子

閏五月廿一日

執印河内守殿

御宿所

(朱書)
「右ノ奥ニアリ」

本田下野入道三清

町田出羽入道一言

執印河内守殿

御宿所

八三 島津氏知行充行目録

(附録一 執印文書)

76

八幡新田宮執印吉左衛門尉知行坪付高貳百石、但此内百石分者、於京都高麗抽忠節、仍被下訖、

慶長六年辛丑正月廿四日

とうりやう

上七畦廿歩

修玉田
一 下々の荒壹段九せ十歩

同所

上七畦廿歩

(歟)
一 下々の荒壹段六せ十八歩

榎井

上七畦廿四歩

(歟)
一 下々の荒舟津田貳せ

〇後
欠

同所

八四 樺山久高書状案

(附録一 權執印文書)

75

改年之御慶重々日出申納候、仍川幡新左衛門殿事者、連々嚙被申方にて候間、知行四百石之目録を今月末に可被下之由、旧冬堅固に被仰付候条、先々為御内証、用書札候、在所之儀者罷居られ候処へ乍召置たるべく候、名之儀者、五大村を望次第可被遣候旨候、恐惶謹言、

正月元日

樺山權左衛門

久高

八五 伊集院忠棟書状案

(附録一 權執印文書)

74

改年之御慶重々雖申事旧候、猶更不可有休黒候、万幸々々、然者諸勢大略被列婦候条、其方年來事茂先々婦申候、又貴所御事頃被立候之様に聞得候、如何様追而可申達候、佳事、恐々謹言、

正月十一日

(伊集院)
忠棟判

權執印殿

御宿所

八六 沙弥某奉書

(附録一 權執印文書)

37

石清水八幡宮御同録領家壇□被下焼失事定其間候歟、□就中年々御年貢又抑留何様事□平、尤非無御黒候、但当社御造営者、十二月十四日御遷宮、同被遂放生大会□彼料足雜事等被仰執印方事、定被触之候歟、恐可有其沙汰候、□正氏被下遣候、便宜事可令聞繼給候也、仍執達如件、

二月十日

沙弥(花押)

新田宮權執印御房

八七 龜山上皇院宣案

(附録一 執印文書)

21

新田宮造管間事、重申入候之処、領家沙汰之分可為三分之一之由、最前被宣下候畢、然而其□難置者、所詮於神領者、自今年除御祈禱料田園、配分殘之田地、以彼分可被致急速之沙汰候、於国衛料所之分者、最前敢仰下之

趣、不可有相違候間、御氣色候也、仍執達如件、

(弘安八年九)
三月八日

左中將殿

(藤原)
按察使頼親

八八 島津氏家老連署書狀 (附錄一 執印文書)

72

今度相論之事、以有怨之儀、先日被差置候、神妙之至候、仍惣官職之事、任前々筋目、可有執務候、社司神官等如先規可隨御下知之旨被仰出候、以此趣可有御成敗条、可申中候、恐々謹言、

(宋書)
「文明中」
五月十日

(宋書)
「平田右馬助」
兼 宗 (花押)

(宋書)
「村田肥前守」
絳 安 (花押)

執印殿

八九 法眼性禪奉書案 (附錄一 權執印文書)

13

執印尼公者、五月一日他界□之由被聞食候、了息等令上落□云々条、着之時定有申□歟、執印職事可被仰下也、□其間有限仏神事沙汰、所司等無懈怠勤行之、可相待御下知之由、所被仰下也、仍執達如件、

六月五日

法眼 性禪 □

新田宮所司等中

九〇 龜山上皇院宣案 (附錄一 權執印文書)

23

新田宮造管料所問事、如社家被文者、猶雖多未作之分、日来當作之勤非無其功歟、所詮未作而社并舍屋內仰合社家、相計要須之所々、社家涯分之合力、可被終其功也、年限延引事、地頭郡司等年々濫妨事矣者、所申非無其謂歟、就其日来被定下年限之上、可被延引三ヶ年之由可被仰、如此之間、

御氣色候也、仍執達如件、

六月廿六日
(藤原為世)
左中將殿

(藤原頼親)
按察使 在御判

九一 法印某書狀 (附錄一 權執印文書)

12

(端裏書)

「白八幡、被遣大式殿維寧申二度
建長元年」

薩摩国新田宮申、神王而修復并清被事、去月廿九日御返報承知子細之由仰給候、存外候、被下宣旨、大府宣候之上者、不可有御不審候、又目代請文不見領狀之儀歟、如件請文者、仰主神可遂其節之由、領狀勿論候、此上何可被還府印等候哉、但所觸申之本意、在修復并清被用途事、目代書不審有間、任先例可有御計歟之由、所令申候也、今者此一儀弥志可有御下知候歟、恐々謹言、

八月五日

法印 棟 □ (房カ)

謹上 大式三位殿

九二 左衛門尉時經書狀案 (附錄一 權執印文書)

43

來月十五日当社御放生會御神事各就御在京者、可為何様候哉、若院所役繁多候間、為國難治候、且奉為神其恐候歟、可令延引候者、承其左右、在国代官等之許仁可申下知候歟、恐々謹言、

八月十日

左衛門尉時經 御判有

座王御房
謹上 權執印御房

九三 島津氏家老連署書狀 (附錄一 執印文書)

□々前廉其許へ□人々御案内可申候へ共、見嶋御方角之□又□

条申候〔先かこしま〕〔龍カ〕伯様今月〔新田宮〕為御社参候、此等之趣、至于鹿兒島申入候、定而其許へ可被仰渡と存候、其地之儀彼是御入魂尤候、猶期後音候、恐々謹言、

菊月十八日

喜入大炊助

久正〔花押〕

平田久兵衛

宗親〔花押〕

執印殿

御宿所

九四 村田經安書状〔附録一 執印文書〕

71

度々承候惣官職之事、執印職ニ御定候上者、不可有余儀存候、殊今度御子息其役被沙汰候事歴然候、雖然爰元致披露、濃州相共ニ可申達候、少も無御直等之儀候、恐々謹言、

〔朱書〕

〔文明中〕

霜月廿二日

執印殿

御返報

〔朱書〕

〔村田肥前守經安〕

經安〔花押〕

第三部 祁答院旧記所収文書

一 祁答院郡司大前道秀寄進狀案 (新田八幡宮觀樹院文書)

祁答院郡司大前道秀 謹

進公

御神馬三十足事

右件御神馬、雖有本色蒙社恩、可令宮捌十足之由、蒙御下知之処、猶依訴申不堪由、御詮定五十足之内、且進上如件、

建保四年六月廿八日

郡司大前 有判

二 大前道助讓狀案

(新田八幡宮觀樹院文書)

薩摩國祁答院中津河名

讓与 孫子師道所

右所領者、道助重代相伝之所帶也、師道依為孫子、讓狀如件、

康治元年三月一日

大前道助 有判

三 薩摩國新田宮雜掌重訴狀案

(新田八幡宮觀樹院文書)

薩摩國新田宮雜掌重言上

(人前)

(炭谷重松)

當國祁答院内時吉孫太夫人道并柏原地頭代等、當宮未社祁答院若宮御放生

会破御致齋間、去正和四年就訴申、一番御手口奈古孫四郎、於奉行人被成御

教書畢、而相漏于今渡日六上者、被賦一番御手、被經御沙汰可遂清被之由、

蒙御成敗事

副進二通 本解并御教書案

右子細、先度具言上畢、仍雖被下御教書、時吉孫太夫人道并柏原地頭代等、不応御教書上者、任社例可致清被之由、為蒙御成敗、言上如件、

元応二年五月 日

四 關東下知狀

(新田八幡宮觀樹院文書)

薩摩國新田宮八幡雜掌申違乱神事、憑訴訟如件、前々有其沙汰者、来月廿

日以前、可披露之狀如件、

元応二年十月廿二日

(高時) 前遠江守 (花押)

(炭谷行重) 柏原地頭代

五 炭谷重貴寄進狀案

(新田八幡宮觀樹院文書)

○首部欠
右祁答院大村名之内毎年五ヶ度之御供米之事、無關所炭谷右馬允寄進所
実也、雖為八ヶ度之分、今程者水損成之間、當時五ヶ度ニ罷成候、若如
(元九) 至之田ニ成候ハハ、可為八ヶ度之分也、於子孫不可有退転者也、然者武運
長久、子孫繁昌、御祈禱可被抽丹誠者也、仍為後傳、奇進狀如件、

永正二年乙丑十二月 日

平右馬允重貴 判

第四部 神代三陵志所収文書

一 新田宮所司神官等重解文

薩摩國新田宮所司神官等重謹解申進申文事

諸殊蒙天裁被下、為當國阿多郡北方地頭嚴島刑部丞家高法師、依當宮領五大院田宮男阿多國助等取一神王面、并御鈴、打破二神王面間事、社家難及是非之間、承朝議趣、欲令存知子細狀、

副進 先進所司之解案、付社解具書等、

關東御成敗狀案

当社者八幡三所神明之垂跡、九州五所別宮為第一、自數百歲之昔、泰有五体神王面、日向國天降、之當初五部神前行給、薩摩國遷御之後者、龜山峰奉原三所神明并五神御體、以此社為神田宮、稽之、上古則如斯國家鎮護王面也、爰家高法師怒巧新儀、擬押領五大院田宮男山、關東之御沙汰一切不令承引、剩去年八月廿三日家高法師并代官古行等致狼藉之時、奪取一神王面并御鈴、打破二神王面之案、所司神官等奉隨身破損之面、企參洛、經奏聞之刻、被為在御沙汰於關東之所、於神領違亂事者、兩方一決、所司神官等就理分、被決御成敗之上、家高法師永被改易地頭職畢、
(以下欠)

寶治元年十一月

二 新田宮所司神官等解文

薩摩國八幡新田宮所司神官等謹解申進申文事

請特且任先規且依傍例、奏聞公家、申賜宣旨、被造替當宮正殿已下神殿門廊等子細狀、

副進 証文案

右、謹按旧貫、天尊瓊瓊杵尊山寂御、可愛陵高城千台宮者、今新田八幡宮是也、從天照第三代靈神、為日城無雙之宗廟間、當宮造替事仰付當國宰吏、配分國中莊公、被造勤例敢無異儀、仰先度造替之地為御山麓之間、任所々例、可奉移山頂否之由、被奏聞之日、可奉造山頂之由、被下占形畢、而去

承安三年、件止殿以下門廊等不慮之外炎上之案、相叶御卜冥慮令然歟、然而于今不被遂其節之事、斯神官庭弱而早聽不達故也、悲哉、祠官等瞻陵岳之殿、雖勤式口神事、視神殿廢、欲復往古基跡云々、望請裁斷、且任先規且依傍例、不嫌國中庄公郡鄉、平均支配、不日可被造替之由經奏聞、賜宣旨、早速被遂其節者、將增御神之威光、弥仰敬神之皇化、奉祈無量之宝祚矣、仍為公為私不可不奏之、故粗勒在狀、言上如件、

建長八年四月

執印惟宗友成

○外連署六名

三 左衛門少尉某遵行狀案

新田宮御神拜京進物代□米十六石事、被切渡光富名去年未進候也、御庁宣如此、守此旨可令致沙汰之、牛屎院并加世田別府御初任召物事、自社家任先例可令致其沙汰之由、依國宣執達如件、

正嘉二年 九月十四日

左衛門少尉判

謹上 新田宮執印殿

四 新田宮所司神官等解文

薩摩國八幡新田宮所司神官等謹解申進申文事

請特且任先規且依傍例、經奏聞、申賜宣旨、被造替當宮正殿已下神殿門廊等子細狀、

右、謹按旧記、天尊瓊瓊杵尊山寂御、可愛陵高城千台宮者、今新田八幡宮是也、從天照第三代之靈神為日城無雙之宗廟、而承安三年件止殿已下門廊等不慮之外炎上畢、同四年急可造畢之由、依被下口時勘文、適當官根本造立之地為御山麓、任所々例、可奉移山頂否事、經奏聞之日、可奉造山頂之旨、安元二年之占形嚴重也、然而于今不被遂其節之間、祠官等瞻陵岳之殿、雖勤式口御神事、拜神殿之廢、欲復往古之基跡云々(以下欠)

文永五年正月

五 新田宮所司神官等解文

(前欠) 今度不被遂彼造營者、當宮滅亡之条無異儀者也、而神王兩虫損事、神慮難測之詞、依仰天裁、謹奏伏畢、因茲、情考出貫、大王者猿田彦大神是也、神王者惡魔降伏變化所作神云々、件虫損之条、開寶藏、令拜觀之刻、承蒙古人叛逆之由畢、是則當宮既及廢亡之間、如此之折節希代之不思儀事、神慮所令然歟、雖然為蒙古人降伏、神王悉越彼關戰之途給之由、或乘諸人之口、或有夢想之告、隨蒙古人征伐之条無疑殆、是偏鎮護國家之尊神之故、忝所顯嚴重之奇特給也云々、(以下欠)

文永十二年

六 新田宮所司神官等解文

(前欠) 当社者天照第三靈神瓊瓊杵尊日城無雙之崇廟也、高城千台可愛之陵号新田宮、八幡尊号起自此宮御緣起進覽云、隨而五所別宮專為第一、口祠月祭之勤數百余度有增無減、悉祈天長地久注文進覽云、然間代々賢主寄田園、任々國吏添社領為神領之地、不隨他所役、不勤大小勅院事者也、亦大嘗會召物、造内裏作料、伊勢大神宮役夫公米、造宇佐宮役等者、朝家無雙之大宮、国土平均之重役也、仍不論權門勢家之所領、不憚神社仏寺之共園、悉以難被催促、至當宮御領者、方々之所役一々以勅免、其旨趣風輪未朽、龜鏡猶明云々、(以下欠)

弘安七年十一月

七 新田宮所司神官等解文

薩摩國八幡新田宮所司神官等謹解申進申文事

(前欠)

請殊蒙恩裁、仰同國守護人下野三郎左衛門尉忠宗而可注進當國一宮由、自開東被仰下處、郡内小社開門社存外仁為一宮旨就令競望、忠宗不紀明彼此是非、令閣沙汰、希代未曾有子細狀、

右、謹檢案内、當宮者天下割判之初、乾坤造化之初、地神三代之尊神瓊瓊杵尊之靈廟也、丹之可愛陵、仍天下始起于此神、日本紀曰、此尊者立國之

神聖創業之祖也、是則天照大神与高皇產靈孫也云々、尤可謂古朝第一宮、何況為國中一宮之条無異儀者哉、開門社者天智天皇帝后也、然者云時代、云年紀、不及對揚之条勿論歟云々、(以下欠)

弘安十年三月

執印散位惟宗重兼

○外連署七名

八 新田宮雜掌申狀

薩摩國八幡新田宮雜掌謹言上

欲早且奉為神威不朽、且任先例可被清由蒙御成敗、為薩摩郡内光富又次郎賴秀母堂当社夏越御致齋最中、祇有負物、於路次押取同郡内永利名任人正重妻女間、任先傍例可致誠沙汰由訴申社家間、相触賴秀處、乍令承伏不被清無其謂事、

右、謹檢案内、当社者我朝開闢之当初地神三代尊日城無雙之崇廟也、高城千台可愛之陵号新田宮、八幡尊号起自此宮、隨而五所別宮專為第一、然則神威異他之間、号每年兩度御夏越自六月一日至同廿九日、御放生會御致齋、被禁新殺生、押取買身代等事無之、賴秀任雅意、令押取彼正重妻女、破致齋之間、永利名主如性并正重等依訴申、相触之處、可被清之由、賴秀代官田所人迫於社家乍令承伏、存外改麥、不被清、令成御神事違亂之条、希代所行也、仍御神事雖可令闕怠、為仰上裁、祠官等含愁訴、如形所遂行也、凡急速於無誠御沙汰者、來九月十五日御放生會定猶亂歟、奉為神、奉為上、不可不誠矣、然者早任先傍例、可被清之由、為蒙御成敗、言上如件、

正応元年八月

(註) 本文書口版欠クニヨリ補フ

九 官 宣 旨

左辨官下 向太宰府路次國々

使使部清原國房 從二人

使使部大中臣師廉 從三人 火長一人

右、左大臣宣、奉勅、為令注進言上、管薩摩國新田宮造營事、差件等人、

宛使發遣如件、府宜承知、使者經渡之間、依例賜食馬、路次之國々、宜准此官符送下、

永仁三年

一〇 新田宮所司神官等解文

薩摩國八幡新田宮所司神官等謹言上

欲早被釋御奏聞、被寄附料所於社家、調進神典以下御神宝等、被遂行還宮後、可造畢未作寺等由、被仰下子細事、

副進云々

右、當宮者吾朝開闢之当初、地神三代瓊杵尊靈神日域無雙崇廟也、高城千台可愛陵号新田宮、八幡尊号起自此宮、隨而鎮西五所別宮尊第一也、爰承安回祿之後、不口可造營之由、度々雖被仰下、或任者乍申領掌、不終其功空馳過一任、或任者申子細不遂造營、國務非重大之間、自然令遷替、未終其功之間、連々奇瑞惟多、仍造營事、為異國御祈禱、起自歛慮、重々被御沙汰、為國衛之沙汰、可被造營之由、可被仰下之處、因司依被申子細、被寄附料所於社家之間、正殿四所社武內以下數字造營、猶未作寺社在之、然而假殿朽損之上、適正殿武內以下午造營之、不及遷宮、送年序之条、云神慮云公平、旁以行其恐、任宮崎宮之例、先被遂行御遷宮、於未作分者、被延料所季限、可有其沙汰歟之由就言上、為左小弁于時歲奉行、永仁二年十月廿四日猶被相延季限之由被下綸旨畢、其上於季限者、被差下官使、就注申、可被定下之由、被仰下之間、官使下向事、旅粮以下社家無力雖為難決事、申子細者、可被相貽御不審之由、慙就申領掌、被下宣旨、依被差遣官使國房等、云造營并未作分、云社家收納料所年貢、官使等注進之、仍官務被執奏之間、未作寺社損色功程事、重又被仰官使、被召至要所勸注狀畢、(以下欠)

永仁七年三月

執印惟宗重友

○外連署七名

一一 留守所下文案

留守所下 加世田別府

可早亦勤八幡新田宮當御初任御神拜用物等事

龜絹式疋

布疋反

色草參枚

荒皮壹枚

八丈絹式疋

茜伍兩

紫參兩

糸壹分

綿壹分

古鐵伍口

右、任先例、可令亦勤之狀如件、

正安四年九月廿五日

在國司 在判

一二 新田宮所司神官等解文

薩摩國一宮八幡新田宮所司神官等謹解申請天裁事

○申欠

右、當宮者天下割判之初、乾坤造花之術、地神三代之尊神瓊杵尊之崇廟也、号是可愛陵、仍天下始起于此神云々、尤可謂吾朝第一宮、何況於國中哉、隨而如公家神名帳者、當國仁平新田宮一所許被記之、開門社不被記之、當宮日向國天降高千穗電觸之峯、今御在所是也御事天下始也云々、然者國司每初任、先遂奉幣於當宮、令進宮御神拜用途之後、被執行國務之条先例也云々、(以下欠)

元亨四年五月

執印惟宗友郷

○外連署七名

第五部 新田宮縁起

日本國薩州高城千台可愛陵新田八幡宮大菩薩御緣起

夫我朝日本國者成初起之靈廟、日月方現之權輿也、昔國常立尊如草芽而化為神已來、六代九神陰陽淫洞不知歸去之處焉、慘舒聞然誰弁願來之時矣、既暨伊弉冉二尊降下綴取盧鳴、先生大八秋津洲草木之祖、次生大日靈貴月弓之尊、三千國土肇建、爰彰人物寒暑之序、三才日月終成、已立君臣父子之道、然則十方世界以我國為祖宗、五行星辰以我國為生處、至地神第五之祖彥波瀲尊第四御子神武天皇、始有人皇稱、於是主上繼天尊之苗乃々葉、撰臣承天兄之胤千々聚、因茲國名日本君号天皇、所以支那象尊之國新羅鷄貴之州、若聞我國名、若聞我君号、莫不引手當額至誠凝心者也、又瑜伽云、東有小國、純大藥機、要決云、日本一州悉期成仙、加之華嚴般若頗見我國之奇靈者也、大聖之金言、智人之玉句、仰信尤有憑據、誰敢生狐疑乎、抑此國有五畿七道六十六州、東西五月南北三月、四海蠻夷悉歸皇德、三韓王候自稱臣奴、其中西極南界有一州、郡名曰薩摩、是則天尊瓊杵尊最初降來之時、見塩土翁而構城壁堆堞起高城千台宮之處也、可愛陵山現在高城千台之名未改、此尊治三十一萬八千五百四十二年、既云天降即可淨居梵種、因茲遊止之處、梵尊薩摩之名未改易、大菩薩者妙義又大悲義也、
摩者法義又大智義也、然則妙法蓮華最深秘密之身處、大日覺王瑜伽理智之心城可名薩摩、千台者一心即八葉中台一心即百界千如故也、當知是處古仙道場法輪轉耳、不知神世七代者、即過去七仙歟、又不知新田八幡者即秘傳八葉歟、如彼狗留孫仙入滅之後、仙恩比丘苦行終九十五種外道、皆因仙法而起、今亦如此、瓊杵尊隱寂之後、彥波瀲尊尊葬之卒置酒享祭之禮、朱絃楚越之樂雖在神道之儀、皆是仙々作々古法也、夫天尊尊同曰種姓東神西仙何有異途乎、又可愛陵者說也、八幡宮者即天尊門寂塔也、所以記云、此尊立國之神聖創業之天祖也、是則天照大神與高皇產靈之孫也、故曰率孫命、二祖特鍾愛以崇養焉、遂欲為尊尊原中國之主、然彼地多有螢火光神及蠅而邪神、故高皇產靈尊召集八十諸神、問可撥平彼邪鬼之者、衆曰天穗日命倭神也、仍降之、此神倭神于大日貴神、素戔鳴尊子、同作之神也、已及三年不報聞、仍降遣其子大背飯三熊之人人、還順其父不報聞、次又降遣大稚彥、賜天鹿兒弓天羽々矢、此神又吾欲取其國、娶下照姬之女也、留住之、是時奇之、乃遣無名雄伺之、其雄飛降止於天稚彥門前湯津桂木之梢、時天探女見而謂彥曰、奇鳥來居桂梢、彥乃取天鹿兒弓天羽々矢射落之、其矢洞達雄胸而至高皇產靈之座前、其矢染血、尊曰、昔我賜彥之矢也、蓋與國神戰而然歟、即取矢投下、其矢落下中彥之胸上立死、是後更命群神議之、衆曰、經津主神取神也、時武甕槌神、今常陸國、神島神也、二神降出到雲國五十田狹小汀、拔十握劍倒植於地斷其鋒、問大日貴神曰、天初欲降皇孫、故遣我二神降降平定、汝意如何、對曰、當問我子、將報命、是時事代主神好遊行約三穗之確、仍遣使者告神勅時、謂使者曰、今天神有勅、我父宜避、吾亦不可違、古語拾遺云、大日貴神、事代主神與少彥名神共戮力、一心經營天下并皆奉避少彥名神、高皇產靈之子遂逝常世國、又事代主神女後世為國母也、二神乃復命奏此旨、即以平國時所杖之弓矛授二神曰、此矛卒有治功、天孫若用之治者此當平安、今我將歸去、于時高皇產靈尊以真床迫衾覆於皇孫使降之、一書曰、天神遣二神經津主瓊槌也、先行驅除還復曰、皆已平竟、又說曰、大物主及事代主神八十萬神昇天陳其婦順之由、于時高皇尊勅大物主神、汝若以國神為妻、若猶謂汝有疎心、故今以吾女三穗津姬配汝為妻、宜領八十萬神永奉護、乃使降云々、是後天神乃賜天忍穗耳尊八坂瓊玉及八咫鏡草薙劍三種宝物曰、永為天璽、所謂神璽鏡劍是也、又說云、是時天神手持寶鏡當猶視吾、可與同床共殿以為曆鏡云々、復以五部神、天兒屋根命、太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉屋命、因勅曰、豐葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可為主之地也、宜爾就而治行矣、宝祚之隆當与天壤無窮矣、又說、天忍穗耳尊居於虛天而生兒、号瓊杵尊、因有奏曰、欲以此皇孫代親降、故以天兒屋根命等及諸部神悉皆相授、且服御之物一依前授云々、古語拾遺云、宜太玉主命率諸神供奉職如天上儀、仍令諸神亦与陪從、復勅大物主神、宜領八十萬神永為皇孫奉護、仍使大伴遠祖、來日部遠祖前獻云々、先獻者還曰、有一神居天八達之衝、其身長七咫、背長七尺余、口明細眼如八咫鏡而赫然作赤酸醬、即遣從神往問、時八十萬神皆不得日勝問之、鈿女命乃露其胸乳、抑裳帶於臍下而咲嚙向立、是時從神問曰、汝何為然耶、反問曰、天孫所幸之路居之者誰也、從神對曰、聞天孫必降、故奉迎相待、吾名獵田彥大神、鈿女復問、汝必到何處、天孫必到何處耶、對曰、天孫當到筑紫日向高千穗穗之峯、吾必到伊勢狹長田五十鈴河之上、因曰、竟爾者汝也、故可

以送我而到之矣、鉏女還詣報狀、天孫降跡果皆如斯、皇孫乃離天磐座、排天八重雲、稜威之道別云々、而天降於日向襲之高千穗之峯矣、即到於吾田長屋笠狹崎之時、其地有一人、号事勝國勝長狹、一書云、伊弉諾尊子、亦名塩土翁、

皇孫問曰、有国耶、对曰、在焉、請任意遊之、故皇孫就而留住矣、又記曰、瓊々杵尊治天下後葬日向可愛陵云々、昔三州同名日向、今薩摩是也、或記云、和銅元年立薩摩州、今云、河合者訛也、

夫二祖特崇養、故以此尊可可愛尊、因之其処名可愛陵也、葬歟之後、至于神武天皇元年辛酉、百四十七万三千九百三十四年也、自神武天皇即位至于当今建保甲戌千八百七十二年也、問、今者既云八幡宮、何謂天孫瓊々杵尊乎、答、此尊尤可号八幡也、昔天照大神与素戔嗚尊誓約之時、八坂瓊之玉委作五人男子、其第一是此尊之父忍穗耳之尊也、此尊降來之時、天神与八咫鏡而祝曰、汝見此鏡即見我身同床同語云々、八之字自得其意、幡者此尊母倭幡下々姬也、爾即幡字因母也、鏡与幡其義一也、有深義、所以星霜運百萬余、雖不委天尊十号、神人伝而曰、八幡宮須仰信直理一法、故知天照大神之御孫皆可名八幡也、爾則我八幡新田宮者是自天照大神第三代、彼八幡字倭宮自天照大神第廿一代、亦八幡正宮或說、陳大玉女夢見日光所照行振孃而生云々、若爾自彼陳已後纔得六百余年也、但於陳有前後若十二侯之中陳歟、今陳大王者、前後難知、若前陳是及千五百年、因茲雖同一孫、前後高下自可知者也、抑此処為蘇四神相応靈龜以象其山、五氣具出仙人則棲此廂墳土臺、色色廟樹現光光万乘君子崇敬田累代刺史欽仰地、但有陵岳嚴端殿頽壞而旧如何、聞仙洞再得復故宮、斗藪瑛昌宿緣被引寓止当宮、感悃頻々軒帝華胥、爰靈応教々穆王虛變宮、仍以謹記之、願也神尊弘天廻慈眼、垂悲愍、瑛昌謹記、

建保甲戌三月 日

新田八幡御縁起一卷者、座主觀樹院法印覺重依所望染患筆畢、

寛文八年申五月下旬

後宇多天皇数代孫從四位上葛岡修理權大夫源宣慶朝臣（花押）

第六部 執印氏系図

筑前介 八文字民部大夫
 国 広 忠 友 忠 康 豊後守
 忠 友 忠 久
 兵衛尉
 忠 季
 山城介
 成 光 国 広 忠 友 忠 康
 筑前介



惟宗姓執印氏系図 (地誌備考二 薩摩国高城郡)

(上世系)

康友

藤内内舍人右馬允大夫判官

鹿兒島郡司并弁済使職○文治年間之頃於禁裏薩摩国新田宮執印職并五大院之主職被補康友子孫代々二男友久・同国高城郡国分寺留守同所天満宮被補別当職云々而康友友久相共伝是子孫右寺社領之為領主而自鎌倉將軍家至室町將軍世々為御家人

下

薩摩国新田宮執印并五大院々主職事

判
惟宗康友

右件所職散在名田畠等無相違可令領掌但于御公事云々任先例可致沙汰之状如件

建仁三年十月廿六日

康村

又康兼 鹿兒島太郎中務允

鹿兒島郡司并弁済使職新田宮執印職迎阿後夫

友久

国分寺留守左衛門尉右近將監迎阿先夫

川内国分城主天満宮別当職

薩摩国高城郡国分寺ハ聖武天皇天平年中御建立一國一寺之大地

同所天満宮村上天皇心和三癸亥御建立

右文治建久之比薩摩国之内百四郷余之寺社領

友成

太郎隱岐守周防守左衛門

母迎阿 始父友久為妻友成師久康秀生三子後嫁執印康村康

村卒上之役勤執印職為尼号迎阿弥陀仏 三男康秀

ニ讓之康秀後改重兼正文アリ

建久年中川内国分城主国分寺留主天満宮別当職

師久

号吉永右衛門尉右兵衛尉法名四信

母友成同薩州市比野領主

康秀

右兵衛尉

執印康村之為家跡改重兼○自慈母迎阿執印職令相伝之執印三代為家督

友氏

右衛門尉

先父死故不継家統

友員

備後守左衛門尉

弘長二年壬戌七月十日忠鎌家命勤京都大番役

○川内国分城主国分寺留主天満宮別当職

友賢

又友兼備後次郎筑前先主掃部介

弘安四年蒙古襲來之時軍功有之○川内国分城主留主別当面職

康弘

鹿兒島小太郎左馬允

康邦

鹿兒島中務次郎本名佐兼

重兼

三郎兵衛尉右兵衛尉

実国分右近將監友久三男初名康秀也

母迎阿○母自迎阿執印職相伝之寛元元年八月

薩摩国新田宮執印職并五大院々主職事就関東御教書

任重代相松被還補畢云々下文器

永仁五年六月 日

左衛門尉朝員判

重友

三郎

新田宮執印職 永仁五年十一月十一日 ○社領々主

忠兼

初名人夜叉四郎

友郷

孫三郎○新田宮執印職相伝社領之領主友郷一期之領主也

友雄

又三郎左衛門太夫

新田宮執印職

繪旨

薩摩國八幡新田宮所司神官等中初任神拜序宣事任例不日可致其沙汰之由
被仰司工畢可令存知給之旨天氣所候也仍執啓如件

六月四日

兵部卿

左衛門督殿

薩摩國新田宮執印職當知行上者不可有相違者天氣如此仍悉之以狀

元弘三年七月三日

式部少輔範國

去三月廿九日御奉書謹拜見仕候訖抑左衛門大夫友雄所領薩摩國新田宮執
印職并五大院々主職及散在名田畠免田等安堵事當知行無相違候將又可支
申仁有無事不令存知候若此条偽申候者八幡大菩薩御罰可罷蒙候以此旨可
有可有御披露候哉恐惶謹言

曆應四年六月廿三日

左衛門少尉宗久請文

高城郡司内重豊領分半分事御知行不可有相違候此段且廷尉方可申談候
恐々謹言

七月十六日

氏久判

執印左衛門大夫入道殿

友躬

三郎遠江守○新田宮執印職

友令

豊前守○新田宮執印職應永二十年六月廿九日父友躬讓狀アリ

康令

左衛門太夫○新田宮執印職

康秀

三郎

新田宮執印職

友秀

三郎○新田宮執印職

康隆

遠江守○永正十一年頃襲新田宮執印職

公友

三郎二郎

天文三年甲午四月三日於水引内九礼橋討死主從十二人
年二十九

康船

遠江守

永祿七年頃襲新田宮執印職

良友

河内守○新田宮執印職

友則

本名康國政清友吉永吉左衛門丹波守
文祿慶長元和中軍功著

友春

丹波守○新田宮執印職

友慶

久左衛門○新田宮執印職

友幸

久左衛門丹下○新田宮執印職
寛文三年生、享保十七年死

友張

吉太丹下○新田宮執印職
安永二年死

友為

久馬

友巾

丹下

友宗

吉太

友賢

吉左衛門

附

録

(新田神社所蔵銅鏡々背銘文并禁制札)

一 銅鏡々背銘文 (經一九經)

左衛門尉友俊

永仁二年三月十八日

二 九鬼嘉隆等禁制木札 (三〇經×三六・五經)

禁制 宮内

兵船軍勢乱妨
狼藉放火堅令停
止候、此旨和背輩
可加成敗者也

九鬼 大隅守 (花押)

脇坂中務少輔 (花押)

加藤 左馬助 (花押)

卯月廿七日

小西 日向守 (花押)

三 木 札

(三一・五經×三二・三經)

就八幡新田宮御建立ニ
御造争中相詰喉、為後
代之三書之候付畢

慶長七年四月三日

鹿兒島之任人

柳八緑花八紅

藤崎 善介 (花押)

編
年
目
録

一	保延元年十月廿五日	院王石清水權寺王大法師某下文	二ノ一
二	康治元年三月一日	大前道助讓狀案	三ノ二
三	長寛二年六月一日	五大院主桑田信包申狀	二ノ二
四	永萬元年七月一日	寺家政所下文	一ノ一〇七イ
五	治承元年十一月五日	新田宮所課染絹請取狀案	二ノ三
六	治承元年十二月十三日	新田宮檢校僧靜秀去狀案	二ノ四
七	建久五年五月一日	新田八幡宮所司等申狀	二ノ五
八	建久九年三月一日	高城新郡司豊津友安奉免狀	二ノ六
九	建仁元年十一月廿二日	北条時政奉書案	一ノ七二イ
一〇	建仁三年十月廿六日	北条時政下文案	一ノ二五イ
一一	建仁三年十二月九日	北条時政雜奉書案	一ノ二五ロ
一二	建仁四年二月十日	紀政家寄進狀	二ノ七
一三	建保四年六月廿八日	那答院郡司大前道秀寄進狀案	三ノ一
一四	承久三年八月廿一日	薩摩國庁下文	二ノ八
一五	承久三年十月三日	執印康友解狀案	一ノ二五ハ
一六	承久三年十月三日	執印康友解狀案(略)	一ノ六九イ
一七	嘉祿三年十二月廿四日	關東御教書案	一ノ二五チ
一八	寛喜二年三月七日	八幡新田宮所司神官等請文案	二ノ九
一九	貞永元年閏九月八日	關東御教書案	一ノ二五ニ
二〇	貞永元年十二月廿日	執印康友下文案	二ノ一〇
二一	天福元年六月廿八日	關東御教書案	一ノ二五ホ
二二	文曆二年九月十六日	關東御教書案	一ノ二五ヘ
二三	嘉禎四年十二月一日	八幡新田宮權大宮司大藏種良陳狀	二ノ一一
二四	延應元年五月一日	寺家公文所下文	二ノ一二
二五	仁治元年七月三日	北条泰時書狀案	一ノ二五リ
二六	仁治二年正月十九日	富摩手繼狀案	一ノ一〇七ロ
二七	寛元元年八月十日	五大院主迎阿讓狀	一ノ一二
二八	寛元元年八月十日	五大院主迎阿讓狀案	一ノ七〇
二九	宝治元年十月廿五日	關東下知狀案	一ノ七一
三〇	宝治元年十月廿五日	關東御教書案	二ノ一三

三一	宝治元年十一月	新田宮所司神官等重解文	四ノ一
三二	建長元年八月十一日	六波羅御教書案	二ノ一四
三三	建長三年六月廿八日	新田宮執印見參料請取狀案	二ノ一五
三四	建長八年四月	新田宮所司神官等解文	四ノ二
三五	正嘉二年九月十四日	左衛門尉某遵行狀案	四ノ三
三六	弘長元年四月一日	六波羅御教書案	一ノ七二ハ
三七	弘長三年九月三日	關東御教書案	一ノ二五ル
三八	文永四年四月廿七日	奉行人藤原某奉書	二ノ一六
三九	文永四年十月廿三日	執印友員相博狀案	一ノ六二
四〇	文永四年十月廿九日	左衛門尉友員相博狀	二ノ一七
四一	文永四年十一月七日	權執印永慶重申狀	二ノ一八
四二	文永五年正月	新田宮所司神官等解文	四ノ四
四三	文永五年三月一日	江口信阿弥陀仏讓狀	一ノ二六
四四	文永十年八月廿三日	紀持房証狀	二ノ一九
四五	文永十二年(月日未詳)	新田宮所司神官等解文	四ノ五
四六	建治三年十一月七日	雜掌某書狀案	二ノ二〇
四七	弘安元年三月十一日	道胤書下	二ノ二一
四八	弘安元年閏十月十七日	六波羅御教書案	二ノ二二
四九	弘安元年閏十月廿二日	某下文	二ノ二三
五〇	弘安二年五月十日	龜山上皇院宣案	二ノ二四
五一	弘安三年八月一日	平重峯申狀案	二ノ二五
五二	弘安四年閏七月廿六日	沙弥某奉書	二ノ二六
五三	弘安七年十一月	新田宮所司神官等解文	四ノ六
五四	弘安八年二月廿日	關東御教書案	二ノ二七
五五	弘安九年正月廿一日	大前道調藤原久氏連署書下案	二ノ二八
五六	弘安九年九月廿三日	按察使下文案	二ノ二九
五七	弘安九年十月一日	石築地用途支配注文案	二ノ三〇
五八	弘安十年三月	新田宮所司神官等解文	四ノ七
五九	弘安十一年五月廿一日	別府多田兩名主代行通請文	一ノ二八
六〇	正應元年六月一日	串木野忠行後家尼如何申狀	二ノ三一

六一	正應元年七月廿五日	本仏書下案	二ノ三二	九一	正安二年八月十七日	左衛門尉朝員奉書案	一ノ五九
六二	正應元年八月十五日	本仏書下案	二ノ三三	九二	正安三年六月六日	鎮西下知狀	一ノ一一
六三	正應元年八月	新田宮雜掌申狀	四ノ八	九三	正安四年九月廿五日	留守所下文案	四ノ一一
六四	正應二年二月	新田宮雜掌重申狀	二ノ三四	九四	嘉元三年十月	新田宮雜掌道久重申狀	二ノ四〇
六五	正應二年四月七日	關東下知狀案	一ノ二三	九五	嘉元三年十一月二日	鎮西御教書案	二ノ四一
六六	正應二年七月四日	新田宮命婦建部氏女重申狀案	二ノ三五	九六	嘉元三年十一月廿日	平某施行狀案	二ノ四二
六七	正應二年八月二日	關東下知狀案	二ノ三六	九七	嘉元四年五月廿五日	阿多五大院田名主蓮道請文	一ノ二九
六八	正應二年八月十七日	鎮西奉行連署奉書	二ノ三七	九八	德治三年八月	權執印妙慶申狀	二ノ四三
六九	正應二年十月	關分友兼重申狀案	一ノ二三	九九	延慶二年十二月十二日	鎮西下知狀案	二ノ四四
七〇	正應四年三月六日	島津忠宗施行狀	一ノ六	一〇〇	(延慶三年)九月十八日	惟宗友行書狀	一ノ三六
七一	正應四年六月十七日	鎮西奉行施行狀	一ノ五	一〇一	延慶三年十一月十二日	鎮西御教書案	二ノ四六
七二	正應五年二月五日	鎮西奉行奉書	二ノ三八	一〇二	延慶三年十二月五日	沙弥道雄起請文案	二ノ四七
七三	正應六年三月廿日	關東御教書案	一ノ七四	一〇三	正和二年六月十七日	律法忍讓狀案	一ノ二四
七四	正應六年四月廿日	島津忠宗施行狀	一ノ七	一〇四	正和二年十月	權執印妙慶申狀案	一ノ二〇
七五	正應六年四月廿日	島津忠宗書下案	一ノ七四	一〇五	文保元年七月晦日	薩摩國御家人交名注文案	二ノ四七
七六	正應六年五月十一日	島津忠宗書下案	一ノ七四	一〇六	文保元年十月十一日	田仏讓狀	二ノ四八
七七	正應六年五月十一日	島津忠宗書下案	一ノ七四	一〇七	元應二年五月	薩摩國新田宮雜掌電訴狀案	三ノ三
七八	永仁二年七月卅日	島津忠宗番役覆勘狀	一ノ三九	一〇八	元應二年六月十一日	何日何韻連歌懷紙	一ノ一五
七九	永仁三年四月十六日	島津忠宗番役覆勘狀	一ノ四〇	一〇九	元應二年十月廿二日	關東下知狀	三ノ四
八〇	永仁三年五月六日	關東御教書	一ノ九	一一〇	元應二年十二月十日	島津忠宗問狀	一ノ四一
八一	永仁三年五月六日	關東御教書案	一ノ六九	一一一	元亨三年正月五日	何人百韻連歌懷紙	一ノ一四
八二	永仁三年七月十一日	左衛門尉朝員奉書	一ノ八	一一二	元亨三年四月十七日	阿多泰忠請文	一ノ三〇
八三	永仁三年(月日未詳)	官宣旨	四ノ九	一一三	元亨三年八月	新田宮本神人等名帳写	一ノ一三
八四	永仁五年六月	左衛門尉朝員奉書	一ノ一〇	一一四	元亨三年九月十六日	鎮西御教書	一ノ一二
八五	永仁五年六月	左衛門尉朝員奉書案	一ノ六九	一一五	元亨三年九月十六日	鎮西下知狀	一ノ一三
八六	永仁五年六月	左衛門尉朝員奉書案(略)	一ノ七六	一一六	元亨三年十一月十六日	鎮西御教書	一ノ一四
八七	永仁五年十一月十一日	執印道教讓狀	一ノ六三	一一七	元亨四年五月	新田宮所司神官等解文	四ノ一二
八八	永仁六年十月	新田宮權執印妙慶僧榮仙重申狀	二ノ三九	一一八	元亨四年八月廿八日	領家御教書案	一ノ九二
八九	永仁七年三月	新田宮所司神官等解文	四ノ一〇	一一九	元亨四年八月廿八日	領家下知狀案	一ノ九三
九〇	正安二年五月十日	某讓狀斷簡	一ノ五九	一二〇	元亨四年十一月十日	島津貞久覆勘狀案	一ノ一六

一二一	元亨五年閏正月 日	權執印妙慶申狀案	一ノ九四	一五一	元德三年七月二日	鎮西御教書案	一ノ一二八
一二二	正中二年九月五日	鎮西御教書	二ノ四九	一五二	元德三年七月九日	鎮西御教書与	一ノ一〇八〇
一二三	正中二年十一月十八日	沙弥宗覺普狀案	一ノ一五	一五三	元德三年十月十七日	紀俊正着到狀案	一ノ一〇六〇
一二四	正中二年十一月十八日	沙弥宗覺普狀案	二ノ五〇	一五四	元德四年七月 日	新田宮雜掌道海申狀案	一ノ一一七
一二五	正中三年四月廿二日	權執印妙慶讓狀案	一ノ九五	一五五	元德四年七月 日	新田宮雜掌道海申狀案(略)	一ノ一一八
一二六	正中三年四月廿八日	權執印妙慶讓狀案	一ノ九六	一五六	元德四年七月 日	新田宮雜位道海重申狀案	一ノ一二〇
一二七	嘉曆元年十二月四日	大隅新三郎久願書狀案	一ノ九七	一五七	正慶元年八月十日	鎮西御教書案	一ノ一二一
一二八	嘉曆二年七月五日	鎮西御教書案	一ノ九八	一五八	正慶二年四月一日	鎮西御教書并島津貞久書下案	二ノ五二
一二九	嘉曆二年七月五日	鎮西御教書案	一ノ九九	一五九	(元弘三年)六月四日	後醍醐天皇綸旨	一ノ一
一三〇	嘉曆二年七月五日	鎮西御教書案	一ノ一〇〇	一六〇	元弘三年七月三日	後醍醐天皇綸旨	一ノ三
一三一	嘉曆二年七月卅日	沙弥道嚴惟宗友雄連署田地壳券案	一ノ六五	一六一	元弘三年七月三日	權執印良連着到狀案	一ノ一一九
一三二	嘉曆二年八月三日	道嚴安堵狀案	一ノ三一	一六二	元弘三年十月廿三日	權執印良連着到狀案	二ノ五三
一三三	嘉曆二年十月廿八日	沙弥教忍同道惠連署田地壳券案	一ノ六四	一六三	元弘三年十月 日	預所肥後守書下案	二ノ五四
一三四	嘉曆三年七月三日	鎮西御教書案	一ノ一〇二	一六四	元弘三年十二月十二日	新田宮領家雜掌沙弥某奉書	二ノ五五
一三五	嘉曆三年七月 日	新田宮雜掌道海申狀案	一ノ一〇〇	一六五	建武元年十月七日	国宣案	二ノ五六
一三六	嘉曆三年(月日未詳)	新田宮國分氏相論証人交名注文案	一ノ一〇一	一六六	建武二年八月十一日	雜訴決斷所牒	一ノ一七
一三七	嘉曆四年正月廿三日	鎮西御教書	一ノ三二	一六七	建武二年後十月一日	某書下案	二ノ五七
一三八	元德二年三月十二日	權執印良連請文案	一ノ一〇三	一六八	建武三年三月廿八日	足利尊氏軍勢催促御教書	一ノ四二
一三九	元德二年六月 日	新田宮雜掌道海申狀案	一ノ一〇四	一六九	建武三年三月廿八日	足利尊氏軍勢催促狀案	二ノ五八
一四〇	元德二年六月 日	新田宮雜掌道海申狀案	一ノ一〇五	一七〇	建武三年四月廿五日	紀俊正着到狀案	二ノ五九
一四一	元德二年八月五日	鎮西御教書案	一ノ一〇六	一七一	建武三年四月廿八日	執印友雄着到狀	一ノ四三
一四二	元德二年十月廿五日	鎮西御教書案	二ノ五一	一七二	建武三年六月 日	紀俊正軍忠狀案	二ノ六〇
一四三	元德二年十月廿九日	鎮西下知狀	一ノ一六	一七三	建武四年二月十二日	足利直義軍勢催促御教書	一ノ四四
一四四	元德三年二月 日	權執印良連重申狀案	一ノ九二	一七四	建武四年三月廿五日	紀俊正軍忠狀案	二ノ六一
一四五	元德三年三月十一日	後醍醐天皇綸旨案	一ノ一一〇	一七五	建武四年五月十六日	足利直義御教書案	二ノ六二
一四六	元德三年五月十日	鎮西御教書与	一ノ一〇八	一七六	建武四年八月 日	權執印代俊正軍忠狀案	二ノ六三
一四七	元德三年五月 日	新田宮雜掌道海重申狀案	一ノ一〇九	一七七	建武四年十一月 日	權執印代俊正軍忠狀案	二ノ六四
一四八	元德三年六月十一日	新田宮五代院領家下知狀案	一ノ一一一	一七八	建武五年五月廿八日	執印友雄契狀案	二ノ六五
一四九	元德三年六月 日	新田宮雜掌道海重申狀案	一ノ一一〇	一七九	曆應二年六月廿三日	酒匂久景外一名連署充行狀案	二ノ六六
一五〇	元德三年七月一日	新田宮領家雜掌奉書案	一ノ一一八	一八〇	曆應二年七月 日	權執印代俊正軍忠狀案	二ノ六七

一八一	曆應二年八月六日	酒匂久景充行狀案	二ノ六八	二二一	文和三年八月廿九日	一色直氏感狀	一ノ五一
一八二	曆應二年八月十五日	酒匂久景注進狀	一ノ八〇	二二二	文和三年九月三日	足利尊氏御感御教書	一ノ五二
一八三	曆應二年十一月廿一日	光明院口宣案	一ノ四	二二三	文和四年三月三日	島津師久軍勢催促狀	一ノ五三
一八四	曆應三年三月三日	足利直義御教書案	二ノ六九	二二四	文和五年二月廿二日	島津師久施行狀	一ノ五五
一八五	曆應三年五月十五日	島津貞久軍勢催促狀	二ノ七〇	二二五	貞治七年二月三日	島津氏久契約狀	一ノ五八
一八六	曆應四年四月七日	沙弥輝嚴請文案	一ノ七七〇	二二六	貞治七年三月廿七日	島津師久充行狀	二ノ八〇
一八七	曆應四年六月廿三日	山田宗久請文案	一ノ七七イ	二二七	(應安元年)四月二日	島津氏久書狀	二ノ八一
一八八	曆應四年六月廿三日	山田宗久請文案	一ノ七七一	二二八	嘉慶二年九月日	執印友躬請文案	一ノ三七
一八九	曆應四年七月七日	島津貞久軍勢催促狀案	一ノ一八	二二九	應永三年二月十三日	阿蘇谷久治寄進狀	一ノ三八
一九〇	曆應四年七月廿五日	牛屎元貞請文案	一ノ一九	二三〇	應永十年十月九日	島津元久安堵狀	一ノ六〇
一九一	曆應五年三月五日	東郷重清請文案	一ノ一八	二二一	應永十二年正月廿日	平重足契約狀	一ノ二一
一九二	曆應五年五月廿六日	島津貞久軍勢催促狀案	二ノ七二	二二二	應永廿年六月廿九日	沙弥願真讓狀	一ノ六七
一九三	曆應五年六月五日	八幡新出宮所司神官等請文案	二ノ七三	二二三	應永廿八年八月廿三日	島津久豐知行充行狀	一ノ六一
一九四	康永元年七月廿九日	高重茂奉書	一ノ二〇	二二四	文安三年十二月十三日	前遠江守康令讓狀	一ノ六八
一九五	康永元年九月廿四日	武光忍性請文案	一ノ七九	二二五	文明十年三月六日	島津氏家老連署神領寄進狀	一ノ八三
一九六	康永二年九月日	權執印代俊正軍忠狀案	二ノ七四	二二六	永正二年十二月日	淡谷重貴寄進狀案	三ノ五
一九七	康永二年十一月十日	權執印代俊正軍忠狀案	二ノ七五	二二七	天正十六年閏五月廿一日	島津氏家老連署書狀	二ノ八二
一九八	康永三年二月四日	足利幕府奉行連署奉書	一ノ四五	二二八	慶長四年十月廿八日	島津忠恒知行充行目錄	一ノ八一
一九九	康永三年二月廿五日	ゆた六郎忠経質券	一ノ三四	二二九	慶長六年正月廿四日	島津氏知行充行目錄	二ノ八三
二〇〇	貞和五年二月日	沙弥道義奉書案	二ノ七六	二三〇	慶長七年十二月廿四日	島津氏家老連署社領寄進狀	一ノ八七
二〇一	貞和五年八月十二日	平重躬寄進狀	二ノ七七	二三一	慶長十年正月廿九日	島津氏家老社領寄進狀	一ノ八八
二〇二	觀應二年七月廿四日	惟宗時友請文案	一ノ三五	二三二	慶長二十年正月四日	京泊船改条日	一ノ九一
二〇三	觀應二年八月十八日	權執印良進讓狀案	二ノ七八	二三三	寬文三年六月十九日	權執印外二名連署請文案	一ノ九〇
二〇四	觀應二年八月廿八日	尾張義冬軍勢催促狀	一ノ四六	〔年末詳及び年月日未詳の分〕			
二〇五	觀應二年十月二日	尾張義冬軍勢催促狀	二ノ七九	二三四	正月元日	樺山久高書狀案	二ノ八四
二〇六	觀應三年六月五日	足利義詮軍勢催促御教書	一ノ四七	二三五	正月十一日	伊集院忠宗書狀案	二ノ八五
二〇七	正平七年十月二日	執印友躬避狀	一ノ六六	二三六	正月十二日	島津家久書狀	一ノ八二
二〇八	文和二年三月十日	足利義詮御感御教書	一ノ四八	二三七	二月八日	島津氏家老連署書狀	一ノ八五
二〇九	文和二年四月廿六日	一色直氏軍勢催促狀	一ノ四九	二三八	二月十日	沙弥某奉書	二ノ八六
二一〇	文和三年七月十日	一色範氏感狀	一ノ五〇	二三九	三月八日	龜山上皇院宣案	二ノ八七

二四〇	五月十日	島津氏家老連署書狀	一ノ八四
二四一	五月十日	島津氏家老連署書狀	二ノ八八
二四二	六月五日	法眼性禪奉書案	二ノ八九
二四三	六月十七日	島津氏久書狀	一ノ五四
二四四	六月廿六日	龜山上皇院宣案	二ノ九〇
二四五	七月十二日	山田忠繼請文案	一ノ二五又
二四六	七月十六日	島津氏久安堵狀	一ノ五七
二四七	八月五日	法印某書狀	二ノ九一
二四八	八月十日	左衛門尉時經書狀案	二ノ九二
二四九	後八月廿八日	島津氏家老連署書狀	一ノ八六
二五〇	九月十八日	島津氏家老連署書狀	二ノ九三
二五一	九月廿日	御遷宮覺書	一ノ八九
二五二	九月廿七日	島津師久書狀	一ノ五六
二五三	十月廿一日	石清水八幡宮檢校御教書案	一ノ二七
二五四	十一月四日	島津忠義奉狀案	一ノ二五下
二五五	十一月廿二日	村田經安書狀	二ノ九四
二五六	十二月廿二日	山田忠繼請文案	一ノ七二〇
二五七		引付衆交名注文写	一ノ七三
二五八		国分友兼重申狀案	一ノ七五
二五九		某請文案	一ノ七八

鹿児島県史料刊行委員会

(アイウエオ順)

芳 即 正 鹿児島市教育委員会

川 越 正 則 南日本新聞社

北 川 鉄 三 鹿児島大学教育学部

五 味 克 夫 同 文学部

竹 内 理 三 東京大学史料編纂所

林 田 真 三 郎 同

原 口 虎 雄 鹿児島大学水産学部

福 満 武 夫 鹿児島毎日新聞社

村 野 守 次 鹿児島県立甲南高等学校

桃 園 恵 真 鹿児島大学文学部

非売品

昭和三十八年二月十日

鹿児島市山下町一四七

発行所 鹿児島県立図書館

印刷所 鹿児島県教員互助会印刷部

薩摩国新田神社文書

